

国立国語研究所学術情報リポジトリ

平成元年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001217

平成元年度

国立国語研究所年報

—41—

国立国語研究所

1990

平成元年度

国立国語研究所年報

—41—

国立国語研究所

1990

刊行のことば

本書は、平成元年度における研究の概要及び事業の経過について報告するものです。

本年度は、『日本語の母音、子音、音節－調音運動の実験音声学的研究』（報告100）、『研究報告集（11）』（報告101）、『場面と場面意識』（報告102）、『国定読本用語総覧4－第三期あ～てー』（国語辞典編集資料4）、『話しことば文脈付き用語索引(2)談話語の実態』『話しことばの文型』『速記叢書講談演説集』（言語処理データ集4）、『外来語の形成とその教育』（日本語教育指導参考書16）、『敬語教育の基本問題（上）』（日本語教育指導参考書17）、『国語年鑑』（1989）、『昭和63年度国立国語研究所年報（40）』を刊行しました。

当研究所の研究及び事業を進めるに当たっては、例年のように地方研究員をはじめ、各種委員会の委員、各部門の研究協力者や被調査者の方々の格別の御協力を得ています。また、調査について、各地の都道府県及び市町村教育委員会、学校、幼稚園、図書館等の御配慮を仰いでおります。その他、長年にわたって当研究所に寄せられた大方の御厚意に深く感謝いたしますとともに、今後とも今までと同様の御支援が得られますよう切にお願いいたします。

平成2年9月

国立国語研究所長

水谷 修

目 次

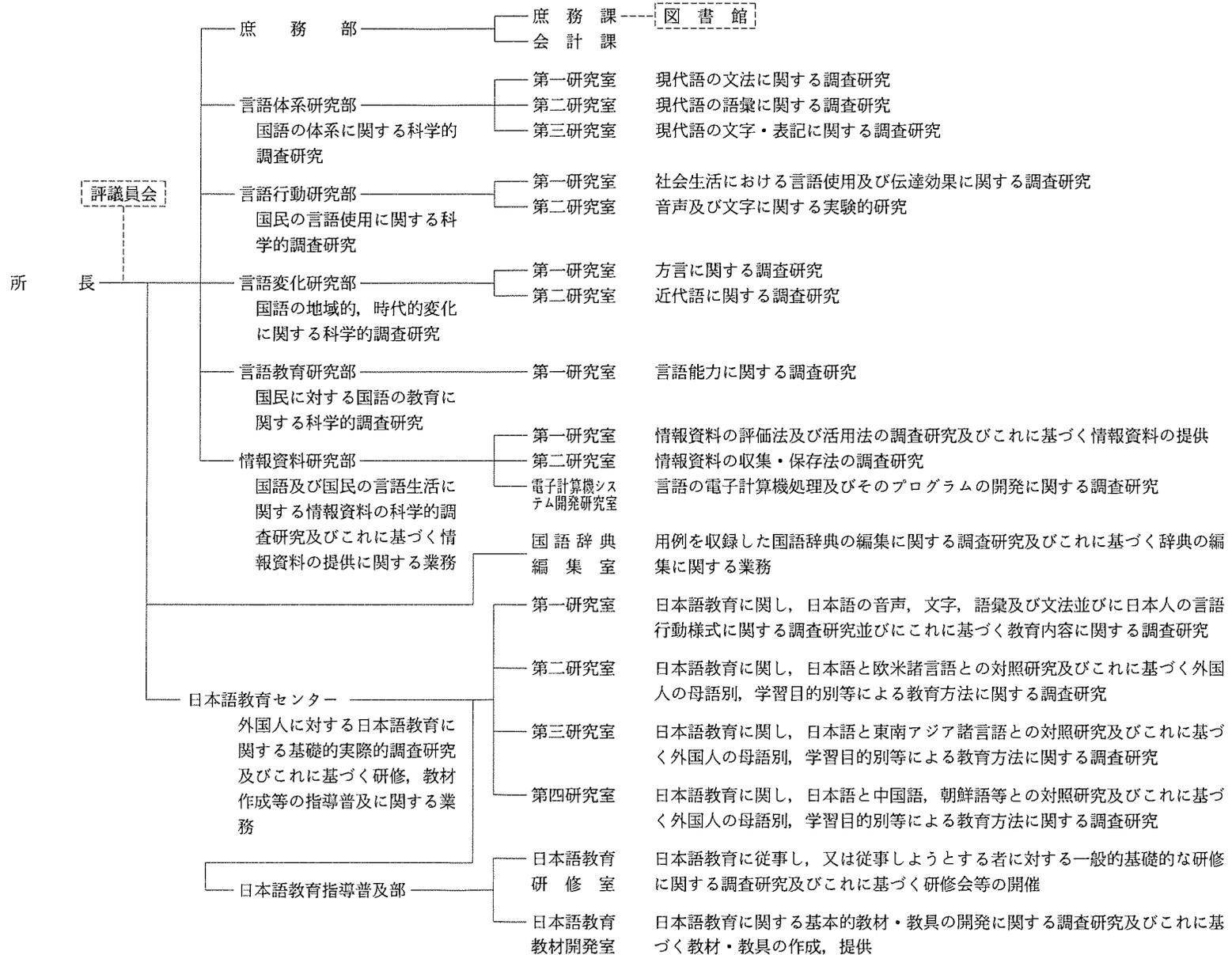
刊行のことば

平成元年度調査研究のあらまし	1
平成元年度刊行物等の概要	14
話しことばにおける文の構造の研究	23
言語計量調査－テレビ放送の用語調査－	24
文字・表記の研究の国際的現状の調査	27
雑誌 90 種資料における和語表記の調査	31
現代敬語行動の研究－言語行動の目的・機能および 对人的な配慮を明示する言語表現についての研究－	32
現代敬語行動の研究－学校生活における敬語の研究－	34
漢字仮名まじり文の読みの過程に関する研究	36
談話中での音声特徴の変動についての準備的研究	37
方言文法地図作成のための研究	38
方言分布の歴史的解釈に関する研究	41
自然科学用語の語史研究	45
英和辞書における訳語の研究	49
『花柳春話』の文体別使用語彙の比較研究	56
児童・生徒の漢字習得に関する調査研究	57
児童・生徒の語彙力調査のための基礎的研究	59
幼児・児童の書きことばの獲得に関する調査研究	61
資料評価のための探索的研究	62
新聞における国語関係記事の蓄積と活用法に関する準備的研究	63
社会言語学資料についてのデータベース構築に関する準備的研究	68
文献情報の収集・整理法に関する準備的研究	70
大量日本語データの蓄積と検索に関する基礎的研究	74

国語辞典編集のための用例採集	76
日本語の対照言語学的研究	80
日本語教育のための述部からみた文構造の研究	82
日本語教育の内容と方法についての調査研究	83
日本語と英語との対照言語学的研究	86
簡約日本語の創成と教材作成に関する研究	88
日本語教育に関する情報資料の収集・提供	93
日本語とインドネシア語との対照言語学的研究	94
日本語と中国語との対照言語学的研究	96
日本語教育研修の内容と方法についての調査研究	97
日本語教育における能力の評価・測定に関する基礎的研究	99
日本語教育研修の実施	101
日本語教育教材開発のための調査研究	114
談話の構造に関する対照言語学的研究	116
日本語学習辞典の編集－基本語用例データベースの作成－	117
日本語教育モデル教材の作成	121
日本語教育参考資料の作成	124
文部省科学研究費補助金による研究	125
図書の収集と整理	148
庶務報告	149

平成元年度調査研究のあらまし

研究所の機構は次の通りである（平成2年3月31日現在）。



言語体系研究部

(1) 話しことばにおける文の構造の研究 第一研究室

話しことばの文の構造を記述するために、次の二つのことを行った。文の認定の基準について検討した。資料として、テレビの対談番組を録画し、文字化の一部を行った。また、関連して、直接話法・間接話法、引用表現について、その構文的な特徴を記述するために用例を収集した。

(23 ページ参照)

(2) 言語計量調査ーテレビ放送の用語調査 第二研究室

テレビ放送は、新聞や雑誌とともに現代のマスコミュニケーションの中核を担っている。また、テレビ放送で使われていることばは、国民の言語形成にも強い影響を与えているといわれている。本研究は、このようなテレビ放送のことばの語彙構造、テレビらしい語彙とは何か、その位相差、番組との関係などを明らかにする。

本年度は、データの収集（録画）、文字化（一部）、プログラム開発などを行った。(24 ページ参照)

(3) 文字・表記の研究の国際的現状の調査 第三研究室

文字・表記の研究は、その基盤をなす思潮が、最近、国際的に変化していると言われる。わが国における日本語の文字・表記の調査研究が、そのような国際的思潮とどう関わり合いうるか、検討し、今後の文字・表記の調査研究のありかたを、探索しようとする。そのための手掛かりとして、日本で翻訳・紹介された海外の研究文献を、その翻訳・紹介されたかたちで収集し、そこに引用されている文献の一覧の作成に着手した。

(27 ページ参照)

(4) 雑誌 90 種資料における和語表記の調査 第三研究室

国立国語研究所が実施した現代雑誌 90 種の語彙調査の資料について、和語の表記に漢字やかながえらばれるのは、どんな条件のもとであるかを調査した。かな表記率がたかくなるのは、動詞や形容詞・副詞、意味が抽象化したばあい、いくつかの漢字表記の可能なばあいなどである。

(31 ページ参照)

言語行動研究部

- (5) 現代敬語行動の研究—言語行動の目的・機能および対人的な配慮を明示する言語表現についての研究— 第一研究室

言語行動としての敬語行動を把握する視点を考察し、その視点から具体的な敬語行動を調査・記述する方途を探る基礎的な研究を継続した。研究計画の最終年次として、とくに言語行動の種類や機能を明示する言語表現類型の実例について整理と分析を進め、次年度の報告論文公表に備えた。

(32 ページ参照)

- (6) 現代敬語行動の研究—学校生活における敬語の研究— 第一研究室

現代日本語社会における敬語の実態を把握する調査研究の一環として、従来議論の多い学校生活における敬語の実態をとらえることを目標とする。第2年度として、山形県の中学校および大阪府の高等学校においてアンケート調査、面接調査、録音収集などを実施し、その整理を進めた。

(34 ページ参照)

- (7) 漢字仮名まじり文の読みの過程に関する研究 第二研究室

読みの眼球運動における一つ一つの注視点の位置と、停留時間を、文章に重ねて表示するシステムを検討している。読み手の頭が多少動いても文章の上の注視点の位置を正確にとらえる装置をめざして、改良中である。

(36 ページ参照)

- (8) 談話中での音声特徴の変動についての準備的研究 第二研究室

談話中に生じる音声特徴の確率的変動の実態を把握するための方法論および実験・解析手法についての準備的研究をおこなった。(37 ページ参照)

言語変化研究部

- (9) 方言文法地図作成のための研究 第一研究室

これまでに記述されている各地の文法事象が、どこに、どのような広がりをもって分布しているかを、全国的視野で明らかにするために、『方言文法全国地図』(全6集の予定)を作成し、刊行する。本年度は、前年度

に刊行した第一集（助詞編）に続く第2集（活用編Ⅰ）の刊行のための準備を行った。（38 ページ参照）

- (10) 方言分布の歴史的解釈に関する研究 第一研究室
方言分布の歴史的な性格を解明し、それによって従来の国語史を見直すための基礎的研究を行う。本年度は、1)『日本言語地図』の関連意味項目地図作製のための準備、および一部の項目の地図化、2) 歌語コマ（駒）を通して見た方言の史的位相性についての考察、3) 東西対立分布の成立過程についての考察、などを行った。（41 ページ参照）
- (11) 自然科学用語の語史研究 第二研究室
主に明治時代の専門書・概説書・啓蒙書などから用例採集を行った。また、江戸時代の重要な蘭日辞典である『和蘭字彙』のオランダ語見出しのL～Zまでの部分について、日本語訳の用語調査を行った。（45 ページ参照）
- (12) 英和辞書における訳語の研究 第二研究室
語別訳語対照一覧表の検討・調整及び訳語索引の作成を行った。その際、漢字表記の訳語の読み方（索引の見出し）を決める整理基準を前年度に引継いで決定した。（49 ページ参照）
- (13) 『花柳春話』の文体別使用語彙の比較研究 第二研究室
書きことばにおける漢語の使用状態は文体による相違が著しい。そこで同一作品の翻訳で、同一訳者による、文体の異なる作品『欧州奇事花柳春話』（漢文直訳体）と『通俗花柳春話』（和文体）の語彙について比較し、その対応語比較表を作成するための準備作業を行った。（56 ページ参照）
言語教育研究部
- (14) 児童・生徒の漢字習得に関する調査研究 第一研究室
児童・生徒の漢字の習得過程を明らかにすることを目的とする。本年度は次の調査研究を行った。
- (1) 漢字の読みと書きとの違い、音読みと訓読みとの違いなどについて分析した。また補充的に行った100字の書き取りテストの結果について分析した。

(2) 漢字の学習指導に関するアンケート調査の分析を行った。

(57 ページ参照)

(15) 児童・生徒の語彙力調査のための基礎的研究 第一研究室

児童・生徒の語彙力を調査するための基礎的な研究を行うことを目的として、本年度から行っている。本年度は、次の調査研究を行った。

(1) 調査語彙の選定に関する基礎的研究……教育基本語彙データベースの拡充・構成作業を行った。

(2) 語彙力の測定方法に関する基礎的研究……前年度行ったテストの解答の正誤判定を行い、一部分析を行った。(59 ページ参照)

(16) 幼児・児童の書きことばの獲得に関する調査研究 第一研究室

幼児ならびに就学前後の児童の読み書きの獲得過程を、とくに社会的・文化的な状況に注目して明らかにするため、保育園での参加観察を続け、幼児と保育者の書きことばを仲立ちにした相互作用場面の映像・音声資料を収集した。(61 ページ参照)

情報資料研究部

(17) 資料評価のための探索的研究 第一研究室

本研究は、国立国語研究所に蓄積された資料を調査・整理し、あわせて、それらの資料にまつわる情報を広く収集することによって、資料の特性の把握のあり方、及び効率的かつ確かな資料の活用の可能性を探る(資料の評価)ことを目的とする。平成元年度は、所内の録音資料について調査対象・形式・記載内容を検討し、一部情報を収集した。また、所外機関の資料活用法の調査として、国立民族学博物館などを見学した。

(62 ページ参照)

(18) 新聞における国語関係記事の蓄積と活用法に関する準備的研究

第一研究室

昭和 24 年から継続して蓄積されている「新聞所載国語関係記事切抜集」に索引をつけ、検索できるようにし、資料としての活性化をはかることを目的としている。本年度は、次の二つのことを行った。

① 新聞記事収集・保存の方法についての検討

② パソコン上で「新聞記事台帳」を作成するための検討

(63 ページ参照)

(19) 社会言語学資料についてのデータベース構築に関する準備的研究

第二研究室

社会言語学的調査資料の有効的活用をはかるためのデータベース構築にむけて、準備的作業および検討を行った。また、言語行動場面調査に関する報告書『場面と場面意識』(報告102)を刊行した。(68 ページ参照)

(20) 文献情報の収集・整理法に関する準備的研究

第二研究室

1. 刊行図書及び雑誌論文等について調査し、日本語関係の文献・研究情報の収集・整理を行って、『国語年鑑』1989年版を編集した。
2. より効率的に文献情報を提供するために、機械入力処理法の検討を行った。(70 ページ参照)

(21) 大量日本語データの蓄積と検索に関する基礎的研究

電子計算機システム開発研究室

引き続き、新聞 KWIC 用例集の修正作業を行った。また、機械処理用漢字辞書の修正を行うとともに、漢英辞典の音訓索引を入力した。

その他、電子計算機機種変更に伴う各種作業を行うとともに、今後の計算機システムに関する資料を収集した。(74 ページ参照)

(22) 国語辞典編集のための用例採集

国語辞典編集室

『国定読本用語総覧4』を刊行した。さらに同じく『国定読本用語総覧5』の原稿を作成した。これは、いわゆるハナハト読本の語彙の総覧である。また、スカウト式用例採集により、雑誌『太陽』を対象に約15万語の用例を収集した。国語辞典編集調査会を2回開催し、国定読本用語総覧の作成作業の省力化、スカウト式による用例の蓄積・検索方法について検討した。(76 ページ参照)

日本語教育センター

(23) 日本語の対照言語学的研究

第一研究室

「外国語としての日本語の研究」の中心的分野をなす研究である、日本語と諸外国語との対照研究の基礎を築くもので、「日本語音声の研究」と「単語の意味記述に関する対照語彙論的研究」について研究を進めた。

(80 ページ参照)

②4 日本語教育のための述部からみた文構造の研究 第一研究室

日本語文の核となる述部（動詞，形容詞，形容動詞，名詞＋だ）をめぐる名詞句等の現れかたに関する情報を，具体的・体系的に記述し，日本語教育のための基礎資料を得ようとする。3年計画の第2年次として，用例の採集と分類・整理を中心に研究を進めた。(82 ページ参照)

②5 日本語教育の内容と方法についての調査研究 第一研究室

4年制大学における日本語教員養成の分野を対象として，日本語教員養成の学科・課程等をもつ，のべ52大学・大学院から関連資料を収集するとともに，担当教官18名（国立9，私立9），文部省・文化庁の担当官各1名に出席を依頼して，日本語教育研究連絡協議会を開催し，課程終了者の進路，教育実習の方法・問題点等に関する情報交換と協議を行った。

(83 ページ参照)

②6 日本語と英語との対照言語学的研究 第二研究室

日・英両語の構造に見られる文脈的制約の実証的研究の一環として，語用論的前提を含む副詞群の文脈資料を日・英語翻訳文献から収集した。対象とした副詞は，「やはり」（「やっぱり」「やっぱし」），「やっと」，「もちろん」，「なにしろ」，「ともかく」（「とにかく」），「どうせ」，「せめて」，「意外に」（「意外と」），「案外」（「案外と」「案外に」）である。また，結束性の指標としての指示詞についても，同様に両国語翻訳資料の収集を行った。(86 ページ参照)

②7 簡約日本語の創成と教材開発に関する研究 第二研究室

本年度は，現行の日本語教科書の中から，文型を提出順に取りだし，また基本的な文法事項をも取り出す作業をした。さらに，簡約日本語の基本的な語彙として使われる2,000語中の多義語について，利用可能なKWIC

を使い、文脈から意味の使用頻度を調べた。(88 ページ参照)

⑳ 日本語とインドネシア語との対照言語学的研究 第三研究室

前年度からの継続課題である①日本語とインドネシア語の移動現象の比較②日本語とインドネシア語の擬声語・擬態語の比較について調査研究を行った。①については、主として英語の文献を参考にして、インドネシア語の移動現象の特質を明らかにした。②については、インドネシア語の擬声語・擬態語の使用場面、使用上の制限を中心に考察を行った。

(94 ページ参照)

㉑ 日本語と中国語との対照言語学的研究 第四研究室

中国語話者に対する日本語教育に資することを目標として、「(1)日本語の中の漢語と中国語との語構成の対照研究」と「(2)日本語と中国語との格表現の対照研究」について研究を進めた。(1)は、本年度が三年計画の三年次であり最終年度であった。(96 ページ参照)

日本語教育指導普及部

㉒ 日本語教育研修の内容と方法についての調査研究 日本語教育研修室

研修に必要な教育内容の明確化、教授資料・教材等の整備充実、また、研修受講者の能力・専門・受講期間等に応じた研修プログラムのあり方、カリキュラムの設定などについて基礎的な調査研究を継続的にを行い、その一環として、前年度に引続き『日本語教育論集 6』を刊行した。

(97 ページ参照)

㉓ 言語教育における能力の評価・測定に関する基礎的研究

日本語教育研修室

第2言語の口頭運用能力試験の開発のために、国内外の種々の試験を収集し、評価領域・観点設定・測定形式などを分析・検討した。また、日本語教育センターで行った実験コースにおいて試行試験を行い、結果をそのコースについてのすべてのデータと関連付けて分析するためのデータ整備を進めた。(99 ページ参照)

㉔ 日本語教育教材開発のための調査研究 日本語教育教材開発室

辞書等において意味記述のために用いられている語彙に関する調査、および日本語教育用教材の語彙・文型に関する調査を続行した。中級用映像教材開発の理論的基盤として作成した文の発話機能の分類案の妥当性を検討し、修正を加えた。(114 ページ参照)

③③ 談話の構造に関する対照言語学的研究 日本語教育教材開発室

中上級向けの日本語教育に役立てるため、日本語において談話の構成を表示するために機能する種々の手段について、探索と基礎資料の作成を行った。(116 ページ参照)

③④ 日本語学習辞典の編集 日本語教育教材開発室

「基本語用例データベース」の作成を継続し、主に名詞として用いられる漢字熟語および副詞の記述を行った。(117 ページ参照)

なお、平成元年度文部省科学研究費補助金の交付を受けて、以下の研究を行った。

重点領域研究 日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究

(代表者 杉藤美代子<大阪樟蔭女子大学教授>)

本研究は上記の題目のもとに杉藤美代子教授を代表者として行っているもので、当研究所からは名誉所員 林 大、所長 野元 菊雄、日本語教育センター長 水谷 修、情報資料研究部長 江川 清が分担者として参加し、野元は研究班を組織している。

野元班は「外国人を対象とする日本語教育における音声教育の方策に関する研究」なる題目のもとに、本年度は多くの外国人留学生の発話を一種の朗読によって収集し、その分析を開始した。本年度は 85 人について材料を収集し、一部は分析を手がけている。(125 ページ参照)

一般研究(B) 言語研究におけるシソーラスの利用法(代表者 宮島達夫)

一般語のシソーラスを言語研究に役立てる可能性を追求し、あわせて、国

立国語研究所の『分類語彙表』の採録項目に検討をくわえ、語数を現在の倍の約60,000語にし、一般の利用に供することをも目指す。本年度は、1. 研究協力者（モニター）の組織 2. シソーラスのフロッピーへの入力 3. 研究会の開催 4. 「モニター通信」の発行 5. シソーラスの増補（漢語動詞・複合動詞の追加、多義語の2番目以下の意味の追加、上記追加部分の点検と表記の統一 などをおこなった。（130 ページ参照）

一般研究(C) 日本語教育のための意味記述用基本語彙の選定と記述

（代表 中道真木男）

外国人に対する日本語教育において、語の意味・用法を日本語で提示する際のメタ言語として使用するための日本語体系のうち、語彙の面における指針を得ることを目的として、すでに発表されている意味分析・辞書記述等から、形容詞の意味を区別するカテゴリーを収集し、それらを言い表すのに必要な語彙をリストアップする作業、および、辞書等で意味記述に用いられている語を調査する作業に着手した。（132 ページ参照）

奨励研究(A) 疑似識字段階にいる幼児の読み書きの獲得に関する社会・文化的研究

（代表 茂呂雄二）

疑似識字段階（不完全であるが文字使用の有意味性を理解している段階）の幼児が、どのような文字理解、文字概念を持っているかを対話的な面接法によって調べた。（134 ページ参照）

奨励研究(A) 漢字の学習指導法に関する文献目録の作成とそれに基づいた漢字の学習指導法の分類——国立国語研究所編『国語年鑑』の「文献目録」に掲載されている雑誌論文、単行本を中心に——

（代表 島村直己）

国立国語研究所編『国語年鑑』の「文献目録」に掲載されている漢字の学習指導法に関する雑誌論文、単行本を中心に目録を作成し、それに基づいて、漢字の学習指導法を体系づけることを目的とする。（135 ページ参照）

奨励研究(A) 文献と方言との間における語の意味の対応関係についての研究

（代表 小林 隆）

文献と方言とを対比した場合、同一あるいは類似の語形の意味はどのような対応関係をなしているのか、ということの概略を明らかにし、不対応の原因を探る。そのための基礎資料として、『日本言語地図』の関連意味項目地図、例えば、『日本言語地図』の〈顔(=顔面)〉の地図に対して〈顔(=容姿)〉の地図を、収集した全国方言資料により作製した。(137 ページ参照)

国際学術研究 米国における研究者のための日本語教育に関する共同研究
(代表者 水谷 修)

米国からの要請に基づいて、米国における科学技術研究者のための日本語教育システム(教材開発、人物交流を含む)の確立をめざして、米国及び日本の専門家による共同研究調査を行うものである。平成元年度には、米国ワシントン州、シアトル市のワシントン大学でのワークショップの開催、及び読解教育支援システム共同開発のための人物交流、検討会議を実施した。

(139 ページ参照)

試験研究(1) 国語学研究文献のキーワードによる検索システムの開発

(代表者 築島裕<中央大学教授・東京大学名誉教授>)

昭和 20~59 年に発表された全ての日本語研究論文(約 10 万件)にキーワードを付与し、それらのキーワードの相互連関をシソーラスにまとめ、日本語研究文献検索システムを構築する。すなわち、日本語研究文献データベースとしてパソコン用外部記憶媒体に収め、また、書籍形態の目録として編集することを目的とする。

本年度は、主として以下の作業を行った。①昭和 20~27 年の雑誌掲載研究論文と、昭和 20~59 年の講座・論文集所収研究文献(約 1 万 5 千件)の書誌情報を収集し、計算機に入力した。②付与済みのキーワード(延べ 6 万語)を対象にキーワードの相互関連の整理・標準化の実験試行を行い、「シソーラス作成の手引き」を作成した。③公開形態のあり方についても検討し、種々の配列・分類の試作を行った。(142 ページ参照)

特別推進研究 日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究

(代表者 井上和子)

本研究は上記の題目のもとに井上和子教授を代表として行っているものであるが、当研究所からは所長・野元菊雄、日本語教育センター長・水谷修が分担者として参加し、それぞれ研究班を組織した。野元班は、(1)誤用例のデータベースを完成し、「文献にあらわれた外国人日本語学習者の誤用例データベース使用説明書」を刊行し、(2)外国人日本語話者の中間言語記述について、その方法論的枠組を検討した。(水谷班については、研究組織が水谷の前任地、名古屋大学総合言語センターにあり、そこで研究が行われているため、ここでは述べてない。) (146 ページ参照)

平成元年度刊行物等の概要

日本語の母音、子音、音節—調音運動の実験音声学的研究—(報告 100)

この研究は現代の標準的な日本語（いわゆる標準語）の規範的な発音について、とくにその音節とフォネームのもつ調音音声学的な特徴を詳細にあきらかにすることを目的として国立国語研究所で長期にわたっておこなわれた実験音声学的研究の成果をとりまとめたものであり、さきに母音一般、とくに単独に発音されたばあいのものに限定した研究『X線映画資料による母音の発音の研究—フォネーム研究序説—』（国立国語研究所報告 60,1978）の報告につづくものであり、以下の3章からなる。担当は上村幸雄（前話しことは研究室室長、昭和51年3月に琉球大学教授として転出）、高田正治（前言語行動研究部第3研究室主任研究官、平成元年3月停年退職）。第1章「序説」では、まず研究の目的と方法の概要とをのべ、また、この報告で使用されている標準語の音韻体系にたいする見解と音韻的な表記法とを簡潔にのべてある。つぎに、この研究で分析の対象にした無意味単語の発話群を一覧表の形でしめし、その発話の分析目的を解説している。最後にここでとられた方法と、使用した実験装置についてのべている。この報告の大部分をしめる第2章では、同一の発話者についての次の4種類の調音音声学的な資料 1) X線映画フィルム資料、2) 動的人工口蓋資料、3) 声道内気圧の資料、4) 呼気流量の資料が整理された形で掲載されている。第3章では、第2章に掲載された4種類の資料を詳細に検討し、相互に比較することによって、またこれらの資料を、その調音運動の結果としての音声についてのサウンドスペクトログラムを主とする音響学的資料と比較対照させることによって、主として2音節からなる無意味単語の明瞭で規範的な発音のばあいにおける、日本語のすべての母音フォネームとすべての子音フォネームの調音音声学的な性質、そして、それらフォネームが相互にくみあわさってつくられる日本語のほぼすべての音節の調音音声学的な性質を詳細にあきらかにした。

研究報告集(1) (報告 101)

本年度は、下記の5編の報告およびシンポジウムの記録1編をのせた。

1. 石井久雄「『中央公論』1986年の用語」……『雑誌用語の変遷』（報告89）のあとをうけて、雑誌『中央公論』の1986年一年の用語について、調査をおこなった。和語は従来とくらべて出現がもっともすくなく、外来語の増加傾向はつづいている。戦後の用語は、戦前の用語にくらべて、共通度がたかく、安定している。出現したかたちでの一語の長さは、平均して0.87個の付属部分をともない、3.67字で表記され、4.78拍からなる。
2. 島村直己「大学一般教育における「文学」「言語学」」……全国の4年制大学の一般教育科目の中で、「文学」「言語学」に関する科目にどのようなものがあり、そして、それらはどのくらいの大学で開設されているか、ということに関して行った調査の報告である。調査対象とした大学の数は、437校であり、この数字は全国の4年制大学の約9割にあたる。これらの大学で学生に科目の受講案内のために配付している印刷物を資料とした。
3. 相沢正夫「北海道における共通語使用意識——富良野・札幌言語調査から——」……方言が変異の観点からみた各地の日本語であるのに対して、地域共通語は、日本語を何らかの均一性の観点から見直し、その通用範囲の広がりによって統合していく過程の中に認知されるものである。本稿では、北海道の富良野・札幌における社会言語学的調査の資料にもとづき、主として後者のようなことばの共通性の視点から、両地点における都市化の程度差に注目しつつ、いわゆる北海道共通語の使用状況と、その背後にある話者の言語使用意識との関係について分析・報告した。
4. 正保勇「インドネシア語の定名詞句と不定名詞句——日本語との比較を通して見た——」……武田修一によれば、英語の不定名詞句は、特定の不定名詞句・非特定の不定名詞句・記述的不定名詞句の三つに分類される。この三分法は、定名詞句にも適用できると考えられている。本論では、武田の三分法を比較のための枠組みとして利用し、不定名詞句、及び定名詞句の三類型に意味の上で対応するものが、日本語、及びインドネシア語で、

どのような型で顕現するかを考察すると共に、日本語とインドネシア語の不定名詞句、及び定名詞句の持つ特殊性についても探った。

5. 山崎誠「『日本語研究文献目録・雑誌編』にみる国語研究の動向」……「日本語研究文献目録・雑誌編」を資料にして、各研究分野・話題についての文献数の推移、著者数、雑誌数の増減などを通じて、過去30年間の国語研究の動きを統計的に概観した。

6. [40周年シンポジウム記録] ……国立国語研究所が創立40周年を記念して1988年12月20日にひらいたシンポジウム『これからの日本語研究』の記録である。発題者およびテーマは下記のとおり。

「普遍意味論からの発想」中右実氏（筑波大学）

「地域言語研究の展望」真田信治氏（大阪大学）

「文法獲得、7つの『不思議』」大津由紀夫氏（慶応義塾大学）

「計算言語学の立場からの提言」田中穂積氏（東京工業大学）

質問およびコメントをおこなった指定討論者は、荻野綱男氏（筑波大学）・宮島達夫・田中望・茂呂雄二（以上国立国語研究所）である。

場面と場面意識（報告 102）

昭和 57 年度から 59 年度の 3 年間にわたって、「日本人の言語行動の類型」（代表者 渡辺友左）として、文部省科学研究費「特定研究(1)」の研究助成金の交付を受けて、豊中市、宮津市、豊岡市の関西 3 都市で実施した言語行動場面についての調査結果を報告したものである。調査の企画・立案には、江川清、米田正人の所員のほかに、大阪大学の真田信治、富山大学の鈴木敏昭が参加した。実施に当たっては、上記企画立案者のほかに、所員の高田誠、杉戸清樹、熊本県立南関高校教諭の吉岡泰夫らが加わり、さらに大阪大学、大阪外国語大学、富山大学など、多数の学生の協力を得た。なお、報告書の内容および執筆者は以下のとおりである。

- ・調査の概要（江川清、米田正人）：調査の目的、方法、実施状況、および被調査者の属性などを概観した。
- ・場面（真田信治）：相手の年齢と親疎をさまざまに設定したいくつかの場面について、表現形式の運用を規制する要因について考察した。
- ・場面接触態度（江川清）：種々の言語行動場面と場面接触態度（ことばづかいにどの程度の気配りを行っているかの意識）との関係を述べた。
- ・1 日の言語生活（米田正人）：場面と場面接触頻度との関係を述べた。
- ・方言と標準語をめぐって（鈴木敏昭）：方言と標準語の使い分けや方言と標準語についての意見、自分の方言と標準語の類似性などを述べた。
- ・ことばと社会生活意識（米田正人）：マスコミ接触、行動の範囲、対人行動、人とのつきあい、地域志向・全国志向など、ことばをとりまく社会生活意識について言及した。
- ・語彙（磯部よし子、江川清）：イクラ・ナンボの場面による使い分け、可能表現、断定の助動詞、その他いくつかの語彙の使用実態を述べた。
- ・アクセント（都染直也、尾崎喜光）：宮津市および豊岡市における、2 拍語、3 拍語についてのアクセントの実態を述べた。
- ・調査票：各調査で用いた調査票のイメージ、および提示リストを示した。
- ・まとめと今後の課題（江川清）：まとめと調査全般の反省点を述べた。

国定読本用語総覧 4 —第三期あ〜て— (国語辞典編集資料 4)

国定読本用語総覧は、国語辞典編集資料の一つとして国定読本のすべての用語を文脈付きで示した索引 (concordance) である。国定読本は明治 37 年 4 月から昭和 24 年 3 月まで使用された文部省著作の小学校用国語教科書 (1〜6 期) のことで、本書はそのうちの第三期『尋常小学読本』(1〜12) の全用語のうち、「あ〜て」の部を検索できるようにしたものである。内容は解説と索引からなる。

本書に収められた語彙は、編纂趣意書に「従来ト更ニ異ナル所ナシ」とあるように、第一期で樹立された一人称・二人称の代名詞、あるいは「おとうさん」「おかあさん」などの親族名称の体系を継承している。しかし、一人称の場合、「わたくし」「わたし」「ぼく」「われわれ」など上品な語彙が使用され、第二期で加わった「おれ」は使われていない。親族名称でも「おとうさん」「おかあさん」が使用され、第二期で加えられた山の手言葉の「おかあさま」、下町言葉の「おつかさん」は除かれている。標準語を定め「国語統一ノ実行ヲ挙ゲン」とする第二期編纂趣意書の方針が更に徹底している。

しかし一方では、ゆれのみられるものもあり、「マツクロナ 目」「キイロイ クチバシ」という場合の「な」と「い」、また「タクサンナ種類」「たぐさんの星」のように体言に続くときの「な」と「の」にゆれが見られる。

今日と異なるものには「景物」「活動写真」「最大急行の列車」「地下鉄道」「相持のもの」「赤さん」「調べかは」「学問をべんきやうしなさい」などがあり、第一期から受けついでいるものには「こうば (工場)」「ていしゃば (停車場)」の「ば」の読み方や「こがわ (小川)」の「こ」の読み方がある。

外国の国名表示には特色がみられ、第一期は文章の仮名表記に従い「イギリス」「いぎりす」、第二期は片仮名に双線を加え「イギリス」、第三期は片仮名に「国」を加えた「ブラジル」「ブラジル国」へと変っている。

本書の編集は国語辞典編集室 (主幹 飛田良文, 室長 木村睦子, 主任研究官 高梨信博, 調査員 林大・見坊豪紀・加藤信明・貝美代子・服部隆・久池井紀子・高橋美佐) が担当した。解説は飛田良文が執筆した。

話しことば 文脈付き用語索引 (2)

『談話語の実態』データ

『話しことばの文型』データ

『速記叢書講談演説集』データ (言語処理データ集4)

このデータ集は、昭和62年3月に公刊した国立国語研究所言語処理データ集2「話しことば 文脈付き用語索引(1)－『言語生活』録音器欄データ」につづくものである。データの内容は、『談話語の実態』(報告8)と『話しことばの文型』(報告18)の調査で収集したものの一部、および松村明氏蔵の『速記叢書講談演説集』をそれぞれ電子計算機に入力し、作成した文脈付き用語索引である。

『談話語の実態』のデータは、昭和27年、28年に東京における日常談話の録音資料で、カタカナで入力されている。また、『話しことばの文型』のデータは、昭和35年、38年の対話・独話資料であって、NHK放送その他のなるべく多様な文型が取れそうなものを資料としたものである。これはローマ字で入力されている。『速記叢書講談演説集』は、明治19年7月から翌年12月まで発行されたシリーズで、国語学的観点からは、当時の話しことば資料の一つとして位置付けられる。これは、漢字仮名交じりで入力されている。

「文脈付き用語索引」は、単なる「所在索引」とは異なり、ある語がどのような文脈で使われているかを示すものである。それぞれの語が実際にどのような使われているかを一覧することができ、話しことばの用語・文法などの言語研究のほか、言語情報処理の研究資料など、各種の研究に役立つ。

マイクロフィッシュとして刊行するのは、本による刊行に比べ、安価であり、保管に場所をとらないためである。本にすると、7,275ページになり、一冊500ページ余りとして15冊にもなるから、マイクロフィッシュ・リーダーを使わなければならない不便さを考えても、この形の方が適当と思われる。

なお、この研究は、昭和55年～57年度の文部省科学研究費補助金(一般研究(A)代表者 斎賀秀夫)を受けた。また、解説書の執筆は、中野洋(言語体系研究部第二研究室)と、山崎誠(同第一研究室)が担当した。

外来語の形成とその教育（日本語教育指導参考書 16）

本書は、外国人学習者にとって習得が困難な分野のひとつである日本語の外来語についての諸問題のうち、主に英語から取り入れられる外来語の語形決定の規則を記述したものである。また、英語を母語とする学習者がこれらの規則を習得するための練習問題を付してある。

執筆は、カッケンブッシュ寛子氏（広島大学教授）と大曾美恵子氏（関西外国語大学教授）にお願いした。

本書の内容は以下の通りである。

I. はじめに

II. 語形の日本語化

1. 外国語の日本語化
2. 省略
3. 和製外来語
4. 混種語

III. 音声音韻の日本語化

1. E. T. 語の日本語化：日本語化の概要
2. 日本語の音節と拍
3. 開音節化
4. 促音挿入
5. 母音の日本語化
6. 子音および半母音の日本語化
7. スベルに基づいた日本語化
8. アクセントの日本語化

IV. 表記における問題

1. 表記の基準
2. 発音と表記におけるゆれとずれ
3. 社会言語学的ゆれとずれ

V. 学習者のための練習問題

1. 英語でアクセントのある音節の母音の扱い方
2. 子音の扱い方
3. 英語でアクセントのない音節の母音の扱い方
4. 繰り返し現れるスベルの扱い方
5. 総合練習

参考文献

外来語語形索引

敬語教育の基本問題（上）（日本語教育指導参考書 17）

本書は、外国人に対する日本語教育における最大の問題である待遇表現・待遇行動の教育のための指針を提供することを目的として企画された。上巻においては、外国語との対照を踏まえて認められる日本語の敬語表現・待遇表現の特殊性と普遍性を考察し、対人行動に関する様々な理論・分析を紹介している。

執筆は、窪田富男氏（東京外国語大学教授）にお願いした。

本書の内容は以下の通りである。

はじめに

I 日本語教育と敬語

1. 学習者の敬語への接近
2. 外国語能力とは
3. 敬語教育と教師の態度
4. 一時間目から敬語を教えている
5. 敬語は社会的・心理的なもの
6. 敬語教育の目的と方法

II 外国人の見た敬語

1. アメリカ人
2. ドイツ人
3. 中国人
4. 言語学者
5. 「丁寧でない言い方」の重要性

III 諸外国における敬語行動

1. 世界の敬語の類型
2. 日米大学生の対人意識
3. 日米大学生の敬語行動
4. 人物カテゴリーと表現との対応関係
5. 日本と韓国の対人意識の対照

6. 日本と韓国の敬語表現

7. 敬語行動の国際比較

IV 日本人の対人意識と敬語行動

1. 敬語の一般的性格と意味構造

2. 日本語教育へのある応用

3. 敬語の使用条件(1) —— 上下関係を優勢とみる考え ——

4. 日本語教育での従来への扱い

5. 本書の立場 —— 学習者の疑問 ——

6. 敬語使用の条件(2) —— ウチ・ソトを優勢とみる考え ——

7. ソトからウチへの過程

8. ウチ・ソトの応用 —— 2次的ウチの形成 ——

9. ウチ・ソトと上下のからみあい

10. 学習者の質問例

V 敬語のはたらき

1. 現代敬語の性格

2. 敬語のはたらき(1)

3. 敬語のはたらき(2)

4. 敬意と敬語

5. 「親愛」と敬語

6. 「親切」と敬語

7. Brown と Levinson の考察

VI 日本人の話し方の論理

1. 会話のルール

2. 丁寧さのルール

3. 日本人の話し方の論理

4. クッション行動から注釈行動へ

参考文献

話しことばにおける文の構造の研究

A 目 的

話しことばの分析は、書きことばに比べてあまり進んでいないのが現状である。話しことばの構文を記述し、その特徴を明らかにすることによって、話しことばの論理とは何かをさぐる手がかりとする。

B 担 当 者

言語体系研究部第一研究室

室長(事務取扱) 宮島達夫 研究員 山崎 誠 鈴木美都代

C 本年度の研究経過

1. 話しことば資料の収集

- ① 1週間にテレビで放送された16の対談番組(計9時間)を録画し、文字化の一部を行った。
- ② 文の認定の基準について検討した。

2. 話法・引用に関する研究

- ① 文学作品を中心として、「と」「～(っ)て」などによってあらわされる、引用を含む文の用例を採集した。

D 次年度の予定

1, 2の資料とも、さらに補充を行う。1については、構文情報を付与して、構文パターンとして整理する。2については、引用動詞の種類と用法を記述的に明らかにする予定である。

言語計量調査

テレビ放送の用語調査

A 目 的

テレビ放送は、新聞や雑誌とともに現代のマスコミュニケーションの中核を担っている。また、テレビ放送で使われていることばは、国民の言語形成にも強い影響を与えているといわれている。本研究は、このようなテレビ放送のことばの語彙構造、テレビらしい語彙とは何か、その位相差、番組との関係などを明らかにする。

調査対象は、東京をキーステーションとする7つのチャンネルの1年間の放送から504分の1の割合で抽出したサンプル、約70万長単位（助辞を含む）である。

B 担 当 者

言語体系研究部第二研究室

室長 中野 洋 研究員 石井正彦 研究補助員 小沼 悦

言語体系研究部第一研究室

研究員 山崎 誠

C 本年度の研究経過

1. データの収集

平成元年4月2日（日）から平成2年3月31日（土）までの1年間52週に放送された東京をキーステーションとする7チャンネル6放送局のテレビ放送（NHK、NHK教育、日本テレビ、TBSテレビ、フジテレビ、テレビ朝日、テレビ東京）から、504分の1の割合で、5分間の標本を1456標本採集した。

2. 文字化データの作成のための準備作業

文字化データの作成のために次の準備作業を行った。

- ① サンプル台帳の作成（前年度）
- ② 録 画 ビデオテープ（160分）に8標本録画する（1標本につき、前に10分、後ろに5分つける）。
- ③ 編 集 ②の録画テープから28標本を集め1本とする。
- ④ 録 音 ③の編集テープをカセットテープに録音する。
- ⑤ 文 字 化 ④の録音テープを聞きながら直接入力で文字化する。
- ⑥ 情報付加 ⑤で文字化したものに話者情報・番組視聴率情報を入力する。

3. テレビ放送の用語調査のためのプログラム

調査の効率化のために電子計算機を使用する。電子計算機は大型計算機とパソコンを使い分ける。パソコンは、データ入力とデータの加工・修正に用いる。

本年度は、データの加工・修正のためのプログラムを作成した。

4. 付加情報の検討

調査項目との関連で付加情報について検討した。

5. サンプルングについての検討

サンプルングにかたよりがあるかどうかを検討した。その結果、有意な差と認めるほどのかたよりはなく、適正に行われていることが確認できた。

6. 研究会の開催

3月29日（木）に第2回「テレビ放送の用語調査」研究会を開いた。

以下の5件の報告を行った。

- | | |
|-------------------|-------|
| ① 調査の目的 | 中野 洋 |
| ② 研究経過報告 | 小沼 悦 |
| ③ テレビ放送の用語調査プログラム | 中野 洋 |
| ④ 調査項目と付加情報について | 石井 正彦 |
| ⑤ サンプルングについて | 山崎 誠 |

D 次年度の予定

1. 文字化データの作成

本年度できなかった文字化データ作成の前段階の処理を完成する。すなわち、録画・編集・文字化・情報付加・文のおおまかな認定を行う。

次に、文字化データの確定作業を行う。

2. 情報の付加

本年度の検討にしたがって情報の付加作業を行う。

3. 計算機処理

一部のデータにつき計算機処理を行う。その内容は、入力データのフォーマットチェックの処理・文節を長い単位に分割する処理・語彙ファイルの作成処理である。

文字・表記の研究の国際的現状の調査

A 目 的

文字・表記の研究は、その基盤をなす思潮が、最近、国際的に変化していると言われ、文字が言語を貯蔵するという文字観も、表語文字から表音文字への発達という歴史観も、絶対視されなくなった。わが国における日本語の文字・表記の調査研究が、そのような国際的思潮とどう関わり合いうるか、検討し、今後の文字・表記の調査研究のありかたを、探索する。

B 担 当 者

言語体系研究部第三研究室

室長 石井久雄 研究員 高木 翠

C 本年度の経過

日本で翻訳・紹介された海外の研究文献を、その翻訳・紹介されたかたちで収集し、そこに引用されている文献の一覧の作成に着手した。これを、今後、本格的に海外の研究文献を調査・収集してゆくための、手掛かりとしようとしている。

1. 調査対象について

日本で翻訳された海外の研究文献として、引用文献を収集する対象の中心としたものは、次である。

○文字・表記の専門書・概説書

カーロイ・フェルデシ＝パップ著（1966年初版，1984年新版），矢島文夫・佐藤牧夫訳（1988年，岩波書店） 『文字の起源』

アルベルティーン・ガウアー著（1984年ロンドン，1985年ニューヨーク），矢島文夫・大城光正訳（1989年，原書房） 『文字の歴史 起源から現

代まで』

アレクサンドル・コンドラートフ著（1975年）、磯谷孝・石井哲士朗訳（1979年、勁草書房）『文字学の現在』

ロベール・エスカルピ著（1973年）、末松寿訳（1988年、白水社）文庫クセジュ『文字とコミュニケーション』

シャルル・イグーネ著（1955年）、矢島文夫訳（1956年、白水社）文庫クセジュ『文字』

A. C. ムーアハウス著（1946年）、ねずまさし訳（1956年、岩波書店）岩波新書『文字の歴史』

○言語学の概説書・辞典

ジョージ・ユール著（1985年）、今井邦彦・中島平三訳（1987年、大修館書店）『現代言語学 20 章 —— ことばの科学 —— 』

オスワルド・デュクロ／ツベタン・ドドロフ著（1972年）、滝田文彦ほか訳（1975年、朝日出版社）『言語理論小事典』

アンドレ・マルティネ編著（1969年）、三宅徳嘉監訳（1972年、大修館書店）『言語学事典 現代言語学 —— 基本概念 51 章』

日本に紹介された海外の研究文献は、少なくないと思われるが、諸般の事情により、本年度はほとんど着手することができなかった。調査の対象の中心としているものは、次である。

西田龍雄編（1981年、大修館書店）講座言語『世界の文字』

なお、この調査研究の趣旨は、文字・表記に関する原理的な問題に取り組むことである。そのため、いわゆる古代文字の解読に関する次のようなものは、とりあえず、調査の対象から外してある。

エルンスト・ドープルホーファー著（1957年）、矢島文夫・佐藤牧夫訳（1963年、山本書店）『失われた文字の解読 I・II・III』

ジョン・チャドウィック著（1960年）、大城功訳（1962年、みすず書房）『線文字Bの解読』

また、識字あるいは文字学習の問題については、この調査研究では立ち入

るつもりがないが、言語教育研究部第一研究室主任研究官茂呂雄二から種々の教示を得ている。

2. 研究文献情報の蓄積について

調査して得られた研究文献といっても、標題と公表形態とが知られるにすぎない。しかし、それを、コンピュータファイル化してある。

その研究文献については、目次だけでもさらにファイル化し、文字論用語の日本語（訳）のありかたを探るくらいのはしようとしていた。しかし、研究文献を入手することが存外に困難であったので、それには着手することができなかった。かわりに、引用された研究文献が、調査の対象である文献において、どのような評価を受けて引用されているのか、ファイルに書き込んでおくこととして、その作業を継続している。

3. 知見など

言語学の概説書からは、上記ユール著『現代言語学 20 章』や
ヘンリ・アラン・グリースン著（1955年初版，1961年改訂版），竹林滋・
横山一郎訳（1970年，大修館書店）『記述言語学』

レナード・ブルームフィールド著（1933年ニューヨーク，1935年ロンドン），
三宅鴻・日野資純訳（1962年，大修館書店）『言語』

を除き、ほとんど文字・表記研究文献を採集することができなかった。予想されたことではあるが、文字・表記の概説を行うことがそもそも少ないのである。その点は、国語（学）の概説書が、多く、系統などの総説の章の後に、音声の章，文字・表記の章を立て、文法の章，語彙の章，と進んでゆくのと、対照的である。

文字・表記がそのように冷遇されているためか、その研究の領域の西欧言語名も、確定的なものが見られない。引用文献としてもっともよく現れたものの一つ

I. J. Gelb (1952年) A Study of Writing; the Foundation of Grammatology

の提唱した 'grammatology' は、上記コンドラートフ著『文字学の現在』

で、「文字に関する新興の学問に最もふさわしい名称」であり、「ソビエトの大多数の学者によって採用され、外国でも広く普及している」とされる。また、フランス思想界にも影響を与え、

ジャック・デリダ著（1967年）、足立和浩訳（1972年）『根源の彼方に
グラマトロジーについて 上・下』

を生み出している。それにもかかわらず、少なくとも英語圏での受けは余りよくないように見受けられ、ゲルプのくだんの書の改訂普及版（1962年）でも、‘grammatology’の語を含む副題が削除されている。なお、‘grammatology’の語は、外国の大辞典では、リトレが採録しているのに気づいた。また、白水社の諸種の仏和辞典が、由来は未調査であるが、戦前から「文法（的）研究、文法論」として採録していて、今般の『仏和大辞典』（1981年）をもって立項を取り止めている。

D 今後の予定

この調査研究は、本年度から4年計画で開始したものである。第2年度に当たる次年度は、英語を中心とする西洋の研究文献の調査・収集、第3年度は、中国語を中心とする東洋の研究文献の調査・収集、第4年度は、第3年度までをまとめつつ、日本語に関する研究を顧みる予定である。しかしながら、本年度の予想外の障害として、外国の研究文献の入手が困難であったことがある。そのことにかんがみ、全体計画を縮小して、別の機会を期することも考えることとしたい。

雑誌 90 種資料における和語表記の調査

A 目 的

国立国語研究所が実施した現代雑誌 90 種の語彙調査の資料は、30 数年前のものではあるが、いまでも現代書きことばの基本資料としての価値を失っていない。さきに、漢語・外来語の表記について報告したが、今回は和語の表記を、特にな・漢字の使い分けに重点をおいてしらべる。

B 担 当 者

言語体系研究部第三研究室

部長 宮島達夫 研究員 高木 翠

C 本年度の経過

調査を終了し、報告をまとめた。これは、次年度の『研究報告集』に発表する予定である。おもな結果は、つぎのとおり。

- (1) のべ語数による品詞別かな表記率は、名詞 33%、動詞 60%、形容詞・副詞 68%、接続詞・感動詞 90%、全体では 52%で、ほぼ半分の語がかなで書かれている。
- (2) 実質的な意味の単語が文法的手段として使われたり、具体的な意味が抽象化したりすると、かな表記率がたかくなる。
- (3) いくつかの漢字表記が可能な語は、かな表記率がたかくなる傾向がある。
- (4) 当用漢字制定による漢字制限の影響の有無は、共時的分析だけでは不明である。

現代敬語行動の研究

言語行動の目的・機能および対人的な配慮を 明示する言語表現についての研究

A 目 的

言語表現をととのえ、言語行動としての敬意表現をささえる配慮に基づくと考えられる、以下の二つの言語表現類型の実態を記述的にとらえることを目的とする。これにより、言語行動としての敬意行動を把握する視点を探る。

- (1) 言語行動の成立要件（例えば、言語行動の主体、話題、媒体、場面、談話構成など）に対人的な配慮を加えていることを明言する言語表現
- (2) その時行いう言語行動の種類や機能それ自体を明言する言語表現
（それぞれの表現類型の具体例は、『年報 36,37』を参照されたい。）

B 担 当 者

言語行動研究部第一研究室

室長 杉戸清樹 研究補助員 塚田実知代

C 本年度の作業

この研究は、昭和 60 年度文部省科学研究費補助金・奨励研究「言語行動の目的・機能および対人的な配慮を明示する言語表現」（代表・杉戸）以来継続したもので、平成元年度は 5 か年計画の最終年度にあたる。

研究のまとめに向けて、前記の二つの言語表現類型について、従来継続した各種の資料の収集を収束させ、報告論文のための整理と分析を進めた。とくに、(2)言語行動の種類や機能を明示する表現について、学術論文を中心とする書き言葉資料の実例の整理に重点をおき作業を進めた。この成果は平成 2 年度に報告論文として公刊する予定である。

D 今後の予定

研究期間は平成元年度をもって終了する。この間に収集できた資料は書き言葉を中心にして相当量に達するが、その整理分析の成果を報告できたのは一部分にとどまっている。今後とも、広く待遇表現を対象とする研究を継続する中で、今回対象とした言語表現を検討するための基礎的・理論的な研究を続け、それをふまえながら収集した資料の検討を進めて行くことを目指す。

現代敬語行動の研究

学校生活における敬語の研究

A 目的と内容

現代日本語社会の敬語の実態をとらえるために、これまで主として地域社会、職場社会において調査研究が重ねられている。本研究では、こうした研究の一環として、従来議論の多い学校生活における敬語の実態を把握し、議論のための確実な基礎を築くことを目的とする。具体的には、中学校・高等学校を中心とする各学校の日常生活における生徒・教師の敬語行動を臨地調査により把握しようとする。

B 担当者

言語行動研究部第一研究室

室長 杉戸清樹 研究員 尾崎喜光 (元. 5. 16 から)

研究補助員 塚田実知代

日本語教育センター第一研究室

研究員 相澤正夫 (山形県の調査に調査員として協力した)

C 本年度の研究経過

平成元年度は3年計画の第2年度にあたる。前年に実施した準備調査に基づいて、以下の調査を実施した。

(1) 山形県東田川郡三川町立三川中学校での調査

- ① アンケート概観調査 (全生徒 339 人)
- ② 面接事例調査 (7 グループ 42 人)
- ③ 録音資料収集 (クラス討論場面, 生徒会場面, クラブ活動場面)

(2) 大阪府内の高等学校での調査

- ① アンケート概観調査 (10 校, 総計約 1,050 人)

② 面接事例調査の準備調査（本調査は次年度に予定）

また、実施した各種調査のデータを整理し、電子計算機処理のためのコーディングと入力を進めた。このほか、学校生活、クラブ活動などに関連する参考資料・文献の収集と検討も行った。

D 今後の予定

平成2年度は研究計画の最終年度にあたる。以下の各種調査を実施するとともに、それらの結果の整理と分析を進める。

(1) 大阪府内の高等学校での調査

① 面接事例調査（2校，計60人予定）

(2) 東京都内の中学校・高等学校での調査

① アンケート概観調査（中高各20校，総計約4,000人予定）

② 面接事例調査（中高各3校，計180人予定）

③ 録音資料収集

(3) 山形県三川中学校での補充面接調査

調査研究全体のまとめと報告論文は、平成3年度以降、できるだけ早くに公表することを目指す。

漢字仮名まじり文の読みの過程に関する研究

A 目 的

漢字仮名まじり文の読みの過程とアルファベットの文字体系による読みの過程を比較することによって、漢字仮名まじり文の読みの特徴を明確にする。

研究方法は、当面は、読みの際の眼球運動の測定を用いる。

B 担 当 者

言語行動研究部第二研究室

部長 神部尚武

C 本年度の経過

本年度は、特別研究5年計画の3年次に当たり、次の研究を行った。

- (1) 読みの眼球運動における一つ一つの注視点の位置と、停留時間を、文章に重ねて表示するシステムを検討している。読み手の頭が多少動いても文章の上の注視点の位置を正確にとらえる装置をめざして、改良中である。
- (2) 研究結果の一部を「眼球運動と読みの過程(Ⅱ) — 測定法の問題 —」という題で、日本心理学会第53回大会論文集(1989.11.28-30 筑波大)に報告した。また、「横組み — その可読性について」という題で、アステ 第7号(1989)に報告した。

D 今後の予定

- (1) 注視点記録装置を完成する。
- (2) 注視点の位置と停留時間が文章の中のどのような要因の影響をうけるかを明らかにする。

談話中での音声特徴の変動についての 準備的研究

A 目 的

談話中に生じる音声特徴の確率の変動の実態を把握するための方法論および実験・解析手法についての準備的研究をおこなう。

B 担 当 者

言語行動研究部第2研究室

研究員 前川喜久雄

C 研究経過

喉頭音源の有声区間の変動を研究対象とした。新たに導入したパソコン上のデジタル音声分析システムを利用して自然談話中におけるイ) 狭母音/u/の有声子音の前での無声化ないしは弱化, ロ) 無声子音間での広母音/a/の無声化, ハ) 母音間での無声子音/h/の有声化を観察して近傍音韻環境の影響を把握したのち, 音韻環境および発話速度が喉頭音源の on/off におよぼす影響を実験環境下において定量的に測定した。

音韻環境については 1) 先行子音の調音様式の影響, 2) 後続子音の影響, 3) 後続子音とともに音節を構成する母音の広/狭の差の影響, 4) 語頭/語中の位置の差の影響を確認できた。発話速度に関しては外部クロックに同期させて発話をおこなう実験方式を採用し, 7段階にわたって速度を変化させた実験をおこなった。その結果, イ) は最高にちかい速度で生じること, ロ) はやや速い速度で生じはじめること, ハ) は普通の速度においても頻繁に生じていることを確認した。これらの実験結果は電子情報通信学会技術研究報告 SP-148 に「発話速度による有声区間の変動」と題して報告し, 所外研究者からの批判をもとめた。

方言文法地図作成のための研究

A 目 的

『方言文法全国地図』の原稿を作成し、『方言文法全国地図』を刊行することを目的とする。

『方言文法全国地図』は、文法事象に関するこれまでの研究に地理的視野を与えることを目的としている。これまでの方言文法研究は、各方言における個々の文法事象の特徴や文法体系の特徴を、共通語と対照しつつ、あるいは方言独自に記述するものが主であった。本書の刊行の目的は、これまでに記述されている各地の文法事象が、どこに、どのような広がりをもって分布しているかを、全国的な視野で明らかにすることによって、以下に記すような分野の研究あるいは教育に貢献することにある。

- (1) 各地の文法体系に関する研究を促進する。
- (2) 分布類型論、および、方言区画論に寄与する。
- (3) 文法事象の全国分布を言語地理学的に解明する。
- (4) 全国共通語の基盤とその成立過程を明らかにする。
- (5) 文献研究による日本語の歴史と方言分布との関連について考察する。
- (6) 方言社会、あるいは、方言地域出身者に関わる国語教育・日本語教育のあり方について検討する。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

室長 沢木幹栄 研究員 小林 隆 大西拓一郎(2.3.1から) 白沢宏
枝 非常勤研究員 W. A. グロータース 佐藤亮一

平成元年度の地方研究員は次の各氏に委嘱した。

担当地区	氏名	所属機関(職)
南東北	加藤 正信	東北大学文学部(教授)
関東	大島 一郎	東京都立大学人文学部(教授)
中部	馬瀬 良雄	信州大学人文学部(教授)
東海	山口 幸洋	静岡大学教養部(非常勤講師)
北陸	真田 信治	大阪大学文学部(助教授)
近畿	山本 俊治	武庫川女子大学文学部(教授)
中国 I	室山 敏昭	広島大学文学部(助教授)
四国	土居 重俊	高知学園短期大学(非常勤講師)
北九州	愛宕八郎康隆	長崎大学教育学部(教授)
南九州	田尻 英三	福岡大学人文学部(教授)

C 本年度の研究経過

本年度は先に刊行した『方言文法全国地図』第1集(助詞編)に続く第2集(活用編I)の刊行のための準備を行った。

具体的な手順は次の通り。

- (1) 今後の編集作業に役立てるために、前年度に刊行した『方言文法全国地図』第1集の内容、および、それを刊行するまでの作業について、評価と反省を行った。また、地方研究員に、第1集についての感想・意見を求めた。その結果、調査法、編集の方法、今後の研究等に関する広い意見を得た。
- (2) 調査者によって異なることが多い音声表記をどう解釈するか検討した。
- (3) 第2集の項目を確定した。
- (4) 沢木、小林、佐藤の3人の地図作成の分担を決定した。大西は沢木の分担項目を引き継いだ。

グロータースは第2集の全体を見通すために、独自の見地から地図を作成した。

- (5) 沢木、小林、佐藤の3者は、それぞれの分担した活用形について、ど

のような語形が出現するかを予想した上で記号の与え方の原則を考えた。そのうち、この原則は討議をへて決定された。なお、今後、作業の進捗により変更もありうる。

- (6) どの範囲までを質問の主旨に合致する語形と認めるかについて検討した。
- (7) (5)(6)の方針に従って地図を作成した。また、個々の語形に関する疑問について地方研究員等に問い合わせを行い、回答を得た。
- (8) 「資料一覧」の形式について検討を行った。
- (9) 「資料一覧」のためのデータを整備した。この作業にはパーソナルコンピュータPC 9801を使用した。

D 次年度の予定

『方言文法全国地図』の第2集を刊行し、第3集の刊行準備を行う。

また、今後の研究に役立てるため、この地図集の調査に用いた調査文について、問題点を整理する。

方言分布の歴史的解釈に関する研究

A 目 的

方言分布の歴史的な性格を解明し、その成果に基づいて従来の国語史を見直す。ここでは、主に、方言・文献間における語の意味の対応関係、方言の史的位相性、全国方言分布の成立過程の三つのテーマについて明らかにするために、基礎的な問題の考察、資料の整備、新たな調査の企画などを行う。国立国語研究所が、これまで蓄積してきた方言地理学的方法・資料を、今後国語史に生かしていくという、発展的継承のための研究と位置付ける。

B 担 当 者

言語変化研究部第一研究室

研究員 小林 隆 白沢宏枝

小林は、仕事の全体を担当し、白沢は、下記C(1)の白地図の製作、およびアルバイトの管理に協力した。

C 本年度の仕事

(1) 方言・文献間における語の意味対応についての考察

文献国語史と方言地理学との対照から語史の構成を行おうとする場合、同一語形であるにもかかわらず、文献と方言とで意味が対応しない現象がしばしば確認され、問題となっていた。しかし、この問題を詳しく検討するためには、現在公にされている方言地図の項目では著しく不十分であり、体系的かつ詳細に意味項目を設定した地図が必要となる。そこでまず、『日本言語地図』の身体項目について、関連意味項目（例えば、〈下顎〉に対して〈上顎〉〈頬骨〉など）の全国方言分布地図を作製する。そして、その資料を、意味的に問題のある語史の記述に役立てる。

さらに、この資料を利用して、文献と方言との語の意味対応のパターンを整理し、不対応が生じた原因について概括的に考察したい。

なお、作製する地図の資料として、昭和61年度に通信調査により、50項目1400地点分の回答を収集している。この地図は、現在、通信調査法で大規模な方言分布調査が可能かどうかという実験的意義ももつ。

本年度は、地図作製のための次のような準備作業を主とした。

①回答者情報（氏名・生年・住所・在外歴など）の確認・整理。②回答地点番号（国研システムによる）の決定。③調査票への回答地点番号打ち。④調査票の回答の確認。⑤調査票からカードへの回答転写。⑥カードへの調査票・回答地点番号打ち。⑦カードへの回答者情報付け。⑧項目ごとのおおまかな回答分類。⑨白地図の製作。⑩記号ゴム印の製作。

また、調査地点図や回答者情報の地図など基礎的な地図の作製を終え、調査項目の地図化に入った。

現在、作製済みの地図からは、ある語について、文献上きわめて用例の限られる意味が、方言上広い分布領域をもつ場合がある（例えば、カオの〈容姿〉の意味）一方で、逆に、文献上用例の豊富な意味が、方言上きわめて限定された分布しかもたない場合がある（例えば、マミの〈まなざし〉〈目もと〉の意味）、というようなことがわかってきている。

なお、上記の仕事は、平成元年度科学研究費奨励研究(A)「文献と方言との間における語の意味の対応関係についての研究」と関連させて行った。

(2) 方言の史的位相性についての考察

従来、方言を国語史の資料として用いる場合、それが位相（文体・階層）上どのように位置付けられるかということについては、基本的なことでありながら十分おさえられていなかった。方言は、基本的に庶民階層の口頭語史を反映するものではないかと考えるので、その点を明らかにしたい。もし、それが当たっているなら、方言による国語史は、これまでの文献による国語史を位相的に見直し、補強することに役立つはず

である。具体例において、文献と方言をからみあわせつつ、位相的な視野の広がりをもった語史の記述も行ってみたい。

本年度は、〈馬〉の歌語であるはずのコマが、方言では〈牡馬〉の意味に限定されて広く現れることの原因を探り、歌語と方言との位相面での関係を通時的に考えようとした。そのために、①関連研究論文の収集、②文献上の用例採集、③馬の文化史についての情報収集、などを行った。

(3) 全国方言分布の成立過程についての考察

これまで、国語史と言えば中央語史を指したが、日本全土にわたる国語史の記述が理想であることは、言うまでもない。そのためには、全国方言の形成史について知ることが必要となろう。そこで、まず、『日本言語地図』にみる現代の全国方言分布と、中央文献資料とを対比することにより、前者の史的傾向を概括的に探ることにする。それを一つのがかりに、全国方言分布がいかにつくりあげられてきたかという、形成史への考察に及びたい。

本年度は、東西対立分布の成立過程について考察を進めた。『日本言語地図』と文献資料をもとに、東西語形の伝播の順序・中心地・範囲などの点での類型を抽出することを主要な目的とした。前年度は、東西語形が、文献上どのような現れ方をするかという史的事実を明らかにしたが（「方言における東西対立分布の史的傾向」『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』平元・6、桜楓社）、本年度は、それに文献国語史のおよび方言地理学的方法による通時的考察を加えた。

次に、平成元年度科学研究費総合研究(A)「日本人とその文化の地域性」(代表：大林太良)を通じて、関連諸科学との交流により広い角度から、方言分布も含めた日本文化の地域差の成立について考えようとした。また、その基礎資料を充実させるために、徳川宗賢氏と共同で、全国規模の新たな方言分布調査の計画(項目・方法など)を検討しはじめた。特に、本年度は、調査の概略について見通しを得るとともに、方言研究者、国語史研究者、および文化人類学・民俗学など隣接科学の専門家から意

見を聞いた。

D 今後の予定

(1) 方言・文献間における語の意味対応についての考察

『日本語地図』の関連意味項目地図の作製を続ける。

なお、通信調査法を用いたことによる問題、例えば、異表記の同一語形としての認定、生年・在外歴などの条件からはずれる回答者の扱いなど、作業の初期段階で検討すべきことがらがある。

(2) 方言の史的位相性についての考察

歌語コマをめぐる上記の問題について、調査・考察を続ける。

(3) 全国方言分布の成立過程についての考察

東西対立分布について調査・考察を続け、一応の結論を得たい。

また、新しい全国調査については、項目・方法のおおかたを確定し、準備調査を行いたい。

自然科学用語の語史研究

A 目 的

幕末・明治期には、それ以前の時代の日本語の語彙に著しく欠けていた自然科学関係の用語が多く作られたり、中国から取り入れられたりした。それらの語の歴史については、ほとんど明らかにされていない。この研究では、数学・物理学・化学・生物学・医学・天文学・地学における用語、約400語の定着してゆく歴史を明らかにする。

B 担 当 者

言語変化研究部第二研究室

部長 飛田良文 室長 梶原滉太郎 研究補助員 中山典子

C 本年度の作業

以前の作業で選び出した用語について、それらの定着してゆく歴史を明らかにするため、前年度に引き続き自然科学関係の専門書・概説書・啓蒙書などから用例採集を行った。本年度は数学・物理学・化学・生物学・天文学・地学の6科目について、主に明治時代の文献延べ37冊から合計約7,000枚の用語カードを作成した。

数学……合計5冊，合計744ページ

- ・『星学図説』巻上・下 いずれも明治4年 神田孟格（訳）
- ・『地文学簡易教科書・全』 明治31年 横山又次郎（編）
- ・『天文学一夕話』 明治35年 村上春太郎
- ・『天文講話』 明治35年 横山又次郎

物理学……合計7冊，合計1,803ページ

- ・『地質学教科書』 明治29年 横山又次郎（編）

- ・『地文学簡易教科書・全』 明治31年 横山又次郎（編）
 - ・『天文学一夕話』 明治35年 村上春太郎
 - ・『天文講話』 明治35年 横山又次郎
 - ・『地学概論』 明治35年 横山又次郎
 - ・『自然界之応用』 明治36年 榊原常吉ほか（訳）
 - ・『最新天文講話 付ハリー彗星』 明治43年 本田親二
- 化学……合計7冊，合計1,803ページ

- ・『地質学教科書』 明治29年 横山又次郎（編）
- ・『地文学簡易教科書・全』 明治31年 横山又次郎（編）
- ・『天文学一夕話』 明治35年 村上春太郎
- ・『天文講話』 明治35年 横山又次郎
- ・『地学概論』 明治35年 横山又次郎
- ・『自然界之応用』 明治36年 榊原常吉ほか（訳）
- ・『最新天文講話 付ハリー彗星』 明治43年 本田親二

生物学……合計3冊，合計1,114ページ

- ・『地学概論』 明治35年 横山又次郎
- ・『自然界之応用』 明治36年 榊原常吉ほか（訳）
- 『博物学史論集』 昭和59年 上野益三

天文学……合計9冊，合計1,987ページ

- ・『星学図説』 卷上・下 いずれも明治4年 神田孟恪（訳）
- ・『地質学教科書』 明治29年 横山又次郎（編）
- ・『地文学簡易教科書・全』 明治31年 横山又次郎（編）
- ・『天文学一夕話』 明治35年 村上春次郎
- ・『天文講話』 明治35年 横山又次郎
- ・『地学概論』 明治35年 横山又次郎
- ・『自然界之応用』 明治36年 榊原常吉ほか（訳）
- ・『最新天文講話 付ハリー彗星』 明治43年 本田親二

地学……合計6冊，合計1,519ページ

- ・『地質学教科書』 明治 29 年 横山又次郎（編）
- ・『地文学簡易教科書・全』 明治 31 年 横山又次郎（編）
- ・『天文学一夕話』 明治 35 年 村上春太郎
- ・『地学概論』 明治 35 年 横山又次郎
- ・『自然界之応用』 明治 36 年 榊原常吉ほか（訳）
- ・『最新天文講話 付ハリー彗星』 明治 43 年 本田親二

以上の 6 科目の総計 37 冊、同 8,970 ページである。なお、上記の書名の大部分に * 印がつけてあるが、それらの文献は、いずれもその内容が 2 科目以上にわたっていて、用例採集作業を 2 科目以上の視点で行ったものである。一つの文献の内容が 2 科目以上にわたる傾向は、一般的に言えば江戸時代や明治時代における学問の時代的な特徴であると言えそうである。このことは、現代に近づくにつれて各学問の専門分野が細分化されてきた事実を見れば、その大すじは明らかであろう。

それから、もう一つの要素として考えられるのは、その科目の性格によっては他の科目によく応用されるもののあることである。本年度の作業を進めつつ感じた例として、物理学は天文学・地学などによく使われており、数学とともにそれらの内容を基礎から支えていると思われる場合も少なくない。

大体、以上のような点を考慮に入れて、本年度も前年度に続いて特に一つの文献の内容が多くにわたっている場合を中心に用例採集を行った。

次に辞書を使った用語調査では『和蘭字彙』（安政 2〔1855 年〕～同 5〔1858 年〕刊行）におけるオランダ語見出しの L～Z までの部分の訳文や訳語の調査を行った。使用したテキストは昭和 49 年に復刻されたもの（杉本つとむ校訂解説、早稲田大学出版部刊、全 5 冊）で、その第 3～5 分冊について調査を行ったわけである。その結果、前年度に調査した分と合わせて『和蘭字彙』についての調査は完了した。

なお、本研究に関連することがらを、論文「専門用語と和語」（『日本語学』'89 年 10 月号〔梶原滉太郎〕明治書院）という題目で発表した。

次に近代語研究資料の調査は、平成元年 12 月 16・17 日の両日、名古屋市

蓬左文庫所蔵の漢訳洋書について調査を行い、昭和57年度に作成した「漢訳洋書目録」草稿の蓬左文庫所蔵本についての確認作業を行った。調査に当たっては同文庫閲覧係の方々のお世話になった。

また、平成2年3月17日～19日の3日間、天理図書館所蔵の漢訳洋書および、その他の漢籍について調査を行った。そのうち、漢訳洋書に関しては昭和57年度に作成した「漢訳洋書目録」草稿の天理図書館所蔵本について確認作業を行ったものである。調査に当たっては同図書館閲覧係の方々のお世話になった。これら二箇所での調査の担当は、いずれも飛田良文・梶原滉太郎である。

さらに、前年度に引き続き漢語に関する研究文献を収集し、目録に補充した。

D 今後の予定

次年度は、明治・大正時代の自然科学関係の専門書・概説書・啓蒙書から用例採集を続ける。そして、天文学については報告書の原稿執筆を始める。

英和辞書における訳語の研究

A 目 的

幕末の開国によって、わが国は西洋の制度・文物を盛んに取り入れたが、それにともなって近代市民社会において種々の用語が必要となった。そして、「哲学」「抽象」などの人文科学関係の用語も多く作られて、こんにちに至っているが、その過程はほとんど明らかにされていない。この研究では、幕末から昭和までの英和辞書 61 種を使って英語見出し 300 語の訳語の変遷を明らかにする。

B 担 当 者

言語変化研究部第二研究室

部長 飛田良文 室長 梶原滉太郎 研究補助員 中山典子

C 本年度の作業

本年度は、語別訳語対照一覧表の検討、調整を行った。その際、漢字表記の訳語の読み方（索引の見出し）で、問題となった訳語に次のようなものがある。

Anthropology

- 人學——人性論，人身論，人類學などから類推して「ジンガク」とする。
漢音+呉音ではあるが、「學」は一般に「ガク」と読むことから「ジンガク」とした。

Competition

- 相争——「相争フ」の漢字を音読したものと解釈し、「ソウソウ」と読んだ。
- 共進——競進（＝先を競って進むこと）の誤りか。

Individual

- 单身獨形 — 「獨一個人」^{ドクイッゴジン} という熟語があるので、「タンシンドクケイ」と読んだ。「ドクケイ」では、呉音+漢音だが、「獨」は一般的に「ドク」と読まれることから呉音をとった。
- { 簡體 } — 「簡」は「個」の当て字で「一個體」, 「一個物」の「一」
{ 簡物 } がとれたとみなして、「簡」の慣用音の「コ」で読んだ。

Interest

- 分高 — 分高（ブンコウ）という言葉が辞書にはないので、部分（ブワケ）を参考にして、訓で「ワケダカ」と読むことにした。
- 私利心 — 私利（シリ）+私心（シシン）から「シリシン」と読んだ。

Labor

- 大動揺 — 日本国語大辞典によると、明治時代には、「大失策（オホシツサク）」（坪内逍遙『内地雑居未来之夢-9』）, 「大失敗（オホシツパイ）」（末広鉄腸『花間鶯-上・六』）, 「大賛成（オホサンセイ）」（樋口一葉『ゆく雲-上』）などの例があるが、昭和に入っているため、又、「動揺」が漢語なので、「ダイドウヨウ」と読んだ。
- 産苦 — 「お産の苦しみ」ということで、「サンク」と読んだ。

Literature

- 文筆ノ業 — 文筆業^{ブンビツノギョウ}, 著作業^{テウサクノギョウ}などから「ブンピツノギョウ」と読んだ。
- 書範 — 漢音+漢音で「ショハン」と読んだ。

Notion

- 意旨 — 「旨」は「旨」の俗字（大字典）。「イシ」と読んだ。
- 怪想 — 「カイソウ」とも「ケソウ」とも読めるが、漢音+呉音で「カイソウ」と読んだ。
- 誤念 — 「思念（シネン）」のところで「念」を「ネン」と読んだので、「誤念（ゴネン）」と読んだ。（この基準については昭和62年度の『年報39』の41ページ参照のこと。以下「基準より」と略

す。)

Prosperity

- 吉昌——繁昌, 昌盛, 隆昌とを参照して「キッショウ」と読んだ。(基準より)

Psychology

- 魂學——靈魂學の略と考えて「コンガク」と読んだ。

Sarcasm

- 説刺——「セツシ」を読んだ。(基準より)
- 譏辭——「キジ」を読んだ。(基準より)
- 刺語——「シゴ」を読んだ。(基準より)
- 嘲侮——「チョウブ」を読んだ(基準より)
- 反嘲——「ハンチョウ」を読んだ(基準より)
- 冷言——「レイゲン」を読んだ(基準より)

Science

- 熟學——「熟練」から参照して、呉音+呉音で「ジユクガク」と読んだ。
- 突理——漢音+漢音で「トツリ」と読んだ。「突」は「究」の誤植の可能性がある。

Security

- 不用心——不注意, 不抜などから「フヨウジン」と読んだ。
- 不慎——諳厄利亞語林大成の題言によれば、訳字の下に俚俗の語を記すとあり「ツツシマズ」などと訳すべきであろうが、他の訳語とのバランスを考えて「フシン」と読んでおいた。
- 書入物——擔保物(タンポブツ)などから「カキイレブツ」と読んだ。

Simile

- 直比——直喩との類比から類推して、漢音+漢音で「チョクヒ」と読んだ。

Society

- 社——仲間, ツレ, 會という意味から、訓を採用して「クミアイ」とする。

Speculation

- $\left\{ \begin{array}{l} \text{相庭事} \\ \text{相庭事スル} \end{array} \right\}$ — 隨筆守貞漫稿一七に「万物の日価時価を俗に相場相庭と云さうばと訓ず。」とあることから「ソウバゴト」と読んだ。
- 相傷事 — 相庭事（ソウバゴト）から類推して「ソウショウゴト」と読んだ。相消（ソウショウ）＝「そうさい（相殺）」のあて字か。
- 臆定 — 臆説（オクセツ）、臆測（オクソク）などから類推して「オクテイ」と読んだ。
- 投機事 — 相庭事（ソウバゴト）、相傷事（ソウショウゴト）などから類推して「トウキゴト」と読んだ。

Structure

- 模式 — 模において、モカボの音にはカタという意味があり、式は一般的な読み方ではシキと呉音で読まれることから、呉音＋呉音でモシキと読んだ。

Symmetry

- 相稱フㄱ — 大字典に「アイカナウコト」とあり。
- 等對 — 對等の字順を逆にしたものと考えて「トウタイ」とする。
- 相宜 — 相称（ソウショウ）、相応（ソウオウ）から、呉音＋呉音で「ソウギ」と読んだ。
- 對齊 — 均齊（キンセイ）、整齊（セイセイ）に準じて、「タイセイ」と読んだ。
- 等稱 — 對称（タイショウ）、相稱（ソウショウ）に準じて「トウショウ」と読んだ。

Sympathy

- 同覺 — 「ドウカク」と読んだ。（基準より）
- 共受 — 「キョウジュ」と読んだ。（基準より）
- 相合 — 呉音＋呉音で「ソウゴウ」と読んだ。（基準より）

- 共愛——漢音+漢音で「キョウアイ」と読んだ。(基準より)
- 傳感性——「デンカンセイ」と読んだ。(基準より)
- 互感——「ゴカン」と読んだ。(基準より)
- 同氣相引——「同氣」(ドウキ)は大漢和に「同じ氣を有する、又其のもの」とあり、「相引」(ソウイン)も大漢和に「互に引く」とあるが、「同氣相引」では辞書にみられない。

Temperament

- 稟賦——稟は稟の俗字。この稟の字には(1)リン(2)漢音ヒン、呉音ホンの読み方があり(大字典)、それぞれ、(1)コメグラ(2)天賦ノ性の意味がある。したがって、「ヒンプ」が正しい読み方である。ただし、ふり仮名に「リンプ」、「リンブ」とあるので、ここでは「リンプ」、「リンブ」と読むことにした。
- 調率——率の「リツ」の読み方には「わりあい」という意味があるので、慣用音の「ソツ」ではなく、「リツ」と読んだ。

Theory

- 埋ノミヲ講窮スル學——学研漢和大字典に「窮」の字は「究」の異音同義の親字として出ている。「理ノミヲ講^リ窮^{コウ}スル^{スル}學」と読んだ。
- 理窟——学研漢和大字典に「窟」は「窟」の書きかえ字として用いることがあるとあった。「リクツ」と読んだ。

Tradition

- 遺言——呉音+呉音で「ユイゴン」と読んだ。日本国語大辞典によると、現代の法律では習慣として「イゴン」と読む。
- 口授——
 - {(1) 口授
 - {(2) 直弟子が記録に留めなかった基督の^{コウジツ}口授の教訓
 新明解国語辞典(三省堂)によると、「口授」を「クジュ」と読むと「師から弟子へ、直接口移しに教えること」であり、「コウジュ」と読むと、「書いた物を見て言うのではなく、頭にあ

ることを直接口で教え伝えること」である。

- 遺鉢——「衣鉢をつぐ」という言葉があることから、「遺」という字は「衣」の誤植ではないだろうか。

Traffic

- 運輸貨物——新潮国語辞典によると「貨物」を「カブツ」と読んだ場合、意味は「①有形の財貨，②荷物」であり、「カモツ」と読んだ場合、意味は「鉄道では手荷物・小荷物以外のもの」である。ここでは「ウンユカモツ」と読んだ。

Universal

- 普稱命題——全稱命題を参考にして「普稱」を呉音で「フショウ」と読んだ。

Vanity

- 矜慢——大漢和辞典，日本国語大辞典などに「矜慢」という言葉はみあたらないが，大漢和に「矜誇（キョウクワ）」があるので，「矜誇」に準じて，呉音+呉音で「キョウマン」と読んだ。
- 虚樂——「大漢和」，「日本国語大辞典」には「虚樂」という言葉はみあたらないが，「虚誇」，「虚言」などを参照して，漢音+漢音で「キョラク」と読んだ。（基準より）
- 榮華心——「大漢和」，「日本国語大辞典」には「榮華心」という言葉はみあたらないが，「慢心」，「虚榮心」などを参照して，「エイガシン」と読んだ。（基準より）
- 浮世心——「ことばの泉」（落合直文著，ノーベル書房）に「ウキヨゴコロ（浮世心）」とあった。

Wit

- 諧言——漢音+漢音で「カイゲン」と読んだ。
- 奇警ノ詼諧——詼諧の「諧」には「いつわる。うそ。」（大漢和辞典）という意味がある。そこで，詼諧は詼諧の誤りである可能性はあるが，ここでは「カイク」と読んだ。

○術——「ジュツ」と読んだ。(基準より)

○気ノキヽタル男——気は気の異体字である。

以上により、語別訳語対照一覧表を完成し、訳語索引の見出しの立て方（整理基準）を決定した。

D 今後の予定

次年度は、「人文関係用語の訳語索引の作成」に移る。

『花柳春話』の文体別使用語彙の比較研究

A 目 的

口語文の成立する以前に主流を占めていた漢文直訳体と和文体とが現代語の源流として、どのような役割を果たしたかについては全く明らかにされていない。『花柳春話』は明治初期の代表的翻訳小説で、漢文直訳体と和文体の二通りの翻訳がある。この二種類の文体に現れる語彙を比較し、文体の特色と現代語とのつながりを探る。

B 担 当 者

言語変化研究部第二研究室

部長 飛田良文 研究補助員 中山典子

C 本年度の作業

書きことばにおける漢語の使用状態は文体による相違が著しい。そこで同一作品の翻訳で、同一訳者による、文体の異なる作品『欧州奇事花柳春話』（漢文直訳体）と『通俗花柳春話』（和文体）の語彙について比較し、その対応語比較表を作成するための準備作業を行った。

D 今後の予定

漢文直訳体の漢語は、和文体ではどのように対応しているか、一覧表を作成し、文体の特色を明らかにする。

児童・生徒の漢字習得に関する調査研究

A 目 的

児童・生徒の漢字の習得過程を明らかにすることを目的として、昭和56年度から行っている。

B 担 当 者

言語教育研究部第一研究室

室長 島村直己 研究補助員 小高京子

C 本年度の作業

- (1) 科研費「常用漢字の学習段階配当のための基礎的研究」(1982～1984年度)で行った漢字の習得度調査の結果を、次の二つに関してさらに分析した。
 - ① 漢字の習得率と画数との関係について分析した。音訓単位に計算すると、読みの場合は画数の多い漢字は習得率が高く、書きの場合は画数の多い漢字は習得率が低い。読みと書きの違いについて検討した。
 - ② 音読みと訓読みとの関係について分析するために、上記調査の一部として行った習得量調査の結果をコンピュータに入力した。
 - ③ 上記調査の補充的な調査として行った100字の書き取りテストの分析を行った。分析結果を、日本国語教育学会言語部会(1990.1.20)で報告した。
- (2) 科研費「漢字情報のデータベース化に基づく常用漢字の学習段階配当に関する研究」(1986～1988年度)で行った漢字の学習指導に関するアンケート調査の分析を行った。分析結果の一部を、全国大学国語教育学会(1989.8.3)で報告した。

D 次年度の予定

本研究は、本年度で終了する。残された課題については、次年度から開始する「漢字の学習指導の実態に関する調査研究」の中で行う予定である。

児童・生徒の語彙力調査のための基礎的研究

A 目 的

児童・生徒の語彙力を調査するための基礎的な研究を行うことを目的として、本年度から行っている。

B 担 当 者

言語教育研究部第一研究室

室長 島村直己 研究補助員 小高京子

C 本年度の作業

(1) 調査語彙の選定に関する基礎的研究

科研費「漢字情報のデータベース化に基づく常用漢字の学習段階配当に関する研究」(1986～1988年度)で作成した教育基本語彙データベースの拡充・校正作業を行った。このデータベースには、現在までに、阪本一郎氏の『教育基本語彙』(1958年)『新教育基本語彙』(1983年)に収録されている語彙を登録している。

(2) 語彙力の測定方法に関する基礎的研究

語彙力を測定するためにどのような方法が適切であるかを、児童・生徒にテストを行って検討することを目的としている。本年度は、前年度行ったテストの解答の正誤判定を行い、一部分析を行った。

D 次年度の予定

1. 調査語彙の選定に関する基礎的研究

教育基本語彙データベースの拡充・校正作業を続行する。

2. 語彙力の測定方法に関する基礎的研究

前年度行ったテストの分析を行うとともに、テスト方法に関して検討する別のテストを実施する。

幼児・児童の書きことばの獲得 に関する調査研究

A 目 的

幼児ならびに就学前後の児童の読み書きの獲得過程を明らかにする。とくに幼児・児童の書きことばの獲得を可能にしている社会的・文化的な状況に注目して、その構造と機能を明らかにする。

B 担 当 者

言語教育研究部第一研究室

研究員 茂呂雄二

C 本年度の経過

(1) 保育園における参加観察

本年度は幼児－保育者の相互作用過程に焦点を当てた。保育園に設定されている朝の自由保育の時間を週に一回参加観察した。

(2) 保育者の働きかけについての映像資料の収集

朝の自由保育時間に見られる、保育者の絵本の読み聞かせ、幼児と保育者の共同の読み書き、幼児同士の読み書きを中心に約10時間の映像資料を収集した。

D 次年度の予定

(1) 本年度採集した保育者の働きかけについての映像資料を談話分析し、相互作用パターンを取り出す。

(2) 一斉保育場面の保育者の働きかけの映像資料を収集する。

資料評価のための探索的研究

A 目 的

言語研究において資料を的確かつ高度に利用するためには、言語学における資料のありようそのものを研究することが必要である。本研究は、国立国語研究所に蓄積された資料を調査・整理し、あわせて、それらの資料にまつわる情報を広く収集することによって、資料の特性の把握のあり方、及び効率的かつ的確な資料の活用の可能性を探る（資料の評価）ことを目的とする。

B 担 当 者

情報資料研究部第一研究室

室長（事務取扱）江川 清 研究員 井上 優 研究補助員 辻野
都喜江

C 本年度の作業

平成元年度は、所内の録音資料について調査対象・形式・記載内容を検討し、一部情報を収集した。また、所外機関の資料活用法の調査として、国立民族学博物館などを見学した。

D 次年度の計画

- (1) 国立国語研究所から出された報告集に関連する所蔵資料（社会言語学・言語地理学をのぞく）を調査し、その目録を作成する。
- (2) 所外の資料活用法について、書籍・雑誌等で情報を収集するとともに、外部研究機関（京都大学大型計算機センター等）を見学する。
- (3) 言語研究における資料のありかたについて考察する。

新聞における国語関係記事の蓄積と 活用法に関する準備的研究

A 目 的

昭和 24 年から継続して蓄積されている「新聞所載国語関係記事切抜集」は、現在、各月ごとに日付順で製本されているだけなので利用しにくい。これに索引をつけ、検索できるようにして、資料としての活性化をはかることを目的とする。

B 担 当 者

情報資料研究部第一研究室

室長（事務取扱） 江川 清 研究員 井上 優 中曾根仁 研究補
助員 辻野都喜江

C 本年度の作業

本年度は次の二つのことを行った。

- 1 新聞記事収集・保存の方法についての検討
- 2 パソコン上で「新聞記事台帳」を作成するための検討

以下に、具体的な方法や作業の経過を述べる。

1. 新聞記事収集・保存について

この調査は、「国語及び国語問題に関する情報の収集・整理」のテーマで旧文献調査室で行っていたものを継承している。

1.1. 調査対象とする新聞の検討

前年度までは、一般紙 8 紙（全国紙「朝日・毎日・読売・産経・東京・日経」、地方紙「北海道・西日本」）から記事を収集してきた。また、「図書新聞」「新聞協会報」など、一般紙以外からも記事の収集をしてきた。しかし、本年度は、検討のうえ、5 月から「朝日・毎日・読売」の 3 紙に

限定することにした。これは、

- ① 収集記事の活用法を検討し、「国語関係記事台帳」を作成し、マニュアルの作成を考えるための時間を確保するため。
- ② 収集される記事には、各紙共通で内容が重複するものが多い。

などの理由からで、今後この調査を継続していくためには、国民一般のレベルのことがらに関する記事で、縮刷版のあるものをデータベース化していくことが望ましいと考えたためである。

1.2. 調査対象とする記事の内容の検討

- ① 記事の主題が言葉に関するものであること。
- ② 社会一般の視点からみて重要であり、将来も資料として利用価値の高い内容であるもの。
- ③ 新聞発行当時の日本語事情を反映していると考えられる内容であるもの。
- ④ 国立国語研究所の研究内容に関係するもの。

記事の枕に言葉の問題を扱っているものや、啓蒙的な内容の記事はとらない。

1.3. 切抜き記事の保存法の検討

従来は切抜いた記事を台紙にはって、製本していた。この方法には次のような欠点があった。

- ① 記事を台紙にはるには、労力・熟練が必要なこと。
- ② 時間の経過により紙面の劣化が著しく、記事が読みにくくなること
- ③ 記事をはった台紙がかさばり、製本費・保存空間が必要なこと。

これらの問題点を改善するために、切抜いた記事を台紙（B5判、90kg）に直接コピーする方法に切替た。将来的にはOCRを用いて記事を直接計算機に入力することを考えているが、現段階ではまだ読取りの精度・装置の価格などに問題がある。

本年度の収集記事の点数は次のとおりである。

数	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1,619		289	256	207	304	72	40	57	66	78	87	92	71

購読新聞や、収集する記事の内容をしばったことで、5月以降の記事の点数は大幅に減った。

1.4. 作業の分担 朝日・毎日・読売3紙のうち1紙は、室員がみて切抜いた。2紙からの切抜き及びコピー化、また、計算機への入力を試み（下記の「台帳」に準じた方法）は、アルバイトに依頼した。

2. 「国語関係記事台帳」の作成について

2.1. 概 略

昭和24年から図書館に所蔵し、閲覧に供している「新聞所載国語関係記事切抜集」（以下「切抜集」と略す）を活用しやすくするために、パソコン上（既成のデータベース・ソフトを利用）で「国語関係記事台帳」（以下「台帳」と略す）を作成する。この「台帳」は、「切抜集」に含まれる記事の整理、及び将来のデータベース化を行うための基礎となる台帳である。

この「台帳」は1年単位で作成する。すなわち、1年分の「切抜集」にたいして一つの「台帳」ファイルが対応する。

この「台帳」の作成は、「切抜集へのナンバリング→計算機への情報入力」という順で行う。

2.2. 記事番号

2.2.1. 原 則

「台帳」では一つの記事に対して一つの記事番号をつけることにし、1年分ごとに通し番号をつけることにした。

2.2.2. 記事番号のナンバリング

1枚の台紙に二つ以上の記事があるとみなされた場合は、次のように処理することにした。

1：1枚の台紙に（異なる新聞の）同一内容の記事がある場合は、大きい

ほうの記事に関する情報だけを入力し、備考に他の新聞名を記入する。

2：1枚の台紙に内容が異なる複数の記事がある場合は、別の記事として扱う（パソコン上では別の項目とする）が、記事番号は同じにする。すなわち、1枚の台紙に複数の記事番号をつけない。また枝番も使わないという原則をたてた。

2.3. 入力情報

「台帳」には、次の情報を入力することにした。

- A 記事番号
- B 掲載年（→「切抜集」の背表紙にあわせる。あとで西暦に統一）
- C 掲載月日
- D 新聞名
- E 朝刊夕刊
- F 地方版（大阪版・名古屋版の場合）
- G ページ
- H 欄名
- I 執筆者名（署名記事の場合）
- J 見出し（新聞に書いてある見出しを適宜選択し記入する）
- K 備考（見出しだけでは記事の内容がわからない場合の補足的情報）
- L 内容1（記事の内容）
- M 内容2（ ” ）
- N 内容3（ ” ）
- O 内容4（ ” ）
- P 採用不採用（データベースとして採用するかどうか）
- Q 入力日
- R 入力者

2.4. 情報入力の試み

上記の原則のもとに、本年度は、41年・51年・61年の一部分ずつの入

力を試みた。

D 次年度の予定

1990年度で、記事収集・整理・保存の方法を確立し、マニュアルを完成させる。また、1991年度から国語関係記事の活用法を本格的に検討するための研究を行う。

- ① 国語関係の新聞記事をマニュアルにしたがって収集する。
- ② 国立国語研究所所蔵の新聞記事の一部（昭和31・41・51・61年，約8,000件）について、「国語関係記事台帳」を作成する。
- ③ 記事の活用法に関する研究の一環として、新聞記事の内容分類を行い、試験的に情報を計算機に入力する。

社会言語学資料についてのデータベース 構築に関する準備的研究

A 目 的

これまでに国立国語研究所の内外で行われてきた各種の社会言語学的調査研究によって、膨大な量の資料が蓄積されてきている。本研究は、これら調査資料の有効的活用をはかるためのデータベース構築にむけて、その準備的調査研究を行うことを目的とする。

B 担 当 者

情報資料研究部第二研究室

室長 米田正人 研究員 熊谷康雄 研究補助員 磯部よし子

C 本年度の研究経過

準備的研究の初年度として、全体的な枠組み、および作業手順などの検討を行った。また、出版が遅れていた言語行動場面に関する報告書、『場面と場面意識』（国立国語研究所報告 102, 三省堂刊）を刊行した。なお、データベース構築に関する作業経過の具体的な内容は以下に示す 1. から 3. のとおりである。

1. 所内蓄積資料の調査・整理

国立国語研究所が創立以来蓄積してきた社会言語学的調査資料を整理するための具体的な作業手順について検討を行った。

2. データベース構築の問題点の整理・検討

上記資料をデータベース化する際に発生するであろう問題点の洗い出しを、具体的事例に基づいて整理・検討した。

3. 所外資料の調査

国立国語研究所外で作成された社会言語学的資料の所在等に関する調査

方法の検討を始めた。

D 次年度の予定

次年度は2年計画の2年次にあたり、以下の作業を継続するとともに準備的研究の収束を計る。また、科研費で行った「北海道における共通語化および言語生活の実態」に関する報告書の刊行にむけて、その一部の研究を分担する。

1. 所内蓄積資料の調査・整理の継続

前年度に引き続き、国立国語研究所内の社会言語学的調査資料について順次調査整理を行う。

2. データベース構築の問題点の整理・検討の継続

問題点の洗い出しを継続するとともに、一部の資料について実際にデータベースを試作し、社会言語学データベースの骨組みを明確にする。

3. 所外資料の調査

国立国語研究所外で作成された社会言語学的資料の調査を行う。

文献情報の収集・整理法に関する準備的研究

A 目 的

国語学及び関連諸科学の研究動向を把握し、より効率的に文献情報を提供するために、文献・研究情報全般について、収集法及び整理法の検討を行う。

B 担 当 者

情報資料研究部第二研究室

部長 江川 清 研究員 田原圭子 伊藤菊子

C 本年度の研究経過（2年計画第1年度）

本年度は次のことを行った。

1. 『国語年鑑』の作成
- 1.1. 文献及び研究情報の収集・整理

刊行図書の調査 1989年度に当研究所で受け入れた図書およそ2,000冊、並びに「日本全国書誌」（国立国会図書館編）等から得た文献情報62,000件余りを調査対象にして、各々の内容を調査し日本語関係の文献を選び出した。採録範囲内のものについては、書名・著（編）者名とその読み・発行所・発行年月・判型・ページ数・目次・解説・分類記号を記載したカードを作り、分類別目録カードを作成した。1990年3月20日現在で約1,600枚の収集・整理を行った。

雑誌論文の調査 1989年度に当研究所購入の諸雑誌、並びに大学、学会、研究所等から寄贈された雑誌、紀要・報告類約870誌（臨時受入誌を含む）及び抜刷等を調査し、日本語関係の研究論文・記事を選び出した。採録論文・記事については、題目・筆者名とその読み・誌名・巻号数・発

行年月・ページ数を記載したカードを1990年3月20日現在で約2,800枚作成した。

これらの文献情報は、刊行図書・雑誌論文とともに、分野別に分類整理を行って1990年版の『国語年鑑』に掲載する。

1.2. 『国語年鑑』1989年版の編集・刊行と1990年版作成の準備

『国語年鑑』は、1989年版を編集した。1988年1月から12月まで1年間の国語学及び関連諸科学の文献情報及び研究情報を収集し、分類等による整理を行って、1989年12月に刊行した。日本語に関する学問の研究成果・関係学会の動向、国語問題など言語生活に関する世論及び国語施策に関する資料等を主な内容としている。

次に、1年間の動向を知る手がかりとして、1989年版『国語年鑑』に採録した文献及び研究情報の冊数(点数)または件数を、目次に従って示す。

第1部文献()内は前年の数である。

刊行図書 総数1,475冊(1,519冊)			
国語一般	29 (47)	マス・コミュニケーション	3 (8)
国語史	20 (20)	国語問題	4 (4)
音声・音韻	11 (15)	国語教育	127(113)
文字・表記	31 (17)	外国人に対する日本語教育	17 (14)
語彙・用語	66 (63)	言語(学)その他	50 (70)
文法	20 (30)	辞典・用語集	
文章・文体	33 (20)	辞典・用語集	195(165)
方言・民俗	76 (61)	索引	25 (31)
ことばと機械	18 (16)	参考資料	127(139)
コミュニケーション		国語研究資料	253(205)
コミュニケーション一般(言語生活)	46 (32)	1988年中のもの計	<u>1,228冊(1,139冊)</u>
言語技術(話し方・書き方)	77 (69)	追補(1987年12月以前のもの)	
			<u>計247冊(380冊)</u>

雑誌論文 総数 3,545 点 (3,620 点)

国語(学)	182(247)	コミュニケーション	136(157)
国語史	68(88)	マス・コミュニケーション	79(75)
音声・音韻	110(85)	国語問題	69(77)
文字・表記	93(98)	国語教育	698(808)
語彙・用語	534(379)	外国人に対する日本語教育	130(139)
文法	257(222)	言語(学)	358(308)
文章・文体	187(186)	国語研究資料	38(54)
古典の注釈	105(107)	書評・紹介	69(77)
方言・民俗	165(182)	1988年中のもの計 3,360点(3,355点)	
ことばと機械	82(66)	追補(1987年12月以前のもの)	
		計 185点(265点)	

採録図書発行所一覧(556件), 採録雑誌発行所一覧(585件)

新聞記事一覧(主な記事のみ217件)

第2部名簿 国語関係者名簿(国内1,866人, 国外81人), 各学会・関係諸団体(80団体)の活動状況ほか。

第3部資料 平成元年3月15日文部省告示の幼稚園教育要領, 小・中・高等学校学習指導要領, 昭和63年度文部省科学研究費による研究題目(285件)・刊行費補助金による学術図書等(33件)の一覧ほか。

索引 文献の部(刊行図書, 雑誌論文, 新聞記事)の著編者名索引
 なお, 前年度に続いて『国語年鑑』1954年版~1989年版に掲載した国語関係者名簿及び文献目録の著編者名を, 電子計算機に入力し, 次の「名簿資料」の補充及び修正をした。

(1) 国語年鑑掲載文献著編者名よみがな辞書'89(20,485件)

(2) 国語年鑑掲載文献著編者別資料'89(1986年版~)

2. 収集・整理法に関する準備的研究

2.1. 文献情報選択基準の検討

基本方針を検討し、部分的な見直しを行った。

2.2. 文献目録の機械処理法の検討

刊行図書・雑誌論文について、文献目録作成に必要な入力データ項目の検討を行った。その上で、図書館とのデータの共有部分、独自部分を整理し、各必要項目の対照表を作成した。

3. 資料集『国語学関係刊行書目』作成のための準備的研究

入力ずみの日本語関係文献データについて一部修正を行った。

D 次年度の予定（2年計画第2年度）

1. 『国語年鑑』の作成

文献・研究情報を収集・整理し、1990年版を編集・刊行する。

1991年版作成の準備をする。

2. 収集・整理法に関する準備的研究

2.1. 文献・研究情報の収集・整理法に関する基準案を一部作成する。

2.2. 文献目録作成のための計算機処理システムを構築し、本格的な機械処理実施への目途をつける。一部試行する。

3. 資料集『国語学関係刊行書目』作成のための準備的研究

分類基準を確立し、細分類及び複数分類を試みる。

大量日本語データの蓄積と検索に関する基礎的研究

A 目的・意義

本研究は、各種の調査に使用するシステムおよびプログラミング技術に関する方法の開発を主目的とするものである。この研究は、現代日本語研究に必要な日本語データベースの作成、データベース化のための基礎資料の収集、データ提供手段の開発、用語・用字調査の効率化をはかる方法論の研究に役立つものとなる。

また、日本語処理のための電子計算機導入に伴う、基本機能・システム構成を検討する場合にも重要である。

B 担当者

情報資料研究部電子計算機システム開発研究室

室長 斎藤秀紀 室長事務取扱 江川 清 (元. 10.1 から) 研究補助員 米田純子

C 本年度の研究および作業

1. 言語処理に関する基礎的研究

前年度に引き続き、現代日本語の用例集を対象とした総合データベースを作成するため、新聞3紙（昭和41年発行・朝日・毎日・読売各1年分）のKWIC用例集（約200万用例）の校正および修正作業を行った。

また、漢字総合辞書（機械処理用漢字辞書）の修正を行うとともに、漢英辞典の巻末音訓索引を入力し、修正作業を行った。

2. 装置の導入および運用に関する研究

汎用電子計算機入れ替作業を行い、今後の計算機システムに関する資料の収集を行った。

D 今後の予定

- 1) 漢字総合辞書と前年度入力した漢英辞典データとの結合を図る。また、調査対象とした漢和辞典（新字源、大漢和、大字典）による画数の違い、字体の違い等を整理し、計算機で出力した台帳に追記する作業を行う。
- 2) 新聞KWIC用例集（約200万短単位）の修正を終え、正順・逆順の用例集を計算機出力する。
- 3) 1と2の新聞・漢字データのデータベース化を試みる。
- 4) 次期コンピュータの在り方をシステム・装置機能の両面から調査検討する。

国語辞典編集のための用例採集

A 目 的

日本語用例辞典「日本大語誌」(仮称) 編集のため日本語全般の用例集めを最終的な目的とするが、当面の目標である 1901 年～1950 年(明治 34 年～昭和 25 年)の資料を対象とし、なるべく広範囲に用例を採集する。

B 担 当 者

主幹 飛田良文 室長 木村睦子 主任研究官 高梨信博 研究員
藤原浩史(1.7.16から) 調査員(非常勤) 伊土耕平(1.8.1から)
貝美代子 菅野 謙 久池井紀子 高橋美佐 服部 隆 林 大 樋野雅彦(1.12.1から)

C 本年度の作業

1. 国語辞典編集調査会の開催

調査会の委員には所外委員 11 人、所内委員 5 人を委嘱した(任期 2 年)。

(所外委員)

菅野 謙 大正大学教授
見坊豪紀 元国立国語研究所第三研究部長
阪倉篤義 甲南女子大学教授
佐藤喜代治 東北大学名誉教授
惣郷正明 朝日新聞社社友
田島 宏 明治大学教授
林 大 国立国語研究所名誉所員
松井栄一 山梨大学教授
馬淵和夫 前中央大学教授

山田俊雄 成城大学教授
頼 惟勤 千葉経済大学教授

(所内委員)

江川 清 言語情報資料研究部長
中野 洋 言語体系研究部第2研究室長
水谷 修 日本語教育センター長
宮島達夫 言語体系研究部長
米田正人 言語情報資料研究部第2研究室長

調査会は2回開催し、下記の議題について検討した。

第1回 平成元年12月27日

- (1) 第3期国定読本について
- (2) スカウト式用例採集の基準について
- (3) 「国定読本用語総覧」作成作業の省力化について

第2回 平成2年3月23日

- (1) 「国定読本用語総覧」作成作業の省力化について
- (2) スカウト式用例の蓄積及び検索方法について
- (3) 用例採集対象資料について

2. スカウト式用例採集

2.1. 用例採集

雑誌『太陽』を調査対象として、スカウト式用例採集を行った。明治34年の各号（増刊号を除く）の前半（80ページ以前）、及び明治42年を調査範囲に選定し、英文・漢文を除く外はすべてを対象とした。1行につき1語の割合で採集する方針で下記の8人に採集を依頼し、目標語を赤丸で囲んでもらった。その結果約150,000語を採集することができた。また、この作業は国語辞典編集準備資料8「スカウト式用例採集の手引き」（見坊豪紀執筆）をマニュアルとして用いた。

(スカウト式用例採集者)

荒尾 禎秀 東京学芸大学助教授

柏木 成章	大東文化大学講師
中田恵美子	中京大学助教授
中田 敏夫	金沢大学助教授
平澤 啓	和歌山大学講師
樋渡 登	都留文科大学助教授
村山 昌俊	埼玉短期大学助教授
湯浅 茂雄	ノートルダム清心女子大学助教授

2.2. スカウト式用例採集に関する検討会の開催

スカウト式用例採集者による検討会を開催し、下記の議題について討論した。

平成元年10月30日

- (1) 「スカウト式用例採集の手引き 57.12.1」の補足
- (2) 明治34年「太陽」の用例採集上の問題点
- (3) 「太陽」の資料性

2.3. スカウト式用例の蓄積及び検索方法の研究

スカウト方式で採集された用例を蓄積・検索する方式を研究するために、下記の2方式の実験を行った。

- (1) 全文コード入力方式
- (2) 採集部コード入力・原文画像入力方式

(1)はコスト高のため予算面で見通しが立たず、(2)は規格が定まっていないため、大量の作業を行っても無駄になる恐れがある。よって当面は所在索引を作成することに重点を置くこととなった。

なお、以上のスカウト式用例採集は、飛田・木村・伊土・菅野・久池井・高橋・林が担当した。

3. 国定読本用語総覧の編集刊行

3.1. 『国定読本用語総覧4』の刊行

用語総覧1～3（国定読本第1期及び第2期）の原稿作りはすべて手作業で行われたが、用語総覧4（国定読本第3期前半あ～て）から計算機利用方

式に切替えた。この作成方式の変更により用語総覧4の刊行が遅延したが、本年度8月に三省堂より刊行された。

3.2. 『国定読本用語総覧5』の編集・刊行

計算機利用方式の原稿作成も軌道に乗り、用語総覧5（国定読本第3期後半と～ん）の原稿作成は順調に進んだ。本文部分の原稿は1月末に完成し、付録他も3月末に完成した。平成2年6月に刊行される予定である。

3.3. 『国定読本用語総覧6.7』の編集

第4期国定読本（通称サクラ読本）の単位語認定、見出し・品詞記入、同音語判別、層別情報付加を行った。今期より、従来手作業で行われた用例の長さ指定作業にコンピュータ方式を導入し、原稿作成の省力化が可能となったので、次年度中に第4期本文の原稿が完成する予定である。

以上の『国定読本用語総覧』編集は、飛田・木村・高梨・藤原・伊土・貝・久池井・高橋が担当した。

D 今後の予定

引き続き用語総覧の編集刊行及びスカウト式用例採集作業を進める。用語総覧では原稿作成の省力化が見込まれるので、これまで蓄積してきた品詞等の諸問題の考察を行う。また、スカウト方式については、新たに新聞を資料とした用例採集を行う。

日本語の対照言語学的研究

A 目的と内容

本研究は、「外国語としての日本語の研究」の中心的分野をなすものであり、日本語を外国語としてとらえ、諸外国語と対照しつつ記述的研究を行おうとするものである。本年度は次の2テーマを実施した。

① 日本語音声の研究

日本語の音声、特にアクセント、イントネーションについて、諸外国語と対照させる際の基礎資料を得るため、また、外国人日本語学習者の学習困難点を予測するために、機能面を中心に基礎的研究を行う。

② 単語の意味記述に関する対照語彙論的研究

日本語と外国語との語彙面における対照研究の一般的方法論を確立することを目指して、日本語の単語と外国語の単語とを対照させる際の概念枠、あるいは意味分野の設定方法について検討する。また、一言語辞書と二言語辞書の訳語・語釈を対比させながら、単語の意味記述に用いられる説明言語の特性を明らかにするための調査研究を行う。

B 担当者

日本語教育センター第一研究室

室長 鮎澤孝子 (①) 研究員 相澤正夫 (①, ②)

C 本年度の研究経過

① 日本語音声の研究 (5年計画5年次)

アクセントについては、東京語のすべての単純動詞、及びそれからの転成名詞のアクセントに関する小調査の結果に、新たな資料を『新明解国語辞典(第4版)』(三省堂)から追加して集計・分析を行い、機能面からの考察を加

えて報告論文の執筆を行った。(相澤)

イントネーションについては、日本語の文末の語と文末のピッチの変動パターンの組み合わせによってどのような発話意図が表現されるか、また、文中の修飾関係がピッチの変動によってどのように表現されるかなど、イントネーションの機能面についての先行研究のまとめと考察を行った。この研究の成果は次の論文で発表した。(鮎澤)

鮎澤孝子「意味のあいまいさとイントネーション・ポーズ」(『講座日本語と日本語教育3,日本語の音声・音韻(下)』明治書院, 近刊)

② 単語の意味記述に関する対照語彙論的研究(5年計画4年次)

前年度に引き続き、『日独仏西基本語彙対照表』(報告88)の独語, 仏語, 西語について語彙分布を調査し, そこに観察される「偏り」が, 対照表作成に利用した外国語-日本語辞典における訳語形の与え方によって影響をうけていないか, あるいは, 対照表作成の際に便宜的に訳語形に対して施した処理によって人為的に生じたものではないか, 等の点について検討を加えた。また, 一言語辞書(タイプの違う国語辞典数種), 二言語辞書(英和, 独和, 仏和, 西和辞典)から, 特定の意味分野の語彙について訳語・語釈を採集し, 説明の手段・方法の異同について調査した。なお, 辞書学研究の分野における意味記述法の研究動向についても文献調査を続けた。(相澤)

D 今後の予定

① 日本語音声の研究

アクセントとイントネーションの機能面に関する基礎的研究を終了し, 次年度からテーマを「日本語音声の韻律的単位に関する記述的研究」(3年計画)と改めて, 新規の研究を行う予定である。(鮎澤)

② 単語の意味記述に関する対照語彙論的研究

次年度はこのテーマの最終年次にあたり, 本年度と同様の作業を継続しながら, 全体のまとめに入る予定である。(相澤)

日本語教育のための述部からみた文構造の研究

A 目 的

日本語文の核となるのは、述部（動詞、形容詞、形容動詞、名詞＋だ）である。個々の述部をめぐる名詞句等の現れかたに関する情報は、外国人日本語学習者にとって不可欠のものであるが、従来これを具体的・体系的に記述したものはない。本研究は、実際の用例に基づいてこの点を明らかにし、日本語教育のための基礎資料を得ようとするものである。

B 担 当 者

日本語教育センター第一研究室

室長 鮎澤孝子 研究員 相澤正夫

C 本年度の研究経過

前年度に引き続き、「読売新聞」の解説ページ（1982年5月25日から11月30日までの6か月余）に掲載された記者署名入りの解説記事の本文から、該当する全ての述部の用例を段落レベルの文脈付きで採集し、分類・整理を行った。また、資料体として新たに「岩波ジュニア新書」を加え、解説的な文章を選んで、用例採集を試行した。

D 今後の予定

引き続き、個々の述部をめぐる名詞句等の現れかたの実態について新書を中心に用例採集を行う。また、『日本語教育のための基本語彙調査』（報告78）で選定された「二字漢語＋スル動詞」（体の類にある）を中心に、これまでに採集した用例を整理して、用例集を試作する予定である。

日本語教育の内容と方法についての調査研究

— 4年制大学における日本語教員養成の分野を対象とする —

A 目 的

外国人に対する日本語教育の現状と過去の実績について、教授法、教育内容、教材に関する問題点を収集整理し、日本語教育に関する研究上の方法論と具体的対策を検討し、日本語教育の内容と方法の向上改善に資する基礎的な研究資料を得ることを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第一研究室

室長 鮎澤孝子 研究員 相澤正夫

C 本年度の研究経過

4年制大学における日本語教員養成の分野についての調査研究の第2年次にあたり、前年度に引き続き、国立9大学私立9大学の日本語教員養成の担当者、及び文部省、文化庁の担当官に出席を依頼し、平成元年11月18日に日本語教育研究連絡協議会を開催した。

日本語教員養成のための学部の課程、大学院の課程を修了した者の進路、教育実習の方法、問題点等について、それぞれ該当する大学から報告があった。また、副専攻で日本語教員養成コースを取った者に交付する「証書」の書式等についての協議が行われた。教育実習における評価の方法に関連し、海外での語学教育における評価項目の資料が紹介された。

なお、平成2年3月に「日本語教育の内容と方法についての調査研究」資料(6)『4年制大学における日本語教員養成カリキュラム』を作成し、関係者に配布した。これは、のべ52の大学と大学院の日本語教員養成のための主専攻・副専攻コースのカリキュラム、および授業内容の現状をまとめたもの

である。

協議会出席者は以下の通りである。

東北大学文学部日本語学科 加藤正信教授

筑波大学第二学群日本語・日本文化学類 草薙裕教授

東京外国語大学外国語学部日本語学科 窪田富男教授

お茶の水女子大学文教育学部 水谷信子教授

横浜国立大学教育学部 工藤真由美助教授

愛知教育大学教育学部総合科学課程日本語教育コース 関正昭助教授

大阪大学文学部日本学科 徳川宗賢教授

大阪外国語大学外国語学部日本語学科 大倉美和子助教授

広島大学教育学部日本語教育学科 奥田邦男教授

文教大学文学部日本語日本文学科 南不二男教授

麗澤大学外国語学部日本語学科 戸田昌幸助教授

明海大学外国語学部日本語学科 豊田豊子教授

杏林大学外国語学部日本語学科 金田一秀穂講師

国際基督教大学教養学部語学科 中村妙子助教授

上智大学比較文化学部日本語・日本文化学科 名柄迪教授

南山大学外国語学部日本語学科 坂本正助教授

姫路獨協大学外国語学部日本語学科 小出詞子教授

筑紫女学園大学文学部日本語・日本文学科 小野望助教授

文部省学術国際局国際企画課教育文化交流室 大橋敏博（室長補佐）

文化庁文化部国語課 柳沢好昭（専門職員）

なお、昭和60年度から62年度に行った「技術研修の分野における日本語教育」の調査研究、及び昭和63年度の「4年制大学における日本語教員養成」の調査研究の成果にもとづき、次の2項目の原稿を『日本語教育年鑑1990年版』に執筆した。

鮎澤孝子「技術研修者に対する日本語教育－最近の動向－」

同 「大学における教員養成」

また、昭和63年度にまとめた「日本語教育の内容と方法についての調査研究」資料(5)『技術研修の分野における日本語教育の現状』にもとづき、次の論文を執筆した。

鮎澤孝子「外国からの技術研修生のためのプログラム」(『講座日本語と日本語教育 16, 日本語教育の現状と課題』明治書院, 近刊)

D 今後の予定

平成2年度は、この分野についての調査研究の最終年次にあたるので、日本語教育研究連絡協議会を11月に1回開催し、この3年間協議してきた内容のとりまとめを行う。この間の協議内容及び収集情報等は「日本語教育の内容と方法についての調査研究」資料(7)にまとめ、関係者に配布する予定である。

日本語と英語との対照言語学的研究

－日本語・英語の構造とその運用について
言語間の伝達における諸問題の調査・分析－

A 目 的

外国語を完全に習得するためには、言語の論理的な構造だけでなく、それをコミュニケーションの手段として使う際の話者の心的態度、表現意図などの理解と、運用能力の開発が必要である。本研究は、英語を母語とする学習者が日本語を学習する際に直面する障壁の一つであるそれらの側面について日・英語の比較対照を行い、日本語教育の充実発展の基礎資料として供することを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第二研究室

室長 西原 鈴子

C 本年度の作業

- (1) 意味論と語用論の接点にある諸要因について、内外の研究者による研究成果の調査を行った。
- (2) 日・英語の構造に見られる文脈的制約の実証的研究の一環として、語用論的前提を含む副詞群の文脈資料を日・英翻訳文献から収集した。調査対象にしたのは、「やはり」（「やっぱり」、「やっぱし」）、「やっ」と、「もちろん」、「なにしろ」、「ともかく」（「とにかく」）、「とうとう」、「どうせ」、「せめて」、「意外に」（「意外と」）、「案外」（「案外と」、「案外にも」）である。各々について、日本語における文脈付き用例およびその英語翻訳例を収集した。
- (3) 結束性の指標の一つとしての指示詞の文脈資料を、同じく日・英語翻訳

文献から収集した。

D 今後の予定

次年度も引き続き、資料の拡充を行うとともに、資料に基づいた分析結果の報告を執筆する。

簡約日本語の創成と教材開発に関する研究

A 目 的

国際共通語としての日本語を世界により広く進めるためには日本語のむずかしい点を取り払いエッセンスとしての日本語を創り出す必要がある。これを「簡約日本語」と称する。この研究はこの「簡約日本語」を創成しこれを実際に教育するための教材等を作成することを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第二研究室

所長 野元菊雄 研究員 川又瑠璃子 事務補佐員 江田真帆

C 本年度の作業

本年度は次のための作業などを進めた。

- 1 現行の日本語教科書の中から文型を提出順に取り出す。
- 2 現行の日本語教科書の中から基本的な文法事項を取り出す。
- 3 簡約日本語に使われる語彙 2,000 語中の多義語について、利用可能な KWIC を使い、文脈から意味の使用頻度を調べる。作業の経過は次の通りである。

1. 文型について

現行の日本語教科書の中から文型を提出順に取り出す作業を行い、「簡約日本語」に取り入れる文型を決定するための資料を作成中。

調査した教科書数は 16 である。

2. 文法事項について

日本語教科書の中から文法事項を取り出し、文型とともにデータバンクとして蓄え、必要に応じて取り出せるよう作成中。

入力したデータ数は、1,661 件である。

第1年次に引き続き、簡約日本語に使われる語彙 2,000 語中の動詞について、『新聞 KWIC』『言語生活 KWIC』ではどの活用形の使用度が高いかを調べている。

3. 語彙について『言語生活 KWIC』を用い、簡約日本語に使われる語彙 2,000 語中の多義語について、文脈から意味の使用頻度を調べ、用例を採取している。調査した語彙は、前年度の『新聞 KWIC』の情報とともにカード化する。カードの記述内容、及び試作例は以下の通りである。

- 3.1. カードの記述内容

- ① 見出し 1

平仮名表記。用言は連用形で記述。

- ② 見出し 2

漢字仮名交じり表記。用言は終止形で記述。

- ③ 品詞

品詞分類は、2,000 語中に含まれる品詞名によった。具体的には以下の通り。

動詞、形容詞、形容動詞、代名詞、連体詞、副詞、接続詞、感動詞、助詞、助動詞

- ④ 他品詞への転成・複合語

他品詞への転成（例遊ぶ→遊び、元気→元気だ）、サ変動詞「する」の複合語（例あいさつする）の有無。

- ⑤ 意味

簡約日本語で刈り込まれた意味。

- ⑥ 分類コード（得点）

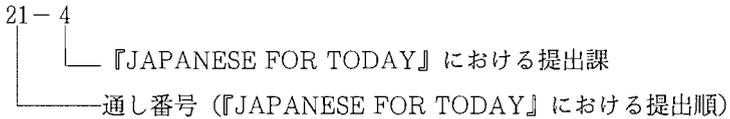
分類コードは、『分類語彙表』（資料集 6）の分類名称及び分類番号、得点は、『日本語教育のための基本語彙調査』（資料集 78）の「日本語教育基本語彙意味分類体語彙表」の「得点」を参考にした。

- ⑦ 関連語彙（得点）

簡約基本語彙第一次千語，第二次千語のうち，上記⑥に属する語彙群。
得点は，⑥に同じ。

⑧ 関連文型・文法

見出し語に関連する文型・文法情報。分類は一応、『JAPANESE FOR TODAY』に準ずる。分類番号の内容は以下の通り。



⑨ 文例

簡約日本語で刈り込まれた意味に対応する文例。〈テキスト〉は，本年度の作業1の資料，〈新聞 KWIC〉〈言語生活 KWIC〉は，本年度の作業3の資料から抜粋した。

⑩ [数値情報1：意味]

本年度の作業3の『新聞 KWIC』『言語生活 KWIC』の分派から，簡約日本語で刈り込まれた意味の使用頻度を調べ，得られた結果。

⑪ [数値情報2：活用]

本年度の作業2の『新聞 KWIC』『言語生活 KWIC』ではどの活用形の使用度が高いかを調べ，得られた結果。試作例では，連用形（オキマス，オキ，オキタイ，オオキニナル），て-form，終止形の情報に限る。

3.2. カードの試作例

見出し1：おき 見出し2：起きる

品詞 ：動詞

他品詞への転成・複合語：なし

意味 ：①目がさめる。

 ②事件が発生する。

 ③立ち上がる。

分類コード（得点）：2122 成立・発生（28）

 21513 起立・横臥など（36）

2333 生活・衣食住 (27)

23391 立ち居 (20)

関連語彙 (得点) : 2122 成立・発生

第一次千語

できる (40), なる (15)

21513 起立・横臥など

第一次千語

立つ (40), 寝る (38), 座る (32)

2333 生活・衣食住

第一次千語

寝る (26), 覚める (18), 着る (38), 脱ぐ (27)

食べる (40), 住む (40), 立つ (10)

第二次千語

泊まる (37), 履く (23), 暮らす (33)

23391 立ち居

第一次千語

座る (27), 立つ (24), 寝る (20)

関連文型・文法 : 12-4 N1ハ/ガ(Time)(Place)V-マス.

16-4(ニa)Point of Time:ニ

26-5(デb)General Expression of Action:Nデ+V

文例 :

<テキスト>

意味① JFT 16-4 わたしは6時に起きます。

GN 238-17 朝, 起きた時に「おはようございます。」と言います。

<新聞 KWIC>

意味② 集団赤痢-東村山市で起きたさわぎを「他人ごとではない」と心配する都民は多い。

<言語生活 KWIC>

意味① 085キャンプムラニテ：録音子あの、朝何時頃お起きになりますか。

(学生ぼくは、四時半ごろだよ。それで一
睡もしてない、ぼくは。)

意味② 203エキマエトウロン：なぜ、戦争起きたか、そこから考えなさい。

意味③ 026ハナタケ：で、どれくらいかかんだい？手術して起
きられるようになるには。

[数値情報1：意味]

		度数	意味①	意味②	意味③	その他
新聞 KWIC	1. 起きる	24	1 4.2%	16 66.7%	3 12.5%	4 16.7%
	2. おきる	2	0	2 100%	0	0
	1 + 2	26	1 3.8%	18 69.2%	3 11.5%	4 15.3%
言語生活	オキル	63	43 67.2%	10 15.6%	9 14.1%	1 4.2%

[数値情報2：活用]

		オキマス	オキ,	オキタイ	オオキニナル	オキテ	オキル
新聞 KWIC	1. 起きる	0	2	0	0	4	4
	2. おきる	0	1	0	0	0	0
	1 + 2	0	3	0	0	4	4
言語生活	オキル	0	0	3	2	19	12
KWIC							

D 今後の予定

次年度は3年計画の最終年度として簡約日本語の少なくとも最初の2～3段階の内容を確定し教材化を完成させたい。また、語彙2,000語を確定し辞書の形を作り上げる。

日本語教育に関する情報資料の収集・提供

A 目 的

第二言語としての日本語教育を有効に行うために、これまでの国内・国外における日本語研究・日本語教育の実態、及び日本語教育に関する教科書・副教材・視聴覚教材などの情報資料を収集整理し、今後の研究及び教育の参考資料として提供し得よう整備することを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター第二研究室

室長 西原鈴子 非常勤研究員 小出いずみ (元. 4. 1. ~2. 3. 31)

C 本年度の作業

- (1) 日本語教育に関する情報資料収集の目的で、来日中の言語教育専門家による講演会を開催した。講演者は、シンガポール大学教授 N S プラブー氏、及びレニングラード文化大学助教授 イリーナ・バス女史である。
- (2) 第二言語としての日本語教育に関する教科書、副教材、辞典及び対照研究に参考となる言語研究・外国語教育研究に関する文献を収集・整理した。
- (3) 日本語教育に関する文献調査をもとにして、内部資料『日本語教育学会誌・機関誌掲載論文等文献一覧』(1989)、及び『日本語教育文献索引』(1986)を作成、関係各方面に配布した。

D 今後の予定

引き続き、文献等の情報資料の収集・整理を行い、提供に備える。

日本語とインドネシア語との対照言語学的研究

A 目 的

日本語とインドネシア語の言語構造及び語彙の比較・対照研究を行い、その成果がインドネシア人学習者に日本語を効果的に教授する際の指針となりうる基礎的資料を提供することを目的とする。本年度は、次のテーマについて研究を行った。

- 1) 日本語とインドネシア語の移動現象の比較
- 2) 日本語とインドネシア語の擬声語・擬態語の比較

B 担 当 者

日本語教育センター第三研究室

室長 正保 勇

C 本年度の作業

1) 上記研究テーマの1)に関して

イ) インドネシア語の新聞、雑誌、小説等より、移動現象が関与している構文の例文を収集した。

ロ) 主として英語の移動現象に関する文献を参考にして、インドネシア語の移動現象の特質を明らかにした。その際、特に次の諸点を中心に考察を行った。

- ① 移動によって元あった位置に生じる空範疇の同定。
- ② 移動が関与している構文の派生上の制約、及びそれらの構文の担う談話文法的機能。
- ③ 情報構造の点から観た派生主語の満たすべき条件。

本考察を進める過程で、インドネシア語の名詞句の定・不定と派生主語と

の関係について調査する必要を感じ、この問題を「インドネシア語の定名詞句と不定名詞句ー日本語との比較を通して観たー」(『研究報告集 11』〈報告 101〉)というテーマのもとに論じた。

2) 上記研究テーマの 2) に関して

イ) インドネシア語の新聞、雑誌、小説等より、不足している擬声語・擬態語関係の例文を追加収集した。

ロ) インドネシア語の辞書等を参考にして、インドネシア語の擬声語・擬態語の使用場面、使用上の制限等を明らかにした。

D 今後の予定

1) 上記研究テーマの 1) に関して

インドネシア語の me-型他動詞構文の目的語の位置に生じる空範疇の同定に関しては、ゼロ操作語によって束縛される変項という可能性も含めて、今後更に検討が必要となった。

2) 上記研究テーマの 2) に関して

例文収集の際参考にした辞書のエントリーから漏れている例を今後も継続して収集する必要を感じた。これは、辞書に記載されていないが、現代インドネシア語では広く使用されている擬声語・擬態語が当初予測していたよりもかなり多いということが明らかになったためである。

日本語と中国語との対照言語学的研究

A 目的と内容

外国語を教育する際に、その対象言語と学習者の母語との間の異同点に関する知識が十分にあり、その知識に基づいて教育が行われれば、学習者は効率よく対象言語を習得することができると考えられる。本研究は日本語と中国語を対照し、中国語話者に日本語を教育するうえで有益な知識を得ることを目的とする。本年度は以下の題目の研究を行った。

- (1) 日本語の中の漢語と中国語との語構成の対照研究
- (2) 日本語と中国語との格表現の対照研究

B 担当者

日本語教育センター第四研究室

室長(事務取扱) 水谷 修 研究員 水野義道

C 本年度の経過

上記(1)の研究については、日中両語の新聞から複合語の実例を収集・整理し、考察を行った。この研究は本年度が三年計画の三年次であり、最終年度である。

(2)の研究については、日本語訳のある中国語の小説から対応する中国語と日本語の用例を収集した。

D 今後の予定

(2)の研究は、次年度が三年計画の三年次であり、最終年度となる。用例の収集を継続するとともに、とりまとめを行う予定である。

日本語教育研修の内容と方法についての 調査研究

A 目 的

外国人に対する日本語教育に関して、教員の資質能力の向上を図ること、また、教育の効率化を目指すことは、現在大きな社会的要請となっている。本研究は、教員研修一般についてそのあり方を検討するとともに、国立国語研究所で実施している研修に対して適切な指針を樹立するため、具体的な研究及びその方法の開発を行うことを目的とする。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

室長 田中 望 研究員 古川ちかし 石井恵理子 研究補助員 早田美智子 研究補佐員 斉藤里美 (2.3.1 から 2.3.30 まで) 事務補佐員 笠井久美子

C 本年度の経過

本研究は内容を二分し、

1. 日本語教育研修の評価に関する研究
2. 研修効率向上に資するための調査研究

とする。

1. 日本語教育研修の評価に関する研究

日本語教員に要求される能力を検討し、日本語教育の研修の内容としてどのようなものが適当であるかということ、日本語教育研修室の担当する三種類の日本語教育研修をとおして検討した。その一環として前年度に引き続き、『日本語教育論集 ～日本語教育長期専門研修昭和63年度報告－6』（A5, 114 ページ）を刊行した。昭和63年度の日本語教育研修の報告

と合わせて、研究員の論文1篇と昭和63年度まで日本語教育長期専門研修の修了生の論文3篇、すなわち、

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| 石井 恵理子（研究員） | 学習のとらえ方と教室活動 |
| 小田切由香子（昭和63年度修了生） | 中国からの帰国者の日本語教授における新しい試み |
| 金田 智子（昭和63年度修了生） | 日本語教育における学習者と教師の相互交渉について |
| 吉田 智子（昭和63年度修了生） | 発話の重なり現象の考察 |

－電話の会話分析－

を収録した。これによって、修了生の研究能力の水準を知ることができる。

2. 研修効率向上に資するための調査研究

日本語教育研修室の担当する各種研修のプログラム、その効果などについての情報収集及び分析評価と並行して、日本語教員研修用の教材、特に教室活動の計画と実施に関する具体的なビデオ教材の開発をめざして、教室活動の選択やビデオ教材の構成などの骨格を検討した。

D 今後の予定

次年度は以下のことを予定している。

1. 日本語教育研修の評価に関する研究

『日本語教育論集7』の発刊を予定している。平成元年度までの日本語教育長期専門研修修了生の論文数篇を収録する。各種研修をとおして日本語教員に求められる能力・資質についての分析・検討については引続き継続する。

2. 研修効率向上に資するための調査研究

本年度行った教員研修用ビデオ教材に関する研究は「日本語教育現職者特別専門研修」に引継ぎ、近年の多様化した教員研修プログラムについての情報を収集し、分析・検討する作業を継続する予定である。

言語教育における能力 の評価・測定に関する基礎的研究

－日本語教育プログラムの評価とその教育効果の測定を通し
てみた外国人学習者の日本語能力評価－

A 目 的

外国人の日本語学習者に対する標準的な日本語能力試験の必要性は年々高まっている。しかし、ある単一の能力尺度のみで、多様な日本語学習者の日本語力を測ろうとすることは現実的とは言えない。さまざまな言語能力分野において、標準的な能力試験が受けられる体制が望ましい。本研究は、そのための学習者の日本語能力分野と、その評価手法を体系付けるための基礎的研究である。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

室長 田中 望 研究員 古川ちかし 石井恵理子 研究補助員 早田美智子
研究補佐員 斉藤里美 (2.3.1 から 2.3.30 まで) 事務補佐員 笠井久美子

C 本年度の経過

本年度は、以下のような調査・研究を行った。

1. 国内外の、主に口頭での言語運用能力試験における測定法、測定対象能力の規定とそのテストシラバスへの反映のしかた、などを分析した。ことに ETS, ACTFL のものについて検討した。
2. センターで行った実験授業からのデータ（教授項目・教員の発話・学習者の発話／反応などをコースをとおして記録したもの）をまとめ、教育において養成し得る能力と、その発現のしかた、発現の条件などの基礎的研

析を行った。

D 今後の予定

次年度は、以下のことを予定している。

1. 従来の口語言語運用能力試験の分析を、その被験者の能力評価手法、および試験自体の妥当性・信頼性などの観点からの評価手法という二つの観点到に広げて行う。
2. 教育コースにおける、学習者へのインプットと学習者の行う目標言語でのアウトプットとの関係を体系的に解釈するための観点的構築を行う。
3. 上記1.2.と関連して、測定対象能力や、測定目的別の試行能力試験のフォーマットを複数開発することをめざして検討を始める。

日本語教育研修の実施

A 目 的

日本語教育センター日本語教育指導普及部では、日本語教育の社会的要請にこたえるために、専門家として日本語教員の育成とその資質能力の向上とを目的として、教育研修の機会を提供している。本年度も、これまで実施してきた日本語教育長期専門研修，特別集中研修，東京・大阪両地での日本語教育夏季研修を実施した。

長期専門研修は、将来、日本語教育の中心となる人材を養成することを目的として、日本語教育の実務および研究の基礎知識について研修を行うものである。特別集中研修は、緊急に日本語教育の実務に従事しなくてはならなくなった者に対し、約1か月の短期間に最小限の教授能力を授けることを目的とする。夏季研修は、日本語教育の実務に現に従事している者のための現職者研修であり、日本語教育の内容および方法について、ごく短期間に研修を行うものである。これらの研修に共通する特色は、研究所の調査・研究の成果を十分に取り入れた研修内容にある。これらの研修によって育成された「研究する教員」は、将来の日本語教育の質的向上に重要な役割を果たすものと思われる。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育研修室

センター長 水谷 修 部長 上野田鶴子 室長 田中 望 研究員 古川ちかし 石井恵理子 研究補助員 早田美智子 研究補佐員 斉藤 里美 (2.3.1から2.3.30まで) 事務補佐員 笠井久美子

C 本年度の経過

I 日本語教育長期専門研修

平成元年度日本語教育長期専門研修は、平成元年4月3日より平成2年2月28日までの約10か月にわたって行った。

1 募集方法および応募者の資格

本年度は、昭和63年12月4日に案内書を公表し、募集を開始した。案内書を配布したのは、各大学、日本語教育機関、日本語教育関係団体、各都道府県教育委員会など約1000機関である。

応募者の資格は、従来どおり、日本語教育または他の言語教育の経験を有する者については四年制大学卒業以上の学歴を持つこと、経験を有しない者については大学院在学以上の学歴を持つこととしたが、本年度から、新たに、日本語教育主専攻または副専攻の四年制大学卒業者および平成元年3月に卒業見込みの者を有資格者とする事とした。一方、講義、演習、教育実習を含み、修了論文を作成する研修を研修Aとし、修了論文の作成を中心に行う研修を研修Bとした。この研修Bは、現在、日本語教育機関で勤務するものや大学院で日本語教育を専攻するものに研修の場を提供しようとするものである。どの場合にも大学（指導教官）または日本語教育機関・日本語教育関係団体などからの推薦を求めた。また、昨年度同様機関推薦わくを設け、四年制大学卒業以上の学歴を有し、推薦機関の専任教員として昭和62年4月1日に在職していてそれ以後現在に至るまで在職し、かつ、平成2年4月1日以後在職する予定であることを条件とした。

2 研修生数と選考方法

63年度の有資格応募者は49人であった。（機関推薦枠0人、一般募集枠49人）。定員は30人であり、次の選考により、30人の受け入れを決定した。

第一次選考 平成元年2月6日締切。応募書類、事前調査表審査。応募者49人（研修A 32人・B 17人）、合格者49人（研修A 32人・B 17人）。

第二次選考（研修Aへの応募者のうち、第一次選考合格者と、研修Bへの応募者のうち第一次選考に合格し、かつ、応募要項受験資格の項d.に該当する者に対して行った。）平成元年3月6日実施、3月11日発表。読解、言語分析、教育計画作成に関する筆記試験。受験者35人（研修A 32人、研修B 3人）、合格者22人（研修A 19人、研修B 3人）。その他の研修B 17人は、第一次選考で条件を満たしたため、第二次選考は受験の必要がなかった。

第三次選考（第二次選考合格者と、研修Bへの応募者のうち第一次選考に合格し、かつ、募集要項受験資格の項a. b. c. に該当する者に対して行った。平成元年3月13日実施、3月15日発表。日本語模擬授業および一般面接。受験者39人（研修A 19人・B 20人）、合格者30人（研修A 14人・B 16人）。

3 研修年間日程

研修日程は次のとおりであった。

昭和63年12月15日	募集要項配布開始
平成元年2月6日	応募締切・第一次選考（書類）
3月6日	第二次選考（筆記）
3月13日	第三次選考（面接）
4月3日	レジストレーション、開講式、第一学期開始
7月21日	第一学期終了
7月22日より	夏季休業
8月28日	第二学期開始
12月22日	第二学期終了
12月23日より	冬季休業
平成2年1月8日	第三学期開始
2月28日	修了式

4 研修内容

講座名	こま数	講師および内容（1こま75分）	所 属
開講特別講演	1	野元 菊雄	国立国語研究所
開講特別講義	I	選考問題解説（Ⅱ－A）	
	1	水谷 修	国立国語研究所
	1	上野田鶴子	国立国語研究所
	II	選考問題解説（Ⅱ－B）	
	1	田中 望	国立国語研究所
	III	選考問題解説（Ⅱ－C）	
	1	古川ちかし	国立国語研究所
	IV	選考問題解説（Ⅲ）	
	1	石井恵理子	国立国語研究所
（第一学期）			
言語学概論	8	上野田鶴子	国立国語研究所
応用言語学概論	8	J.Maher	国際基督教大学
社会言語学	8	南 不二男	文教大学
話しことば論	8	水谷 修	国立国語研究所
研究計画法	8	吉田 研作	上智大学
言語分析 I	8	P.Szatrowski	ミシガン大学
日本語文法	8	西原 鈴子	国立国語研究所
コースデザイン論	10	田中 望	国立国語研究所
教室活動論	16	石井恵理子	国立国語研究所
言語教育論	10	古川ちかし	国立国語研究所
日本語研究	13	言語研究各部 日本語教育センター各室	
論文購読	16	日本語教育研修室	
グループ研究	52	日本語教育研修室	
教育実習 I	15日間	日本語教育研修室	

実習準備・整理	15日間	日本語教育研修室	
(第二学期)			
第2言語習得論	6	岡崎敏雄	広島大学
語彙・意味論	6	城生伯太郎	筑波大学
異文化間コミュニケーション論			
	8	F. クルマス	中央大学
研究計画法Ⅱ	8	吉田研作	上智大学
言語心理学	8	茂呂雄二	国立国語研究所
研究計画法演習	6	日本語教育研修室	
教授法演習	14	日本語教育研修室	
学習項目分析	12	日本語教育研修室	
教育実習Ⅱ	45日間	日本語教育研修室修了	
レポート	8	日本語教育研修室	
(第三学期)			
特別講義			
名詞述語文	2	堀口 和吉	天理大学
語彙の体系	2	玉村 文郎	同志社大学
学術日本語の読解教授法			
	2	J.Jelinek	シェフィールド大学
海外の日本語教育	2	山田正春	国際交流基金
コミュニケーションと文法			
	2	A.Alfonso	明海大学
日本語におけるアスペクトとモダリティの相互作用			
	2	W.Jacobsen	ミネソタ大学
日本語教育と文学	2	吉田弥寿夫	桃山学院大学
論文指導	10	日本語教育研修室	

5 研修生

研修修了者28名(男4名, 女24名)およびその修了レポートの要旨は

次のとおりである。

修了者氏名 性別 年齢 最終学歴

修了レポート題目

(研修A)

- | | | | | |
|--------|---|----|----------------|--|
| 刈谷 仁美 | 女 | 25 | 成蹊大学法学部 | 言語学習についての確信と学習ストラテジー |
| 川岸 睦深 | 女 | 26 | 昭和女子大学文学部 | アドレスの観察にみる学習者間の相互交渉 |
| 清成 由子 | 女 | 27 | 津田塾大学学芸学部 | コミュニケーションのゴールとコミュニケーション・ストラテジー
ー2名の学習者のケース・スタディーー |
| 佐々木香代子 | 女 | 31 | 青山学院大学文学部 | イニシアチブをとれる学習者は、どんな strategy を持っているか？
3人の学習者の case study |
| 笹川 洋子 | 女 | 37 | 東京学芸大学初等教育学部 | 動機づけにおける学習者のメタ認知ストラテジー |
| 新藤 紀子 | 女 | 24 | 独協大学大学院ドイツ語学専攻 | 音声教育における長音の練習方法に関する一考察
ーケーススタディ：中国語を母語とする学習者についてー |
| 新谷あゆり | 女 | 26 | 津田塾大学国際関係学修士課程 | エラー訂正が、モニター能力・情意フィルターに与える影響
ー日本語学習者Aさん（韓国人）を対象にー |
| 庄司 養昌 | 男 | 32 | 一橋大学商学部 | 学習者の授業参加価値についての一考察 |
| 鈴木智香子 | 女 | 35 | 関西学院大学社会学部 | Gambit のインプットとその効果 |
| 立堀 尚子 | 女 | 29 | 京都外国語大学英米語科 | 日本語学習におけるきまでのはなしてに対するはたらきかけのストラテジー |

ークラス内の学習者間のインターアクションにおいてー

中山 富子 女 32 青山学院大学文学部

学習者トレーニング

ーインフォーマルに学習してきた学習者を対象としたケース・スタディーー

吉岡 慶子 女 29 米国ミシガン州立イースタン・ミシガン大学
大学院TESOL専攻

L2 教室内における「修正」のおこり方に関する一考察

渡辺 晴世 女 31 跡見学園女子大学文学部

言語学習者の Beliefs とラーニング・ストラテジー

(研修B)

池上摩希子 女 28 津田塾大学学芸学部

井本 美穂 女 29 国際基督教大学教養学部

(共同研究)

コミュニケーション行動能力分析の方法と指導への適用

伊豆山敦子 女 57 東京大学大学院人文科学研究科言語学専攻
博士課程中退

話し言葉教育のための基礎研究

内海由美子 女 26 筑波大学大学院修士課程地域研究研究科

日本語学習者の文化適応について

ー「態度」を中心にー

江村 裕文 男 38 京都産業大学大学院修士課程外国語学研究科

人間関係シラバスに向けて

ー筑波大学留学生教育センター開発の新テキストを材料にしてー

岡部真理子 女 29 国際基督教大学大学院教育学研究科
博士課程前期在学中

上級における読解指導

ー文章の構成の把握と全体の内容理解に関する研究ー

木村さなえ 女 32 カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学

大学院教育学修士課程

帰国子女に対する言語教育について

小宮修太郎 男 40 東京都立大学大学院社会科学研究所
博士課程中退

丁寧化と予告・注釈

ー前置き表現の機能と仕組みー

斉藤 里美 女 30 一橋大学大学院社会学研究所
博士課程在学中

学習者による自立的評価システムの意義と課題

ーダイアリー・スタディを通してー

桜井喜久子 女 26 青山学院大学大学院文学研究科
博士課程前期

発話能力の評価とその分析

ーストーリー説明の場合ー

佐野ひろみ 女 41 ハワイ大学大学院東亜語科修士課程
ビジネスマン学習者のための日本語教育シラバス
ー学習者主導型シラバスー

鈴木 潤吉 男 36 国際基督教大学教養学部
外国語教授法の理論的基礎

ーオーラル・メソッドをめぐってー

栃木 由香 女 26 千葉大学大学院修士課程文学研究科
日本語学習者のストーリーテリングにおける接続形式の分析

橋本 博子 女 32 筑波大学大学院修士課程地域研究研究科
聴解における予備知識の重要性に関する実証的研究の試み

細川 美紀 女 27 津田塾大学学芸学部

中国帰国孤児二世に対する異文化適応教育の一考察

ープロジェクトワークによるトラブル事例学習ー

II 日本語教育特別集中研修

1 日程及び会場

日 程 平成2年2月8日(木)～3月8日(木) 20日間

ただし、2月8日(木)～3月4日(日)は、ビデオ教材による自宅学習とする。

3月5日(月)～3月8日(木)

午前9時30分～午後4時15分 1日4こま6時間

会 場 国立国語研究所

2 講義題目及び講師

講義題目	時 間	講 師	所 属
自宅学習のまとめ	4	古川ちかし	国立国語研究所
教室活動・教材論	2	石井恵理子	国立国語研究所
日本語概論	2	水谷 修	国立国語研究所
日本語教育シラバス論	2	斉藤 里美	国立国語研究所
異文化教育としての日本語教育	2	田中 望	国立国語研究所
英語を母語とする日本語学習者に対する日本語教育	2	伊藤 博文	昭和女子大学
オーストラリアにおける日本語教育	2	M. ホール	モナシュ大学

3 受講者

中等教育教員派遣事業及び日本・ニュージーランド文化交流促進計画に基づき、文部省学術国際局長の依頼による3名を受講者とした。3名の派遣先、氏名及び所属は次のとおりである。

オーストラリア	1名	橋本誠一郎	福岡県立光陵高等学校
ニュージーランド	2名	川島 貴男	群馬県県民生活課 国際交流部
		神田 周久	兵庫県立社高等学校

III 日本語教育夏季研修

1 日程および会場

東京会場

日程 平成元年7月24日(月)～7月28日(金) 5日間

午前9時15分～午後4時15分 1日4こま6時間

場所 国立国語研究所(東京都北区西が丘3丁目9番14号)

大阪会場

日程 昭和63年8月21日(月)～8月25日(金) 5日間

午前9時15分～午後4時15分 1日4こま6時間

場所 大阪国際交流センター(大阪市天王寺区上本町8丁目2-6)

2 講義題目および講師

研修A

講義題目	こま数(1こま90分)			
	所 属	東京会場講師	所 属	大阪会場講師
日本語教育の課題		2		
	国立国語研	水谷 修	国立国語研	水谷 修
外国語教育の研究		2		
	国立国語研	上野田鶴子	国立国語研	上野田鶴子
語彙・意味の研究		2		
	早稲田大	森田 良行	同志社大	玉村 文郎
音声・表記の研究		2		
	東京外国語大	佐久間勝彦	名古屋大	土岐 哲
文法の研究		2		
	御茶の水女子大	水谷 信子	天理大	堀口 和吉
演習		6		
	国際教育振興会	丸山 敬介	姫路独協大	尾崎 明人
	国立国語研	研 修 室	国立国語研	研 修 室
パネル・ディスカッション		2		
	杏林大	伊藤 芳照	帝塚山学院	宮地 裕
	早稲田大	北條 淳子	桃山学院大	吉田弥寿夫

日本語の国際化	2
国立国語研 野元 菊雄	国立国語研 野元 菊雄

研修B

講義題目	こま数 (1こま 90分)		
所 属	東京会場講師	所 属	大阪会場講師
日本語教育の課題	2		
国立国語研	水谷 修	国立国語研	水谷 修
外国語教育の研究	2		
国立国語研	上野田鶴子	国立国語研	上野田鶴子
異文化接触を目指したカリキュラム	2		
東京国際大付属日本語学校			
	三井 豊子	広島大学	岡崎 敏雄
異文化接触を目指した教室活動	2		
昭和女子大学	山田 泉	立命館大学	倉地 暁美
ワークショップ	8		
国立国語研	研 修 室	国立国語研	研 修 室
ワークショップのまとめ	2		
国立国語研	研 修 室	国立国語研	研 修 室
日本語の国際化	1		
国立国語研	野元 菊雄	国立国語研	野元 菊雄

3 参 加 者

定員は、研修Aが東京・大阪各会場80名、研修Bが東京・大阪各会場40名である。応募の資格は次のとおり。

日本語教育に現に従事し、もしくはかつて従事したもので、所属するあるいはかつて所属した日本語教育機関（日本語教育関係団体を含む）の責任者からの推薦があるもの。（非常勤を含む。）ただし、外国人日本語教員で現在日本に留学している者は指導教官などの推薦をもってこれにかえることができる。また、かつて日本語教育に従事した者で、過去に所属した

日本語教育機関からの推薦を得ることが困難なものは、日本語教育学会などしかるべき日本語教育関係団体からの推薦をもってこれにかえることができる。

募集は、平成元年4月26日(水)～5月10日(水)に行い、研修Aについては参加申込書のみ、研修Bについては参加申込書およびレポートの提出を求めた。この書類二件の審査によって、参加の許可・不許可を決定した。応募および参加許可の概要は次のとおりである。

	応募	参加許可	全日程参加	参加証明書交付
東京会場 研修A	153	88	80	80
研修B	33	35	34	34
大阪会場 研修A	75	75	65	65
研修B	31	31	25	25

4 運営委員会

集中的な研修を円滑にするために、東京・大阪各会場にそれぞれ運営委員を委嘱し、委員及び国立国語研究所日本語教育センター研究員で運営委員会を組織した。研修の運営に関して必要な事項は、運営委員会の決定するところによった。

運営委員および関係研究員は、次のとおり。

東京会場	筑波大学文芸言語学系教授	石田 敏子
	杏林大学外国語学部教授	伊藤 芳照
	早稲田大学日本語研究教育センター教授	北條 淳子
大阪会場	同志社大学文学部教授	玉村 文郎
	天理大学文学部教授	堀口 和吉
	帝塚山学院長	宮地 裕
	桃山学院大学文学部教授	吉田弥寿夫
	国立国語研究所日本語教育センター	野元 菊雄
		水谷 修
		上野田鶴子

田中 望
古川ちかし
石井恵理子

日本語教育教材開発のための調査研究

A 目 的

日本語教育教材開発室において行う教材等開発事業に平行して、その理論的基盤を整備するための基礎的研究を行った。本年度の課題は、事業「日本語学習辞典の編集」に対する基礎研究としての「語彙教材開発のための意味論的研究」と、事業「日本語教育映像教材中級編の作成」に対応する「視聴覚教材開発のための基礎的研究」の2点である。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長 水谷 修 部長 上野田鶴子 室長 中道真木男
研究員 中田智子

C 本年度の作業

1. 語彙教材開発のための意味論的研究：既に発表されている各種の意味分析結果を利用して辞書記述の効率化に役立てるための研究の一部として、既存国語辞典等で意味記述に用いられている用語の実態を、ワードプロセッサを用いて調査する作業を継続して行った。また、各種の日本語教育用教材に使用されている語彙・文型の収集を継続して行った。
2. 視聴覚教材開発のための基礎的研究：次の2点について研究を行った。
 - ① 表現意図による発話の分類に関する研究：既に作成されている『日本語教育映画 基礎編』の分析から作成した発話機能の分類案をさらに検討・修正し、本年度に作成した『日本語教育映像教材 中級編 ユニット4』の内容決定に役立てた。
 - ② 映像教材の利用と補助教材開発に関する研究：作成中の『日本語教育

映像教材『中級編』の内容を分析し、補助教材を作成する準備を進めた。

D 今後の予定

辞書等における意味記述用語彙の調査は、新たな計画のもとに拡大して継続する。

日本語教育用教材に関する語彙・文型の調査は今後も継続し、計算機データとして保存して各種の使用に供する。

発話機能の整理に基づき、映像教材を利用した中級段階の日本語教育の内容を検討するとともに、その教授内容を提示する有効な手段をハードウェア・ソフトウェアの両面にわたって開発する。

談話の構造に関する対照言語学的研究

A 目 的

中上級向けの日本語教育に役立てるため、日本語において談話の構成を表示するために機能する手段と談話構造の規則性とを明らかにし、その内容を他言語と比較して教育上に役立つ知見を得る。

B 担 当 者

日本語教育センター

センター長 水谷 修 第一研究室 室長 鮎沢孝子

第二研究室 室長 西原鈴子 第四研究室 研究員 水野義道

日本語教育指導普及部 部長 上野田鶴子

日本語教育教材開発室 室長 中道真木男 研究員 中田智子

C 本年度の経過

談話研究全般の動向、主な研究課題と接近法などに関する研究会を引き続き開催した。特に、談話構造を表示し、話し手の意図、感情等を付随的に表現する音声的手段および非言語的伝達手段に関する課題を探索した。また並行して、基礎資料となる日本語の話しことば文字化テキストを計算機に入力し、出現語彙の調査等を継続して行った。

D 今後の予定

音声的手段を始めとする非言語的伝達手段を含めた総合的な伝達行動において、各伝達手段が表示する意味内容について観察し、言語間の比較を行うため、新たな研究計画を立案する。

日本語学習辞典の編集

基本語用例データベースの作成

A 目 的

外国人のための日本語学習辞典を作成するための基礎として、個々の語の現実の使用例の収集に基づく用例資料を蓄積し、日本語教育の観点から用法分類を施して、辞書の原形となる用例集を作成するとともに、教授者用資料として提供する。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長 水谷 修 部長 上野田鶴子 室長 中道真木男
研究員 中田智子

C 本年度の作業

1. 「基本語用例データベース作成作業委員会」の開催

データベース作成の方針および具体的作業計画等の検討のため、委員会を設置し、会議を4回開催した。この委員会には、所外委員5名、所内委員3名を委嘱した。

(所外委員)

齊木ゆかり (東海大学講師)

桜木 紀子 (クロスカルチャー事業団講師)

土屋 博嗣 (明治学院大学助教授)

沼田 善子 (同志社女子大学講師)

馬場 良二 (熊本女子大学講師)

(所内委員)

中道真木男 (日本語教育教材開発室長)

中田 智子（日本語教育教材開発室研究員）

水野 義道（日本語教育センター第4研究室研究員）

2. 執筆者会議（ワークショップ）の開催

執筆者間の執筆方針の統一と、執筆内容の質的向上を図るため、前年度に引き続き、執筆者会議を2回開催した。この会議はワークショップ形式をとり、それぞれ前半に用法分析・記述・データ利用等に関する研究発表、後半にグループ形式での共同執筆作業のセッションを設けて、執筆者間の意見交換、質疑応答等の機会とした。

3. 客員研究員の採用

この事業の全般に関する立案、特に、執筆方針の検討と執筆要領の作成、および、執筆された原稿の内容点検と執筆者に対する助言などを行うため、引き続き客員研究員を採用した。

浅野百合子（前国際交流基金海外派遣日本語教師実習講座講師）

畠 郁（聖ヨゼフ修道院日本語学校非常勤講師。1.9.30.まで）

金田一京子（国際基督教大学非常勤講師。1.10.1.から）

4. 第1次資料の蓄積

語の実際の用例を収集するため、下表の各テキストに単位分割を施し、文脈付き語彙表を作成した。対象テキストとして、従来語彙調査等が十分に行われていないと考えられる話しことばを重点的に取り上げることとし、ラジオ放送文字化資料を最も主な収集対象とした。また、現実の言語使用と日本語教育教材との格差を明らかにし、また、日本語教材の中で使用されている語彙の実態を知るために、日本語教科書、日本語教育映画等を加えた。これらについては、出現語のすべてを資料化する「全数調査」を行った。また、資料の性質による出現用法のかたよりを補うため、主に一般教養書を対象として「ピックアップ調査」を行った。これは、上記委員会委員等に依頼して対象テキストから必要と思われる用法のみを採集するものである。

現在までに収集された用例数は、異なり数約9,100語の見出し語につい

て、延べ約 190,200 用例である。

[採録対象資料]

(全数調査)

NHKラジオ東京第一放送

1976年12月27日 「趣味の手帳」「日本列島北南」「動植物歳時記」「時の話題」「年末回顧」「文化講演会」

1980年7月16日 「ニュース(5:00～)」「日本列島北南」「おはようジョッキー」「時の話題」「昼の散歩道」「午後のロータリー(前半)」「ディスク・トゥデイ」「午後のロータリー(後半)」「ニュース(18:00～)」「トラベルジョッキー」

1984年11月18日 「ニュース(5:00～)」「政治座談会」「シルバー電話相談」

日本語教科書等

海外技術者研修協会「にほんごのきそ」「現代日本事情」

インターカルト日本語学校「日本語中級読解」

水谷信子「総合日本語中級」

東海大学「日本語中級Ⅰ」

ランゲージ・サービス “Intensive Course In Japanese—Intermediate”

アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

“Integrated Spoken Japanese Ⅰ”

国立国語研究所「日本語教育映画基礎編(全30巻)」「日本語教育映像教材ユニット1～4」

一般教養書等

ブルーバックス「空間が人をつくる人が空間をつくる」(部分)

岩波ジュニア新書47「最新科学の常識」(部分)

(ピックアップ調査)

一般教養書等

岩波新書「昭和恐慌」「SDI批判」「大地の微生物世界」「酒と健康」「零の発見」

5. 第2次資料の作成

収集された第1次資料に基づき、各語の用法を網羅し、日本語学習者に提示するために適当な分類を施す作業に着手した。本年度は、普通漢字で表記され主に名詞として用いられる語の執筆を前年度に引き続き行い、さらに副詞についても執筆を行った。この作業のため、上記委員会の検討を経て前年度に作成した「基本語用例データベース作成作業要領——名詞性漢字語項目用執筆要領——」に続いて、「同——副詞項目用執筆要領——」を作成した。

執筆は下記の所外執筆者に依頼して行った。

浅野百合子, 板倉元子, 井上紀子, 岡崎眸, 小川淳子, 久池井紀子, 小林ミナ, 齊木ゆかり, 斎藤里美, 桜木和子, 桜木紀子, 高田恵子, 田中久美子, 谷口龍子, 田部井圭子, 玉置亜衣子, 土屋博嗣, 出口香, 土井美鶴, 中俣久美子, 沼田善子, 畠郁, 馬場良二, 早津恵美子, 備前徹, 水野千佳子, 光信仁美, 宮崎妙子, 山根智恵, 吉川正則, 米沢みどり, リード真澄

執筆された原稿について、客員研究員による内部校閲を経た後、外部の校閲者による校閲を行った。この校閲は下記の所外校閲者に依頼した。

水野千佳子, 光信仁美

D 今後の予定

本事業は、平成3年度までを第I期とし、基本語について第2次資料の執筆・校閲を行った後に、さらに第II期に移行する予定である。

第1次資料の収集は、この全期間にわたって継続される。

第2次資料の執筆は、「名詞性漢字語」「副詞」に続いて「動詞」「形容詞・形容動詞」を取り上げることが決まっており、こうした語グループごとに執筆要領を作成しながら、継続される。

第I期終了後に、それまでに蓄積された第2次資料を公表する予定であり、その形態については今後検討される。また、それ以前に、第1次資料・第2次資料を各種の研究や刊行物作成に利用することも検討されている。

日本語教育モデル教材の作成

A 目 的

日本語教育における有効適切な教材の開発を旨として、モデル教材を作成する。本年度の課題は、映像素材を日本語教育に利用する方法を改善することを目的とし、内容・提示方法の両面について研究するためのビデオテープ素材を作成する「日本語教育映像教材 中級編の作成」である。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長 水谷 修 部長 上野田鶴子 室長 中道真木男
研究員 中田智子

C 本年度の作業

継続して作成している『日本語教育映像教材 中級編』のうち、61年度作成の「ユニット1」、62年度作成の「ユニット2」、63年度作成の「ユニット3」に続く、「ユニット4」を企画・制作した。その題名及び規格等は、次の通りである。

イ. 題名及び内容

日本語教育映像教材 中級編

ユニット4 「意見の違う人に——問いかえし・反論——」

セグメント19 イベントを提案する

セグメント20 相談をまとめる

セグメント21 打ち合わせをする

セグメント22 交渉をする

セグメント23 会場の準備をする

セグメント 24 討論をする

このユニットでは、人のことばに対する反論と、話がよくわからなかった時などの問い返し方を扱っている。

相手と異なる意見を述べることは、それ自体が摩擦を起こしやすい働きかけであり、相手との関係、話の内容、その場の状況など、様々な要因を考慮に入れて、「確かにそうですが」といった前置き表現を使うなど、言い方を選ぶ必要がある。あるいは、「うーん」「そうですねえ」などのことばを否定的な口調で言うことで、暗に不賛成の意を表すこともある。このユニットでは、これらのやわらげの方策を様々な場面や登場人物に合わせて描いた。

また、人に対して問い返しをする例も数多く含まれている。わからないことばが出てきた時、話の展開についていけなくなった時、どうも互いの理解がくい違っているらしいと気づいた時に、不安な点を確認する方策を身につけることも、学習者にとって不可欠な学習項目である。

ロ. 規格等

VTRカラー（1／2インチ，1／3インチ），16ミリカラー

企画 国立国語研究所

制作 日本シネセル株式会社

この日本語教育映像教材の企画・制作に当たっては、「日本語教育映画等企画協議会」を設け、学習項目や主題の検討、シナリオの検討等の協力を仰いでいる。また、制作面では、特に言語上の問題について指導・助言を受けている。本年度の委員は次の諸氏である。

（所外委員）

木村 宗男（前日本語教育学会副会長）

佐久間まゆみ（筑波大学助教授）

丸山 敬介（国際教育振興会日本語研修所主任）

吉岡 英幸（東京外国語大学教授）

（所内委員）

- 水谷 修 (日本語教育センター長)
上野田鶴子 (日本語教育指導普及部長)
中道真木男 (日本語教育教材開発室長)
中田 智子 (日本語教育教材開発室研究員)
相沢 正夫 (日本語教育センター第一研究室研究員)
西原 鈴子 (日本語教育センター第二研究室長)
杉戸 清樹 (言語行動研究部第一研究室長)

D 今後の予定

『日本語教育映像教材 中級編』は、ユニット4をもって作成を終了した。次年度から、中級編全ユニットに関する関連教材を作成した上で、視聴覚教材の利用方法に関する研究の素材とする。関連教材としては、当面、「シナリオ集」「語彙表」「機能分類表」「教師用マニュアル」「教案例集」の作成を予定している。また、素材のレーザーディスク化を初めとする多媒体化の実験も計画している。

日本語教育参考資料の作成

A 目 的

日本語教育に従事する人々の理論面における知識の向上を図るため、種々の分野における参考図書・資料を刊行する。

B 担 当 者

日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室

センター長 水谷 修 部長 上野田鶴子 室長 中道真木男

研究員 中田智子

C 本年度の作業

継続して刊行している『日本語教育指導参考書』シリーズの一部として下記参考書を編集・刊行した。約 500 部を国内の日本語教育機関等に配布するほか、大蔵省印刷局より市販された。

1. 題名 『外来語の形成とその教育』（日本語教育指導参考書 16）
執筆者 カッケンブッシュ 寛子（広島大学教授）
大曾美恵子（関西外国語大学教授）
規格等 A 5 版 175 ページ
2. 題名 『敬語教育の基本問題（上）』（日本語教育指導参考書 17）
執筆者 窪田富男（東京外国語大学教授）
規格等 A 5 版 133 ページ

D 今後の予定

『日本語教育指導参考書』シリーズの編集・刊行を継続して行う。

文部省科学研究費補助金による研究

日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究

－外国人を対象とする日本語教育における音声教育の方策に関する研究－

(代表者 野元菊雄)＜重点領域研究(1)＞

＜研究目的＞

平成元年度発足の文部省科学研究費補助金重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」は、総括班と、採択された10の計画研究班、及び、多数の応募研究の中から選ばれた八つの公募研究班の、合計19の班で構成される。そのうち、ここで報告するのは計画研究班の一つ、研究の成果を実際の教育面にどう実現していくか、を担当するD班のうちのD-1班とされているものであり、班の研究項目は「外国人を対象とする日本語教育における音声教育の方策に関する研究」である。

この重点領域研究全体の目的は次の通りである。すなわち、今日の日本語が今までとは比較にならないほど国際的に重要な位置を占め、日本語の学習者が世界的に激増しているにもかかわらず、日本語の音声教育に役立つような研究が大変遅れている、という状況下で、日本語音声のうち、特に話しことばの上で重要な役割りを果たす、アクセント、イントネーション、リズム、ポーズ等の韻律的特徴に焦点を絞り全国共通の材料について方言音声を集めて、日本語の韻律的特徴の本質を明らかにし、日本語教育、国語教育に真に役立つような研究をすることである。具体的には各研究班が下記の(A)～(D)を目的として研究を推進する。

- (A) 日本各地域の音声の収集と研究
- (B) 音声データベースの作成・保存と利用に関する研究
- (C) 韻律的特徴の音響的、生理的研究及び言語理論の確立
- (D) 日本語教育及び国語教育のための韻律的特徴の客観的研究及び音声教育方法の研究

D-1班は上の(D)のうち日本語教育についての面を受け持っている。なお日本語教育と関係のある題目を扱う班は他に、E-5班「外国人日本語学習者のための音声学習支援システムの研究」、E-6班「日本語教育のための日本語と外国語との対照研究」、E-7班「日本語音声教育の社会言語学的言語工学的研究」、E-8班「統語的あいまい文の理解を決定する韻律的要因-日中比較研究」などがある。

D-1班の目的は次の通りである。

外国人を対象とする日本語教育においては、特に音声の教育が不可欠であるにもかかわらず、音声教育の方策は必ずしも明確ではなかった。この欠点を補い、音声を効果的に教育するためには、まず基礎的な音声資料を得ることが必要である。外国人の日本語発音は、その母語の違いによって特徴があり、指導の方法もまた個別に対策を講じなければならない。このために、多くの音声資料を収録し分析して方策を研究することを目的とする。

具体的には、

- (1) a. ヨーロッパ語を母語とする留学生。b. アジアの諸言語を母語とする留学生。c. 諸外国からの帰国子女、中国からの帰国者。などについて、それぞれ日本語音声を収録し、音響分析をする。
- (2) 上記と同じ項目について、標準となすべき日本語音声を収録し、音響的分析をする。
- (3) これらの資料は、語あるいは分節レベルだけでなく、むしろ文レベル、談話レベルに重点を置いて収録する。
- (4) この結果に基づいて、母語別の指導法を研究する。
- (5) 外国人の日本語発音について、その特徴をよく示すものをデータベース化する。
- (6) 教育する者のために、音声教育について、教授法を確立する。

などである。

<研究組織>

研究代表者

野元 菊雄（国立国語研究所・所長）

研究分担者

水谷 修（国立国語研究所日本語教育センター・センター長）

大坪 一夫（筑波大学文芸言語学系・教授）

土岐 哲（名古屋大学総合言語センター・助教授）

鮎沢 孝子（国立国語研究所日本語教育センター・室長）

前川喜久雄（国立国語研究所言語行動研究部・研究員）

<研究経過>

本年度は初年度として、上記の目的から外国人の日本語発音についていくつかの例を収録するところから始めた。その準備及び実験のため、5回会合を開いて、調査すべき50項目、被調査者選択方法、資料収録方法などを決定し、年度末現在、合計85人から録音を採った。その内訳は次の通りである。母語の数は合計21に及んでいて、性別では男50人、女35人。すべて留学生及びその家族である。母語の順は不同。

- | | |
|----------------|-------------|
| 1. タイ語 | 7人（男3,女4） |
| 2. トルコ語 | 1人（男） |
| 3. インドネシア語 | 7人（男6,女1） |
| 4. ヘブライ語 | 1人（男） |
| 5. アラビア語 | 4人（男） |
| 6. スペイン語 | 7人（男4,女3） |
| 7. オランダ語 | 1人（男） |
| 8. ギリシャ語 | 1人（男） |
| 9. マラヤテム語（インド） | 1人（男） |
| 10. ロシア語 | 1人（男） |
| 11. 英語 | 25人（男16,女9） |
| 12. 韓国語 | 3人（男1,女2） |

13.	中国語	13人（男3,女10）
14.	ポルトガル語（ブラジル）	5人（男3,女2）
15.	テグル語（インド）	1人（女）
16.	バングラ語	1人（男）
17.	フランス語	1人（女）
18.	タミル語（インド）	1人（男）
19.	ドイツ語	2人（男1,女1）
20.	イタリア語	1人（男）
21.	ポーランド語	1人（女）

以上のものを材料として一部分析・整理作業を始めた。

作業を進める上で最も留意した点は、アクセント、イントネーション、拍感覚などの、個々の韻律要素ごとに出現する特徴だけを捉えるのではなく、それらの事項の相互の関係をどう処理するかに配慮したことである。

アクセント以外の韻律的特徴に関する体系的記述が乏しい最大の原因は、文節音に比べて安定した音声特徴が求めにくいためである。そこにはかなりの個人差が認められ、同一個人内でも試行ごとに変動が観察されることもあり、われわれの前途の多難を思わせるものがある。

結果に着いては一部を、平成2年1月に開かれた報告会で口頭発表した。発表者及び演題は次の通りである。

水谷 修：韓国語・英語話者の日本語発話における韻律的特徴とその分析手続き

前川喜久雄：朗読イントネーションのプロミネンス

なお、われわれは、外国人の発音だけを研究とするのでは不十分と考えている。すでに、日本語を母語とする者が日本語学習者用調査票を朗読した資料を素材として、文法的ないし語用論的に要求される各種の韻律的特徴が個人によってどのような変動を示すかを音響音声学的に分析した。上記の前川の報告はこのことを扱ったものの一部である。二つの報告の具体的な点に関

してはこの重点領域研究(1)の総括班から出た『研究成果報告書 1989』を参照されたい。

また、われわれは外国人について日本語の発音だけでなく、調査票の内容と同じことを母語で発話したときの韻律に関する点も収録して、各人の日本語の韻律にどのような影響を与えるかについても調査研究すべきであると考え、その実施を次年度において検討する予定である。

言語研究におけるシソーラスの利用法

(代表者 宮島達夫) <一般研究(B)>

<研究目的>

言語情報処理研究の進展にともない、シソーラスの重要性も、ひろく認識されるようになってきた。とくに、これが機械によめる形で磁気テープなどにはいっており、研究者の共通の財産となっていれば、その利用価値はきわめて大きい。ただし、これまで作成されたものの多くは、日本科学技術情報センター（JICST）の例にみられるように、特定科学分野の概念間の関係をあきらかにするためのものであり、一般用語のシソーラスといえば、表現辞典の一種として利用されるのが大部分である。しかし、そのような日常生活での利用以外に、一般語のシソーラスにも、言語研究に役立つ面があると思われる。本研究は、その可能性を追及し、あたらしい方法を開拓することを目的とする。あわせて、一般語のシソーラスとして、すでに定評のある国立国語研究所の『分類語彙表』の採録項目に検討をくわえ、語数を現在の倍の約60,000語にし、一般の利用に供することをも目指す。

<研究組織>

研究代表者

宮島達夫（言語体系研究部長）

研究分担者

林 大（名誉所員）

野村雅昭（早稲田大学日本語研究教育センター教授）

中野 洋（言語体系研究部第二研究室長）

石井久雄（言語体系研究部第三研究室長）

小沼 悦（言語体系研究部第二研究室員）

<研究経過>

1. 研究協力者（モニター）の組織

言語学・情報学・コンピュータ関係の研究者でシソーラスに関心のふかい研究者約30名を研究協力者に委嘱した。われわれの研究について随時

意見をのべてもらうとともに、シソーラスを一部分ずつ割り当てて修正・増補を依頼した。

2. シソーラスのフロッピーへの入力

『分類語彙表』をフロッピーに入力し、検索・印刷が可能な状態にして、モニターに配付した。

3. 研究会の開催

12月25日に、モニター各位の参加をえて国語研究所で研究会をひらき、研究経過を報告するとともに、問題点の討論をした。

4. 「モニター通信」の発行

モニターへの連絡と相互の交流のために、「モニター通信」を発行した。本年度は4回刊行。

5. シソーラスの増補

『分類語彙表』の修正・増補のため、合宿研究会を4回ひらいた。おもな問題点は、つぎのとおり。

8月：漢語動詞・複合動詞の追加

10月：多義語の2番目以下の意味の追加

12月：同

2月：上記追加部分の点検と表記の統一

以上のように、本年度の作業はほぼ順調にすすんだ。ただし、シソーラスを言語研究に利用した先行文献の調査は、次年度まわしにせざるをえなかった。

日本語教育のための意味記述用基本語彙の選定と記述

(代表者 中道真木男) 〈一般研究(C)〉

〈研究目的〉

外国人に対する日本語教育において、語の意味・用法を日本語で提示する際のメタ言語として使用するための日本語体系のうち、語彙の面における指針を得ることを目的とする。

〈研究組織〉

研究代表者

中道真木男（日本語教育センター日本語教育教材開発室長）

〈研究経過〉

日本語教授の場においては、ことばの意味・用法や言語場面の説明が日常的に行われるが、学習者がそうした説明を正確・迅速に理解することができるか否かが、日本語習得の成功・不成功を決定する大きな要因のひとつである。説明の手段としては日本語そのものを用いるのが好ましく、学習者の母語等を媒介言語として使用すれば、日本語による思考様式の形成を阻害するのみならず、両言語の間の意味やニュアンスのずれによって誤解が生じる危険性が高いことは、多くの教授者の認めるところである。しかし、媒介言語に変わる説明手段としての日本語の内容は「既習の語彙・文型を用いる」という以上には認識されておらず、学習歴の異なる学習者が混在する場合に困難が生じたり、既習の語であっても用法としては未習であるものを不用意に用いて混乱を生じたりする例がしばしば見られる。こうした状況を改善するためには、説明用メタ言語として使用する日本語の範囲を限定し標準化することがぜひとも必要である。

本研究では、こうした標準化のための第一段階として、意味・用法の説明に使用する語彙の整理を行おうとしている。ここでは、初級後期から中級程度の学習者を念頭において語彙を選定し、さらに各語の用法の整理も行い、それぞれの用法における意味を記述して、説明に使用する語彙の範囲を決定する。これらは、教室作業の手段、学習者の学習継続能力の基盤、さらに学

習者用辞書の記述手段として利用しうるものとなるはずである。

このような目的のため、本年度は、選定されるメタ言語語彙によって説明されるべき意味・用法の内容と、学習者がすでに習得している語彙とを比較し、いわゆる「学習基本語彙」に付け加える必要のある語彙の概観を得るため、いくつかの作業を行った。記述の対象を当面形容詞に限定した。

1. 対立項のリストアップ

すでに発表されている意味分析・辞書記述等から、形容詞の意味を区別するカテゴリーを収集し、それらを言い表すのに必要な語彙をリストアップする作業に着手した。

2. 辞書における記述用語調査

国語辞典・日本語学習者用辞書等で意味記述に用いられている語を調査する作業に着手した。この作業によって収集された語彙を、言い換え等によって一定の範囲に整理し、意味記述用語彙の範囲を限定するための基礎とする計画である。

〈次年度の予定〉

本年度の作業を継続し、その結果をもとにして語彙の範囲についての一応の案を得たうえで、それをいわゆる学習基本語彙と比較して過不足を調整し、その結果によっていくつかの形容詞の意味を実際に記述する試みを行う計画である。また、日本語および外国語について作成されているシソーラス類との比較を行って欠落部分を点検するとともに、同等の記述用語彙を外国語においても選定する可能性について考察を加えたいと考えている。

疑似識字段階にいる幼児の読み書きの獲得に関する社会・文化的研究

(代表者 茂呂雄二) <奨励研究(A)>

<研究目的>

幼児が文字と出会い、書きことばを獲得しつつある課程を「対話を基礎にした文化への参加」という視点から明らかにする。かな文字を十分には獲得していない段階(疑似識字段階)の幼児が、文字・書きことばをどのようなものと見ているか(文字概念)を面接法によって引き出すことを目的とする。

<研究組織>

研究代表者

茂呂雄二(言語教育研究部第一研究室研究員)

<研究経過>

1. 読み書き能力の発達に関する先行研究の収集と評価

日本語に関する文献約 100, 外国語に関する文献約 250 を収集し、関心領域・問題論・方法論に従って分類し、先行諸研究を総覧した。その結果、本研究の目指す「疑似識字段階」ならびに「社会・文化的形成」を扱ったものが少ないこと、日本語では皆無といえることを確認した。

2. 幼児の文字概念・文字把握を引き出すための面接法の開発と実施

大学生(約 200 名)に対する予備調査(文字および読み書きとはなにかについての自由記述をもとめる調査)をもとに、面接法(面接の際にたずねる質問項目と幼児に求める課題群からなる)を作成した。質問項目は文字の機能・価値に対する幼児自身の評価/過去の学習経験/文字の歴史・由来/他のシンボル(絵・数字)との比較/他の認知技能(数唱など)との比較/他の身体技能(自転車乗りなど)との比較を尋ねる。課題は文字と絵のかき分け/名前・日付の記入/絵の説明を文章で書くこと等からなる。この面接法を東京都内の保育園児 30 名(3 歳, 4 歳, 5 歳各 10 名ずつ)に実施し、年齢段階ごとの資料を収集した。

漢字の学習指導法に関する文献目録の作成とそれに基づいた漢字の学習指導法の分類
— 国立国語研究所編『国語年鑑』の「文献目録」に掲載されている雑誌論文，単行
本を中心に —

(代表者 島村直己) <奨励研究(A)>

<研究目的>

漢字の学習指導法に関する雑誌論文，単行本は，数多く発表されている。しかし，それらを整理して漢字の学習指導法を体系づける試みは，まだ行われていない。本研究は，この問題意識から，次の二つのことを行うことを目的とするものである。

1. 国立国語研究所編『国語年鑑』の「文献目録」に掲載されている漢字の学習指導法に関する雑誌論文，単行本を中心に，目録を作成する。
2. その雑誌論文，単行本を分類し，漢字の学習指導法を体系づける。

本研究の代表者は，昭和56年度総合研究(B)『『常用漢字の学習段階配当に関する基礎的研究』にともなう研究計画の検討』(代表者 林大)の中で，『漢字及び漢字教育関係文献目録』の作成を担当して行ったことがある。しかし，諸般の事情で漢字の学習指導法に関する文献を掲載することができなかった。本研究は，それを補うだけでなく，さらに一歩進めて，漢字の学習指導法を分類して体系づけるものである。

<研究組織>

研究代表者

島村直己(言語教育研究部第一研究室長)

<研究経過>

実際に作業をした結果，関係する文献があまりにも多いことが分かったので，雑誌論文を優先して作業を進めた。そして，第2次世界大戦が終了してから「国語年鑑」が刊行されるまでの間に出版された文献を他の目録類から補った。具体的には，以下のことがらを行った。

1. 国立国語研究所編『国語年鑑』(1954年版—1988年版)の「文献目録」に掲載されている漢字の学習指導法に関する雑誌論文の目録をパソコン上に

データベース化した。

2. 『国語年鑑』を補うため、日本学術会議『文学・哲学・史学 文献目録』(1952年)に掲載されている漢字の学習指導法に関する雑誌論文の目録もパソコン上にデータベース化した。
3. 単行本に関しては、『国語年鑑』以外に、日本学術会議『文学・哲学・史学 文献目録』、文部省『文部省刊行物目録総覧』(1981年)、野地潤家『国語教育史資料第6巻 年表』(1981年)を参照して、漢字の学習指導法に関する文献(単行本)情報のカード化を行った。
4. 漢字の学習指導法に関する約400編ほどの雑誌論文の複写を行った。

漢字の学習指導法に関する雑誌論文・単行本の目録を作成して、漢字の学習指導法を分類・体系化するという大目標は、本研究の研究期間中には達成できなかった。しかし、そのための基礎作業をだいたい終えることができた。

<研究目的>

国語語彙史の記述は、今後、文献国語史と方言地理学との総合により進められるべきである。その際、大きな問題となることとして、同一あるいは類似の語形の意味が、しばしば文献と方言とで対応しないということがある。例えば、マゲ・メゲという語形は、文献では<まつ毛>の意味であるのに、方言では<眉毛>の意味で広く分布する。そこで、文献・方言間の語の意味の対応関係はどうなっているのか、不对応の原因はいかなるものなのか、ということについて見通しを得たい。そのための基礎資料として、『日本言語地図』の関連意味項目地図（例えば、『日本言語地図』の<眉毛>の地図に対して<まつ毛>の地図）をあらたに作製する。

<研究組織>

研究代表者

小林 隆（言語変化研究部第一研究室研究員）

<研究経過>

まず、『日本言語地図』関連意味項目地図を作製するために、回答者情報および回答の確認・整理、回答地点番号の決定、白地図・記号ゴム印の製作などの準備作業を行った。資料は通信調査によるため、そこから派生する回答者の表記法、条件に合わない回答者の処理などの問題点について検討したが、未解決の部分を残した。

次に、地図の作製を行った。回答地点や回答者の属性などの基礎図を作った後、具体的な調査項目に進んだ。

現在作製済みの地図からは、文献・方言間の語の意味の対応関係について次のような点がわかりつつある。すなわち、ある語について、

- ① 文献上用例のきわめて限られる意味が、方言上広い分布領域をもつ場合がある（例：カオの<容姿>の意味）。
- ② 文献上用例の豊富な意味が、方言上きわめて限られた分布しかもたな

い場合がある（例：マミの〈まなざし〉〈目もと〉の意味）。

- ③ 文献上発見された同音語の衝突が、方言上その同音語の相補分布となつて確認される場合がある（例：〈ぼうふら(虫)〉のポーフラと〈南瓜〉のポーフラ）。

〈今後の予定〉

『日本言語地図』関連意味項目地図の作製を続け、それを基に上記の問題について考察を深めたい。また、方言の崩壊が進む今日、さらに資料を充実させるための方言分布調査も急務であると考えている。

米国における研究者のための日本語教育に関する共同研究

(代表者 水谷 修) <国際学術研究>

<研究目的>

本研究は、科学技術日本語教育システム（教材開発、人物交流を含む）の確立について、米国からの強い要請にこたえて研究調査を進めるものである。最も効果的なシステムの在り方を追求するために、教育の現場、教師養成の問題点、教材開発の可能性を日米両国の現状に基づいて厳密に調査し、情報交換を行って、今後のシステム開発の基本的な計画を作りあげることが目的とする。

具体的な計画としては、米国の National Science Foundation 及び Massachusetts Institute of Technology を始めとする諸大学の科学技術日本語専門家と日本の文部省及び、科学技術日本語研究者（東京工業大学、筑波大学、神田外語大学、国立国語研究所、国際基督教大学、慶応大学所属）を中心とした専門家を米国に派遣して、日米間の科学技術交流において重要な課題となっている科学技術日本語の教育システムの開発等に関する情報・意見の交換を行うこと、及び米国内の専門家を日本に招致し情報意見の交換を行う。

<研究組織>

研究代表者

水谷 修（日本語教育センター長）

研究分担者

大坪 一夫（筑波大学文芸言語学系教授）

木村 孟（東京工業大学工学部教授）

井上 和子（神田外語大学外国語学部教授）

広瀬 正宜（国際基督教大学教養学部準教授）

西村よしみ（筑波大学文芸言語学系講師）

鈴木 庸子（国際基督教大学教養学部講師）

岡崎 敏雄（広島大学教育学部助教授）

羽田野洋子（慶応大学国際センター講師）

仁科喜久子（東京工業大学留学生教育センター助教授）

谷口すみ子（東京工業大学留学生教育センター講師）

<研究経過>

この研究は、1988年6月の日米科学技術協定の締結と、同年11月の全米科学財団ブロック長官と中島文部大臣との協議における合意を受けて、具体的に問題を解明、解決していくための調査研究として発足したものである。1988年11月には東京において予備会議が開催された。1989年5月22日から3日間にわたって米国ワシントン州シアトル市のワシントン大学を会場として日、米、豪三か国の代表25名によるワークショップを開催し、研究発表、討議、情報交換を行った。

研究発表及び討議のテーマは次の5つである。

1. The present state of Japanese language and instruction and its relation to needs for technological and scientific activities
2. Existing philosophies of Japanese language instruction, and of learning processes, and their relation to the same processes for engineering and science
3. Instructional materials and technologies, their effectiveness and limitations
4. Instructor training and utilization considerations
5. An agenda for improving technical Japanese instruction

科学技術日本語教育のシステムを作りだすための具体的な成果は充分には得られなかったが、所在する問題点についてはかなり明確に指摘され、今後の指針決定のために役立つ情報が確認された。とくに、教材開発に関しては筑波大学とマサチューセッツ工科大学の両者で、科学日本語の読解教育を支援するシステムを共同開発していくことが決まった。平成元年度内には、この教授の学習過程の分析を行い、平成2年度6月をめどにプログラムを開発し、その後のMIT「日本科学技術プログラム」でプロトタイプを試用して計算機のためのプログラム及び教材の評価を行う計画が立てられた。

授業行動の分析は、刺激回想法と発話思考法による。刺激回想法は、授業をビデオ・テープに記録し、調査者が授業担当者と共に記録された授業を再生しながら、授業担当者の種々の教授行動の理由・目的等を記録・分析して、授業行動の一定のパターンを導き出すものである。発話思考法は、授業中に授業担当者が自分の行動について自分がいまでのような目的で、どのような行動をとるか、また学習者は、どのような目的で、どのような行動をとるかを発話し、その録音テープを再生して授業を記録し、分析するものである。

平成元年10月から記録を開始し、2月下旬にMIT、筒井助教授に来日してもらい、刺激回想法による授業分析をした。平成2年3月に教育の専門家である渡邊光雄、日本語の専門家である加納千恵子氏を米国に派遣し、分析結果を筒井、ミルズ両氏と評価・確認した。この検討は、平成2年に作成する、コンピューターのプログラムを決定するためのものである。

<今後の計画>

平成2年度には、教材開発の具体的作業を進めると同時に科学技術日本語教育システム開発の全体計画構想を作りあげる。この構想の中には、専門教員の養成・派遣、米国の研究者の日本への受入れ態勢の在り方なども含まれる。

国語学研究文献のキーワードによる検索システムの開発

(代表者 築島 裕<中央大学教授・東京大学名誉教授>) <試験研究(1)>

<研究目的>

日本語研究に関する論文単位の文献データベースは、その一部(昭和28～59年発表のもの)が昭和61年～63年度の科学研究費(試験研究)「国語学研究文献データベースの作成」(以下、前科研)によって作成された。その検索法については、論文名・著者名等による書誌情報からのみで、キーワードによる内容からの検索システムは未開発である。そこで、われわれは、国語学会と国立国語研究所との共同事業として、昭和20年以降に発表された全ての日本語研究論文にキーワードを付与し(一部は前科研成果により付与済みデータが利用できる)、それらのキーワードの相互連関をシソーラスにまとめ、日本語研究文献検索システムを構築する。その要点は以下の通りである。

- I. 昭和20年～50年に発表された日本語研究論文(約10万件:うち8万5千件は前科研成果が利用できる)を収集し、論文名・著書名等の書誌情報を電子計算機に入力する。
- II. Iの収録論文に、研究の分野コード、文献の内容を示すキーワードを付与する。(一部は前科研成果を利用)
- III. IIで付されたキーワードを分類整理し、日本語研究のシソーラスを作成する。
- IV. I～IIIを踏まえ、電子計算機による書誌情報・内容情報からの検索システムを開発し、研究者用パソコンで様々な表示、検索ができるようにする。
- V. I～IVの成果を、日本語研究文献データベースとして構築する。これをパソコン用外部記憶媒体に収め、また、書籍形態の目録としても編集・作成する。全国規模のオンライン検索についても検討する。

<研究組織>

研究代表者

築島 裕(中央大学 教授)

研究分担者

- 金田一春彦（武蔵野女子大学 客員教授）
阪倉 篤義（甲南女子大学 教授）
柴田 武（東京大学 名誉教授）
野元 菊雄（国立国語研究所 所長）
渡辺 実（上智大学 教授）
樺島 忠夫（大阪府立大学 教授）
秋永 一枝（早稲田大学 教授）
菅野 謙（大正大学 教授）
徳川 宗賢（大阪大学 教授）
宮島 達夫（国立国語研究所 部長）
田中 章夫（学習院大学 教授）
飛田 良文（国立国語研究所 部長）
上野田鶴子（国立国語研究所 部長）
江川 清（国立国語研究所 部長）
中野 洋（国立国語研究所 室長）
酒井 俊夫（〈株〉ソフトヴィジョン・代表）
加藤 泰彦（上智大学 講師）
加藤 信明（駒沢女子短期大学 講師）
萩野 綱男（筑波大学 講師）
清水 康行（名古屋大学 助教授）
安部 清哉（フェリス女子大学 講師）
小野 正弘（鶴見大学 講師）
鈴木 豊（文京女子短期大学 講師）
古田 啓（東京女子大学 助教授）

〈研究成果〉

本研究は、平成元年度から3か年計画で行われ、本年度が初年度である。
本年度は、本研究の基礎的成果となる書誌情報の収集、内容情報の付与を

中心に、以下の成果を得た。

- ① 昭和 20～27 年の雑誌掲載研究文献と昭和 20～59 年の講座・論文集所収研究文献（約 1 万 5 千件）の書誌情報を収集し、計算機入力用パンチ原稿を作成した。
- ② 上記①のパンチ原稿の入力、校正を行った。
- ③ 昭和 28 年～59 年の雑誌掲載研究文献のうち、内容情報付与が済んでいないもの（約 6 万件）に、キーワードを付与し、計算機入力用パンチ原稿を作成した。
- ④ 前年度以前に作成されていた文献内容データー（約 2 万 5 千件）をパソコン利用に便利な MS-DOS ファイルに転換・整理した。このファイルは、下記⑤～⑦作業に活用された。
- ⑤ 付与済みのキーワード（延べ約 6 万語）を対象に、「同義・上位・下位語一覧」を試作し、キーワードの相互関連の整理・標準化の実験試行を行った。その成果を踏まえ、「シソーラス作成の手引」を作成した。
- ⑥ 計算機による検索システムについて検討し、そこに盛り込むべき基本機能を決定した。
- ⑦ 公開形態のあり方について検討し、種々の配列・分類等の試作を行った。

以上の研究経過のうち、国立国語研究所で行ったこととその担当者は、以下の通りである。

- ① 書誌情報の収集、パンチ原稿作成は、江川清が担当した。
- ② 上記情報の収集、原稿校正に国立国語研究所図書館を利用した。
- ③ キーワード付与は、野元菊雄・宮島達夫・飛田良文・上野田鶴子・江川清・中野洋が担当した。
- ④ データの MS-DOS ファイルへの転換は、江川清が担当し、米田正人・山崎誠・熊谷康雄がこれを助けた。
- ⑤ キーワード標準化実験試行は、上野田鶴子・江川清・中野洋が担当した。

- ⑥ 計算機による計算システムの検討は、江川清・中野洋が担当した。
- ⑦ 公開形態の検討は、飛田良文が担当した。

<今後の予定>

- ① 昭和 20～59 年に発表された日本語研究論文（約 10 万件）に文献内容を示すキーワードの付与を完了し、コンピュータに入力する。
- ② 「ソーラス作成の手引き」にもとづき、入力したキーワード（約 20 万語）の標準化を行う。
- ③ 検索システムの開発及び公開形態についての検討を行う。

<研究目的>

生成文法理論に基づき、人間言語の普遍性の観点から日本語の諸特徴をとらえなおし、言語類型論によるプロトタイプ（原型）に照らし、適切な位置付けを計る。各種の言語に見られる構造間の異同を連続体とみるとともに、それを決定するパラメータを仮定することにより、世界の言語の中の日本語としての特徴を明らかにする。それらの記述には、一般的構造文法の長所を取り入れながら、本研究の成果を基に生成文法のより洗練された定式化を用いる。上記諸理論の実証には、外国人の日本語学習に見られる誤用の分析、言語獲得に関する心理言語学実験、言語行動に関する実験結果などを用いる。これによって生成文法理論の説明的妥当性を確かめ、言語理論の進展に寄与するだけでなく、日本語教育に対して具体的な提案を行う。更に、機械翻訳、人工知能の研究など各種の応用分野にも貢献することを目的とする。

<研究組織>

研究代表者

井上 和子（神田外語大学教授）

研究分担者

氏名	所属	役割分担
井上 和子	（神田外語大学教授）	普遍文法理論の開発と全体の総合
水谷 修	（国立国語研究所日本語教育センター長）	外国人の日本語談話行動に関する実験と分析
村木 正武	（独協大学教授）	発音面の誤用分析と普遍文法理論の開発
野元 菊雄	（国立国語研究所長）	誤用例収集はデータベース作成
奥津敬一郎	（日本女子大学教授）	中国語・朝鮮語を母語とする日本語学習者の誤用分析
大津由紀雄	（慶応義塾大学助教授）	日英語話者（幼児）の誤用分析と文法獲得理論の構築

柴谷 方良（神戸大学助教授）	言語類型論による日本語とアセアン諸語の 対照分析と普遍文法理論の開発
寺村 秀夫（大阪大学教授）	日本語学習者の誤用例の整理・収集と対照 言語学的分析
山田 洋（大妻女子大学助教授）	コンピューター処理手続きの開発とデータ ベース化

国立国語研究所では野元班として以下の研究協力者および所員の協力を得て、誤用例収集とデータベース作成のための研究を行った。

上野田鶴子 日本語教育センター日本語教育指導普及部長
 田中 望 日本語教育センター日本語教育研修室長
 古川ちかし 日本語教育センター日本語教育研修室研究員
 石井恵理子 日本語教育センター日本語教育研修室研究員
 早田美智子 日本語教育センター日本語教育研修室研究補助員

また、水谷班は前年度に引続き、実質的な研究組織を名古屋大学総合言語センターにおき研究を行ったので、ここでは詳細は省略する。

<研究経緯>

本年度の野元班は、引続き、次の二つのテーマについて研究を行った。

- 1) 文献にあらわれた外国人日本語学習者の誤用例のデータベース化
- 2) 外国人日本語話者の中間言語記述－誤用分析を通して－

このうち、1)についてはデータベースを完成し、キーワードシソーラスを作成し、その使用説明書として「文献にあらわれた外国人日本語学習者の誤用例データベース使用説明書」を刊行した。このデータベースは計175編の学会誌・機関誌掲載論文等であらわれた総計6,708件の誤用についての記述のデータからなる。これにより、これまでの誤用研究の成果、その傾向が明らかになった。

2)については、誤用研究の新しい試みとして、学習者に何がどう教えられたか（インプット）と、学習者がそれをどう学習し、使用したか（アウトプット）の関係を把握するための観点および方法論の開発を行った。

図書の収集と整理

前年度に引き続き、研究所の調査研究活動に必要な研究文献及び言語資料を収集、整理し、利用に供した。

また、例年のとおり、各方面から多くの寄贈を受けた。寄贈者各位のご好意に対して感謝する。

平成元年度に受け入れた図書及び逐次刊行物の数並びに蔵書累計は、次のとおりである。

図書

受入 1,814 冊

	購入	寄贈	製本雑誌	その他	計
和書	736	252	232	48	1,268
洋書	410	40	96	0	546
計	1,146	292	328	48	1,814

蔵書数 80,574 冊(平成2年3月31日現在)

逐次刊行物 (学術雑誌, 紀要, 年報類)

継続受入 850 種

	購入	寄贈	計
和	49	714	763
洋	64	23	87
計	113	737	850

庶務報告

I 庁舎及び経費

1. 庁舎

所在地 東京都北区西が丘3丁目9番14号

敷地 10,030 m²

建物

第一号館 (延) 5,719 m²

(管理部門・講堂・図書館・日本語教育センター)

第二号館 - (延) 3,015 m²

(研究部門)

第三号館 (延) 238 m²

(会議室・その他)

第一資料庫 (延) 213 m²

第二資料庫 106 m²

その他附属建物 (延) 330 m²

計 (延) 9,621 m²

2. 経費

平成元年度予算額

人件費 (465,470,000円)

465,470,000円

事業費 (227,720,000円)

234,185,000円

合計 (693,190,000円)

699,655,000円

※上段カッコ内は補正後予算額，下段は当初予算額を示す。

II 評議員会 (平成2年3月31日現在)

会長 有光 次郎	副会長 佐藤喜代治
碧海 純一	石橋幹一郎
大岡 信	岡部 慶三
加藤 秀俊	倉澤 栄吉
小山 弘志	坂井 利之
阪倉 篤義	笹沼 澄子
鈴木 孝夫	高橋 英夫
土谷 精作	外山滋比古
(新任 元. 9. 1)	
林 大	肥田野 直
山田 年栄	頼 惟勤

III 組織と職員

1. 定員 71名

2. 組織及び職員名 (平成2年3月31日現在)

国立国語研究所	所 長	野元 菊雄	2. 3. 31 任期満了
庶務部	部 長	光岡 康雄	元. 10. 31～元. 11. 8 所長事務代理
庶務課	課 長	笹沼 忠	元. 7. 17～元. 8. 31 庶務部長事務代理
	課長補佐	井上 政和	2. 1. 17～2. 3. 31 ”
	庶務係長	細田 信	
	文部事務官	荒川佐代子	
	”	鈴木 修二	元. 4. 1 愛知教育大学庶務部人事課から転任
	事務補佐員	神戸 恭子	(元. 4. 1～2. 3. 30)
	図書主任	大塚 通子	
	文部事務官	綱川 博子	
	人事係長(併)	井上 政和	
	文部事務官	横山 哲也	

会計課	課長	梅原 啓輔	
	課長補佐	斎藤 朗	
	総務係長(併)	斎藤 朗	
	文部事務官	三浦 篤	
	経理係長	土佐南洋夫	
	経理主任	岩田 茂男	
	事務補佐員	山田 文子	(元. 4. 1~2. 3. 30)
	用度係長	山戸 恵秀	元. 4. 1 筑波大学研究協力部研究協力課から昇任
	専門職員	大内三九次郎	元. 7. 1 東京学芸大学施設部施設課から昇任
	文部事務官	太田 修治	
言語体系研究部	部長	宮島 達夫	
第一研究室	室長(兼)	宮島 達夫	
	研究員	山崎 誠	元. 4. 1 言語計量研究部第一研究室から配置換
	“	鈴木美都代	
第二研究室	室長	中野 洋	元. 4. 1 言語計量研究部第一研究室長から配置換
	研究員	石井 正彦	元. 4. 1 言語計量研究部第一研究室から配置換
	研究補助員	小沼 悦	元. 4. 1 言語計量研究部第一研究室から配置換
第三研究室	室長	石井 久雄	元. 4. 1 言語体系研究部第二研究室長から配置換
	研究員	高木 翠	元. 4. 1 言語体系研究部第二研究室から配置換
言語行動研究部	部長	神部 尚武	元. 4. 1 言語行動研究部第三研究室長から昇任
第一研究室	室長	杉戸 清樹	
	研究員	尾崎 喜光	元. 5. 16 大阪大学文学部助手から転任
	研究補助員	塚田実知代	
第二研究室	室長(兼)	神部 尚武	元. 4. 1 室長事務取扱
	研究員	前川喜久雄	元. 4. 1 鳥取大学教育学部講師から転任
	研究補助員	早田美智子	
言語変化研究部	部長	飛田 良文	
第一研究室	室長	澤木 幹栄	元. 4. 1 言語変化研究部主任研究官から昇任

	研究員	小林 隆	
	“	大西拓一郎	2. 3. 1 東北大学文学部助手から転任
	“	白沢 宏枝	
	非常勤研究員	W.A. グロー タース	(元. 4. 1~2. 3. 31)
	“	佐藤 亮一	(“)
第二研究室	室 長	梶原滉太郎	
	研究員	田原 圭子	
	研究補助員	中山 典子	
言語教育研究部	部 長 叻	野元 菊雄	元. 4. 1 部長事務取扱
第一研究室	室 長	嶋村 直己	
	研究員	茂呂 雄二	
	“	川又瑠璃子	
	研究補助員	小高 京子	元. 4. 1 言語計量研究部第三研究室から 配置換
情報資料研究部	部 長	江川 清	元. 4. 1 言語計量研究部長から配置換 元. 7. 1~元. 10. 1 電子計算機システム 開発研究室室長事務代理
第一研究室	室 長 叻	江川 清	元. 4. 1 室長事務取扱
	研究員	井上 優	元. 4. 1 言語計量研究部第二研究室から 配置換
	“	中曾根 仁	元. 4. 1 言語変化研究部第二研究室から 配置換
	研究補助員	辻野都喜江	元. 4. 1 言語計量研究部第二研究室から 配置換
第二研究室	室 長	米田 正人	元. 4. 1 言語行動研究部第二研究室長か ら配置換
	研究員	熊谷 康雄	元. 4. 1 言語行動研究部第二研究室から 配置換
	“	伊藤 菊子	元. 4. 1 言語変化研究部第二研究室から 配置換
	研究補助員	磯部よし子	元. 4. 1 言語行動研究部第二研究室から 配置換
	研究員(併)	田原 圭子	元. 4. 1 併任
電子計算機シス テム開発研究室	室 長	斎藤 秀紀	元. 4. 1 言語計量研究部第三研究室長か ら配置換 元. 10. 1 病気休職
	室 長 叻	江川 清	元. 10. 1 室長事務取扱
	研究補助員	米田 純子	元. 4. 1 言語計量研究部第三研究室から 配置換

国語辞典編集室 (国語辞典編集 調査員)	室長	木村 睦子		
	主任研究官	高梨 信博	2. 3.31 辞職	
	研究員	藤原 浩史	元. 7.16 採用	
	非常勤研究員	貝 美代子	(元. 4. 1~2. 3.31)	
	“	菅野 謙	(“)	
	“	久池井紀子	(“)	
	“	高橋 美佐	(“)	
	“	服部 隆	(“)	
	“	林 大	(“)	
日本語教育 センター 第一研究室	非常勤研究員	伊土 耕平	(元. 8. 1~2. 3.31)	
	“	樋野 雅彦	(元.12. 1~2. 3.31)	
	センター長	水谷 修	元. 5.21~元. 5.26 外国出張(アメリカ 合衆国)	
	室長	鮎澤 孝子	元. 4. 7~元. 4.16 外国出張(シンガポ ール, インドネシア)	
	研究員	相澤 正夫		
	第二研究室	室長	西原 鈴子	
		研究員(併)	川又瑠璃子	元. 4. 1 併任
		事務補佐員	江田 真帆	(元. 4. 1~2. 3.30)
	第三研究室	非常勤研究員	小出いずみ	(元. 4. 1~2. 3.31)
室長		正保 勇	元. 7.14~元. 9.11 外国出張(インドネ シア)	
第四研究室	室長(叻)	水谷 修		
	研究員	水野 義道		
日本語教育 指導普及部	部長	上野田鶴子	元. 5. 4~元. 5. 9 海外研修(アメリカ 合衆国) 元. 8. 6~元. 8.11 “ (“) 元.11. 5~元.11.11 “ (シンガポール) 2. 1. 4~2. 1. 9 “ (アメリカ 合衆国) 2. 3.13~2. 3.20 “ (“) 2. 3.31 辞職	
	日本語教育 研修室	室長	田中 望	
		研究員	古川ちかし	元.11. 5~元.11.10 海外研修(シンガポ ール)

日本語教育 教材開発室	研究員	石井恵理子	
	研究補助員(併)	早田美智子	
	事務補佐員	笠井久美子	(元. 4. 1~2. 3. 30)
	研究補佐員	斎藤 里美	(2. 3. 1~2. 3. 30)
	室長	中道真木男	
	研究員	中田 智子	
	(客員研究員)	非常勤研究員	浅野百合子
	“	畠 郁	(元. 4. 1~元. 9. 30)
	“	金田一京子	(元. 10. 16~2. 3. 31)

3. 名誉所員

- 芦沢 節 (元言語教育研究部長)
飯豊 毅一 (前言語変化研究部長)
大石初太郎 (元第一研究部長)
大久保 愛 (前言語教育研究部第一研究室長)
斎賀 秀夫 (元言語計量研究部長)
高田 正治 (前言語行動研究部主任研究官)
高橋 太郎 (前言語体系研究部長)
林 大 (3代所長)
南 不二男 (前日本語教育センター長)
村石 昭三 (前言語教育研究部長)

IV 平成元年度事業

1. 刊行書

- 日本語の母音、子音、音節 (報告100) <秀英出版刊>
研究報告集(11) (報告101) <秀英出版刊>
場面と場面意識 (報告102) <三省堂刊>
国定読本用語総覧4 第3期 [あ~て]
(国語辞典編集資料4) <三省堂刊>

- 話しことば文脈付き用語索引(言語処理データ4) 〈日本マイクロ写真〉
 国語年鑑(1990年版) 〈秀英出版刊〉
 国立国語研究所年報-40-(昭和63年度) 〈秀英出版刊〉
2. 日本語教育関連教材
 日本語教育指導参考書16 外来語の形成とその教育 〈大蔵省印刷局刊〉
 日本語教育指導参考書17 敬語教育の基本問題(上) 〈大蔵省印刷局刊〉
3. 日本語教育映像教材中級編
 意見の違う人に一問いかえし・反論一
4. 国立国語研究所研究発表会
 平成2年3月28日(水) 午後2時~5時
 テーマ『語彙の計量的研究』
 あいさつ 野元菊雄
 語彙調査自動化のための基礎的研究 中野洋
 異なり語数の推定 山崎誠
 語彙史の比較対照
 -日本語・英語・フランス語・中国語- 宮島達夫
5. 日本語教育研修(101ページ参照)
 日本語教育長期専門研修(平成元年4月3日~平成2年2月23日)
 日本語教育夏季研修
 東京会場 平成元年7月24日~7月28日
 大阪会場 平成元年8月21日~8月25日

V 外国人研究員及び内地留学生の受け入れ

1. 外国人研究員

氏名・国籍・職名	研究題目	研究期間
呂玉新 (中華人民共和国) 中国上海衛生職工学院 外国語学部教師	中日言語の比較	61. 1. 6から 2. 4. 30まで

李 大 清 (中華人民共和国) 北京航空学院外国語学 部日本語教育研究室主 任	和製漢字と和製漢語の研究	62. 4. 1 から 元. 12. 31 まで 2. 2. 1 から 3. 5. 31 まで
孫 盛 寧 (中華人民共和国) 天津師範大学外国語学 部日本語教師	日本語の類義語と類義表現の研究	63. 4. 20 から 2. 3. 31 まで
プレム・モトワニ (インド) ジャワハルラル・ネル ー大学準教授	日本語における口頭語と文章語の対 照研究	63. 10. 1 から 元. 7. 20 まで
キンベリー・アン・ ジョーンズ (アメリカ合衆国) ミシガン大学日本語学 博士課程大学院生	日本語の日常会話展開上の障害につ いて －会話における交渉過程の研究－	元. 2. 7 から 元. 7. 31 まで
林 信 梅 (中華人民共和国) 浙江省海洋水産研究所 翻訳員	代名詞・コンソアド論	元. 3. 7 から 元. 8. 16 まで
高 山 (中華人民共和国) 国際関係学院日本語教 授	日本語対照研究 －語彙、慣用語などを中心に－	元. 4. 10 から 元. 7. 9 まで
エツコ・オバタ・ ライマン (日本) アリゾナ州立大学準教 授	表記法 －情報の性格が文字表記を変える (国字と片仮名の場合)	元. 5. 30 から 元. 8. 31 まで
イリーナ・バス (ソ連) クルプスカヤレニング ラード文化大学外国語 学部長	日本文学作品の語型論及び文章構造 の諸問題	元. 10. 7 から 2. 2. 6 まで

2. 内地留学生

氏 名	勤務・職名	研究題目	研究期間
津波古敏子	沖縄大学教養科助教 授	構文論と語彙論との関係	元. 4. 1 から 2. 3. 31 まで
小林 一夫	軽井沢東部小学校教 諭	文学的文章における文型 研究	元. 4. 1 から 2. 3. 31 まで

3. 外国人来訪者・見学者等

元. 4. 4	文化庁国語課長	河上 恭雄
7	大連外国語学院外国語言研究所編集部副編集長	遲 軍
5. 26	ドイツ日本研究所所長	Josef Kreiner
	“ 研究員	Jurgen Stalph
	“ “	Annelie Ortmanns
	文化庁文化部長	糟谷 正彦
6. 1	ブルネイ国文化青年スポーツ省言語文藝局員 3 人	
28	国立政治大学文理学院東方語系教授	王 兆 徽
7. 13	モスクワ大学講師	マリナ・ドゥナエワ
24	中国社会科学院文献情報センター副研究員	曲 章
	、 “ 語言研究所研究員	候 精 一
8. 1	アジア教育審議会会長	Stephen FitzGerald
	オーストラリア政府外務・貿易省日本課首席	Stephen Kentwell
9. 29	海外日本語教師長期研修生 38 人	
10. 18	第 8 回中国日本語教師訪日団 9 人	
23	豪日交流基金在日事務所所長	Ross Westcott
12. 15	在外邦人日本語教師研修生 29 人	
12. 28 ~	中国社会科学院言語文字応用研究所漢字研究室主任	傅 永 和
2. 1. 12	国家言語文字工作委员会事務室主任	任 鳳 叙
	中国社会科学院言語文字応用研究所実習研究員	胡 士 云
2. 27	北京日本学研究センター日本語研修生 34 人	
28	カリフォルニア大学教授	Francis Hajime Watanabe Dauer

VI 日 記 抄

元. 4. 3	日本語教育長期専門研修開講式
5. 24	第 48 回文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議 (国立京都国際会館) (24~25)

- 5. 25 平成元年度国立学校等経理部課長会議(東京医科歯科大学)(25～26)
- 26 第40回文部省所轄研究所事務(部)長会議総会(京大会館)
- 6. 12 平成元年度第1回基本語用例データベース作成作業委員会
- 28 定期健康診断
- 30 平成元年度第1回日本語教育映画等企画協議会
- 7. 3 文化庁施設等機関庶務会計部課長会議(東海大学校友会館)
- 12 平成元年度第1回日本語教育センター運営委員会
- 19 第116回国立国語研究所評議員会
- 24 日本語教育夏季研修(東京会場)(24～28)
- 25 平成元年度第2回基本語用例データベース作成作業委員会
- 8. 1 平成元年度中国帰国者に対する日本語指導者研修会(東日本地区)
- (文化庁主催)(1～2)
- 2 平成元年度中国帰国者に対する日本語指導研究協議会(東日本地区)
- (文化庁主催)
- 3 平成元年度日本語教育研究協議会(東日本地区)(文化庁主催)
- 4 平成元年度第2回日本語教育映画等企画協議会
- 21 日本語教育夏季研修(大阪会場)(21～25)
- 9. 1 平成元年度第3回日本語教育映画等企画協議会
- 18 平成元年度第4回日本語教育映画等企画協議会
- 21 平成元年度第1回文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議第1
分科会(東工大総合研究館)
- 10. 6 レクリエーション(東京湾船遊び・屋形船)
- 30 平成元年度文部省所轄研究所等所長会議(奈文研)
- 11. 6 平成元年度第3回基本語用例データベース作成作業委員会
- 16 平成元年度文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議(第3部会)
- (大阪ガーデンパレス)
- 16 平成元年度全国研究機関交流推進会議(科学技術庁研究交流センター)

- 11. 17 平成元年度各省直轄研究所長連絡協議会共通問題研究会
(科学技術庁研究交流センター)
- 17 平成元年度文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議(第3部会)
(国立民族学博物館)(17~18)
- 18 日本語教育研究連絡協議会
- 21 平成元年度第5回日本語教育映画等企画協議会
- 24 平成元年度第40回文部省所轄研究所第3部会事務(部)長会議
(神戸大経済経営研究所)(24~25)
- 28 平成元年度第2回文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議第1
分科会(長崎大学熱帯医学研究所)
- 12. 20 創立記念日 記念講演「国語辞典あれこれ」阪倉篤義評議員
- 27 平成元年度第1回国語辞典編集調査会
- 2. 1. 12 平成元年度第6回日本語教育映画等企画協議会
- 2. 8 平成元年度第3回文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議第1
分科会(東工大百年記念館)
- 9 文化庁施設等機関次長等幹部会議(都道府県会館)
- 23 日本語教育長期専門研修閉講式
- 27 平成元年度第4回基本語用例データベース作成作業委員会
- 3. 6 平成元年度各省直轄研究所長連絡協議会定例総会(竹橋会館)
- 8 文化庁施設等機関長会議(文部省)
- 16 第117回国立国語研究所評議員会
- 19 平成元年度第2回日本語教育センター運営委員会
- 23 平成元年度第2回国語辞典編集調査会
- 23 平成元年度日本語教育機関連絡協議会(文部省・文化庁主催)
- 28 国立国語研究所研究発表会

1989 — 1990
ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
CONTENTS

Foreword

Outline of Research Projects from April 1989 to March 1990

A Syntactic Description of Conversation in Japanese

Studies on the Vocabulary Used in TV Broadcasts

Survey of Researches on Writing Systems

A Study of Written Forms of Native Japanese Words in 90 Magazines

Research on Modern Japanese Honorifics

A Study on the Processes in Reading Japanese Texts

Preparatory Study on the Phonetical variations in discourse

A Study for the Production of the "Grammar Atlas of Japan"

Research on the Historical Interpretation of Dialectal Distributions

A Historical Study of Natural Science Terms in Modern Japanese

A Study of the Words Used in the Translations of English-Japanese
Dictionaries

A Contrastive Study of the Literary Styles of the Words Used in
"Karyū Shunwa"

Research on Children's Kanji Acquisition

Preliminary Study of Children's Vocabulary

Pre-literacy: A Developmental Study of Children's Emergent Reading
and Writing

Preparatory Study of Data Orientation

Database of Newspaper Articles on Japanese: Preparatory Study

Compilation of Database for Sociolinguistic Survey — Research
Questionnaires — : a Preliminary Study

Preparatory Study on the Trends of Japanese Linguistics Studies and
Bibliographical Index Making

A Basic Study on the Storage and Retrieval of Large Quantities of
Japanese Linguistic Data

Contrastive Linguistic Studies of Japanese

A Study of Japanese Sentences Focusing on Their Predicate Structure

A Study of the Current State of Japanese Language Teaching —Contents
and Methodology—
A Contrastive Study of Japanese and English
Creative of "Simplified Japanese" and Preparation of Its Teaching
Materials
Contrastive Studies of Japanese and Indonesian
Contrastive Studies of Japanese and Chinese
A Study of Teacher Training for Teaching Japanese as a Foreign
Language —Contents and Methodology—
Assessing Competence and Performance in Language Learning: A Basic
Study
A Study for the Development of Teaching Materials of Japanese
A Contrastive Study of the Discourse Structures in Japanese and Other
Languages

Others
General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
3-9-14 NISIGAOKA, KITA-KU, TOKYO

平成3年1月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14

電話 03(3900)3111(代表)

FAX 03(3906)3530

UDC 058 : 809. 56

UND 810. 5

国立国語研究所刊行書一覧

国立国語研究所報告

1	八 丈 島 の 言 語 調 査	秀英出版刊	品切れ
2	言 語 生 活 の 実 態 —白河市および付近の農村における—	〃	〃
3	現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞 —用 法 と 実 例—	〃	3,090 円
4	婦 人 雑 誌 の 用 語 —現代語の語彙調査—	〃	品切れ
5	地 域 社 会 の 言 語 生 活 —鶴岡における実態調査—	〃	〃
6	少 年 と 新 聞 —小学生・中学生の新聞への接近と理解—	〃	〃
7	入 門 期 の 言 語 能 力	〃	〃
8	談 話 語 の 実 態	〃	〃
9	読 み の 実 験 的 研 究 —音読にあらわれた読みあやまりの分析—	〃	〃
10	低 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
11	敬 語 と 敬 語 意 識	〃	〃
12	総 合 雑 誌 の 用 語 (前 編) —現代語の語彙調査—	〃	〃
13	総 合 雑 誌 の 用 語 (後 編) —現代語の語彙調査—	〃	〃
14	中 学 年 の 読 み 書 き 能 力	〃	〃
15	明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語	〃	〃
16	日 本 方 言 の 記 述 的 研 究	明治書院刊	〃
17	高 学 年 の 読 み 書 き 能 力	秀英出版刊	〃
18	話 し こ と ば の 文 型 (1) —対話資料による研究—	〃	2,060 円
19	総 合 雑 誌 の 用 字	〃	品切れ
20	同 音 語 の 研 究	〃	〃
21	現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字 (1) —総記および語彙表—	〃	3,090 円

22	現代雑誌九十種の用語用字(2) —漢字表—	秀英出版刊	3,090円
23	話しことばの文型(2) —独語資料による研究—	〃	品切れ
24	横組みの字形に関する研究	〃	〃
25	現代雑誌九十種の用語用字(3) —分析—	〃	3,090円
26	小学生の言語能力の発達	明治図書刊	品切れ
27	共通語化の過程 —北海道における親子三代のことば—	秀英出版刊	〃
28	類義語の研究	〃	〃
29	戦後の国民各層の文字生活	〃	412円
30-1	日本語地図(1)	大蔵省印刷局刊	品切れ
	日本語地図(1) <縮刷版>	〃	17,510円
30-2	日本語地図(2)	〃	品切れ
	日本語地図(2) <縮刷版>	〃	17,510円
30-3	日本語地図(3)	〃	品切れ
	日本語地図(3) <縮刷版>	〃	17,510円
30-4	日本語地図(4)	〃	品切れ
	日本語地図(4) <縮刷版>	〃	17,510円
30-5	日本語地図(5)	〃	品切れ
	日本語地図(5) <縮刷版>	〃	17,510円
30-6	日本語地図(6)	〃	品切れ
	日本語地図(6) <縮刷版>	〃	17,510円
31	電子計算機による国語研究	秀英出版刊	品切れ
32	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1) —親族語彙と社会構造—	〃	〃
33	家庭における子どものコミュニケーション意識	〃	361円
34	電子計算機による国語研究(Ⅲ) —新聞の用語用字調査の処理組織—	〃	品切れ
35	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2) —マキ・マケと親族呼称—	〃	〃
36	中学生の漢字習得に関する研究	〃	〃

37	電子計算機による新聞の語彙調査	秀英出版刊	品切れ
38	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅱ)	〃	〃
39	電子計算機による国語研究(Ⅲ)	〃	〃
40	送りがな意識の調査	〃	〃
41	待遇表現の実態 —松江24時間調査資料から—	〃	〃
42	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)	〃	〃
43	動詞の意味・用法の記述的研究	〃	6,180円
44	形容詞の意味・用法の記述的研究	〃	4,120円
45	幼児の読み書き能力	東京書籍刊	4,635円
46	電子計算機による国語研究(Ⅳ)	秀英出版刊	721円
47	社会構造と言語の関係についての基礎的研究(3) —性向語彙と価値観—	〃	品切れ
48	電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅴ)	〃	〃
49	電子計算機による国語研究(Ⅴ)	〃	〃
50	幼児の文構造の発達 —3歳~6歳児の場合—	〃	〃
51	電子計算機による国語研究(Ⅵ)	〃	〃
52	地域社会の言語生活 —鶴岡における20年前との比較—	〃	1,854円
53	言語使用の変遷(1) —福島県北部地域の面接調査—	〃	2,575円
54	電子計算機による国語研究(Ⅶ)	〃	1,030円
55	幼児語の形態論的な分析 —動詞・形容詞・述語名詞—	〃	品切れ
56	現代新聞の漢字	〃	〃
57	比喩表現の理論と分類	〃	6,180円
58	幼児の文法能力	東京書籍刊	5,665円
59	電子計算機による国語研究(Ⅷ)	秀英出版刊	品切れ
60	X線映画資料による母音の発音の研究 —フォネーム研究序説—	〃	〃
61	電子計算機による国語研究(Ⅷ)	〃	〃
62	研究報告集(1)	〃	1,751円

63	児童の表現力と作文	東京書籍刊	6,180円
64	各地方言親族語彙の言語社会学的研究(1)	秀英出版刊	品切れ
65	研究報告集(2)	〃	3,090円
66	幼児の語彙能力	東京書籍刊	8,240円
67	電子計算機による国語研究(X)	秀英出版刊	品切れ
68	専門語の諸問題	〃	4,120円
69	幼児・児童の連想語彙表	東京書籍刊	7,004円
70-1	大都市の言語生活—分析編—	三省堂刊	品切れ
70-2	大都市の言語生活—資料編—	〃	〃
71	研究報告集(3)	秀英出版刊	4,944円
72	幼児・児童の概念形成と言語	東京書籍刊	7,004円
73	企業の中の敬語	三省堂刊	品切れ
74	研究報告集(4)	秀英出版刊	〃
75	現代表記のゆれ	〃	〃
76	高校教科書の語彙調査	〃	〃
77	敬語と敬語意識 —岡崎における20年前との比較—	三省堂刊	〃
78	日本語教育のための基本語彙調査	秀英出版刊	6,180円
79	研究報告集(5)	〃	4,326円
80	言語行動における日独比較	三省堂刊	品切れ
81	高校教科書の語彙調査(2)	秀英出版刊	5,150円
82	現代日本語動詞のアスペクトとテンス	〃	5,150円
83	研究報告集(6)	〃	4,326円
84	方言の諸相—『日本言語地図』検証調査報告—	三省堂刊	品切れ
85	研究報告集(7)	秀英出版刊	〃
86	社会変化と敬語行動の標準	〃	9,270円
87	中学校教科書の語彙調査	秀英出版刊	5,150円
88	日独仏西基本語彙対照表	〃	8,755円
89	雑誌用語の変遷	〃	7,210円
90	研究報告集(8)		品切れ

91	中学校教科書の語彙調査 II	秀英出版刊	5,150 円
92	談話行動の諸相 — 座談資料の分析 —	三省堂刊	2,884 円
93	方言研究法の探索	秀英出版刊	7,210 円
94	研究報告集 (9)	“	品切れ
95	児童・生徒の常用漢字の習得	東京書籍刊	8,034 円
96	研究報告集 (10)	秀英出版刊	5,150 円
97-1	方言文法全国地図	大蔵省印刷局	32,000 円
98	児童の作文使用語彙	東京書籍刊	9,800 円
99	高校・中学校教科書の語彙調査 — 分析編 —	秀英出版刊	5,150 円
100	日本語の母音, 子音, 音節	“	9,000 円
101	研究報告集 (11)	“	5,000 円
102	場面と場面意識	三省堂刊	6,500 円

国立国語研究所資料集

1	国語関係刊行書目(昭和17~24年)	秀英出版刊	品切れ
2	語彙調査 — 現代新聞用語の一例 —	“	“
3	送り仮名法資料集	“	“
4	明治以降国語学関係刊行書目	“	“
5	沖繩語辞典	大蔵省印刷局刊	“
6	分類語彙表	秀英出版刊	1,850 円
7	動詞・形容詞問題語用例集	“	1,751 円
8	現代新聞の漢字調査(中間報告)	“	品切れ
9	<small>牛唐 雑談</small> 安愚楽鍋用語索引	“	1,545 円
10-1	方言談話資料(1) — 山形・群馬・長野 —	“	6,180 円
10-2	方言談話資料(2) — 奈良・高知・長崎 —	“	6,180 円
10-3	方言談話資料(3) — 青森・新潟・愛知 —	“	品切れ
10-4	方言談話資料(4) — 福井・京都・島根 —	“	6,180 円
10-5	方言談話資料(5) — 岩手・宮城・千葉・静岡 —	“	6,180 円

10-6	方言談話資料(6) —鳥取・愛媛・宮崎・沖縄—	秀英出版刊	6,180円
10-7	方言談話資料(7) —老年層と若年層との会話—	〃	6,180円
10-8	方言談話資料(8) —老年層と若年層との会話—	〃	6,180円
10-9	方言談話資料(9) —場面設定の対話—	〃	品切れ
10-10	方言談話資料(10) —場面設定の対話 その2—	〃	〃
11	日本語地図語形索引	大蔵省印刷局刊	1,545円
12	日本方言親族語彙資料集成	秀英出版刊	24,000円

国語辞典編集資料

1	国定読本用語総覧1 —第1期(あ〜ん)—	三省堂刊	品切れ
2	国定読本用語総覧2 —第2期(あ〜て)—	〃	28,840円
3	国定読本用語総覧3 —第2期(と〜ん)—	〃	28,840円
4	国定読本用語総覧4 —第3期(あ〜て)—	〃	29,000円

言語処理データ集

1	高校教科書文脈付き用語索引	日本マイクロ写真	36,050円
2	話しことば文脈付き用語索引(1) —『言語生活』録音器欄データ—	〃	51,500円
3	現代雑誌九十種の用語用字 五十音順語彙表・採集カード	東京都板橋 福祉工場	231,750円
4	話しことば文脈付き用語索引(2)	日本マイクロ写真	

国立国語研究所研究部資料

幼	児	の	こ	と	ば	資	料	(1)	秀英出版刊	3,914円
幼	児	の	こ	と	ば	資	料	(2)	〃	3,914円
幼	児	の	こ	と	ば	資	料	(3)	〃	6,180円
幼	児	の	こ	と	ば	資	料	(4)	〃	6,180円
幼	児	の	こ	と	ば	資	料	(5)	〃	6,180円
幼	児	の	こ	と	ば	資	料	(6)	〃	6,180円

国立国語研究所論集

1	こ と ば の 研 究	秀英出版刊	品切れ
2	こ と ば の 研 究 第 2 集	〃	〃
3	こ と ば の 研 究 第 3 集	〃	〃
4	こ と ば の 研 究 第 4 集	〃	〃
5	こ と ば の 研 究 第 5 集	〃	〃

日本語教育教材

日 本 語 と 日 本 語 教 育 —発音・表現編—	国立国語研究所 文 化 庁 共編	大蔵省印刷局刊	721 円
日 本 語 と 日 本 語 教 育 —文字・表現編—		〃	880 円
日 本 語 の 文 法 (ト)	—日本語教育指導参考書 4—	〃	464 円
日 本 語 の 文 法 (フ)	—日本語教育指導参考書 5—	〃	567 円
日 本 語 教 育 の 評 価 法	—日本語教育指導参考書 6—	〃	品切れ
中 ・ 上 級 の 教 授 法	—日本語教育指導参考書 7—	〃	515 円
日 本 語 の 指 示 詞	—日本語教育指導参考書 8—	〃	515 円
日本語教育基本語彙七種 比較対照表 —日本語教育指導参考書 9—		〃	1,030 円
日 本 語 教 育 文 献 索 引	—日本語教育指導参考書 10—	〃	1,442 円
談 話 の 研 究 と 教 育 I	—日本語教育指導参考書 11—	〃	567 円
語 彙 の 研 究 と 教 育 (ト)	—日本語教育指導参考書 12—	〃	品切れ
語 彙 の 研 究 と 教 育 (フ)	—日本語教育指導参考書 13—	〃	〃
文 字 ・ 表 記 の 教 育	—日本語教育指導参考書 14—	〃	721 円
談 話 の 研 究 と 教 育 II	—日本語教育指導参考書 15—	〃	780 円
外 来 語 の 形 成 と そ の 教 育	—日本語教育指導参考書 16—	〃	650 円
敬 語 教 育 の 基 本 問 題 (ト)	—日本語教育指導参考書 17—	〃	600 円

国立国語研究所年報 秀英出版刊

1	昭 和 24 年 度	品切れ	2	昭 和 25 年 度	品切れ
---	------------	-----	---	------------	-----

3	昭和 26 年度	品切れ	23	昭和 46 年度	464 円
4	昭和 27 年度	165 円	24	昭和 47 年度	品切れ
5	昭和 28 年度	品切れ	25	昭和 48 年度	〃
6	昭和 29 年度	〃	26	昭和 49 年度	〃
7	昭和 30 年度	〃	27	昭和 50 年度	〃
8	昭和 31 年度	〃	28	昭和 51 年度	非 売
9	昭和 32 年度	〃	29	昭和 52 年度	〃
10	昭和 33 年度	〃	30	昭和 53 年度	824 円
11	昭和 34 年度	〃	31	昭和 54 年度	1,236 円
12	昭和 35 年度	〃	32	昭和 55 年度	1,339 円
13	昭和 36 年度	〃	33	昭和 56 年度	1,339 円
14	昭和 37 年度	〃	34	昭和 57 年度	2,060 円
15	昭和 38 年度	258 円	35	昭和 58 年度	2,266 円
16	昭和 39 年度	品切れ	36	昭和 59 年度	2,781 円
17	昭和 40 年度	〃	37	昭和 60 年度	2,781 円
18	昭和 41 年度	309 円	38	昭和 61 年度	2,781 円
19	昭和 42 年度	309 円	39	昭和 62 年度	2,884 円
20	昭和 43 年度	品切れ	40	昭和 63 年度	2,884 円
21	昭和 44 年度	〃	41	平成 元 年度	
22	昭和 45 年度	〃			

国 語 年 鑑 秀英出版刊

昭和 29 年版	品切れ	昭和 35 年版	品切れ
昭和 30 年版	〃	昭和 36 年版	〃
昭和 31 年版	〃	昭和 37 年版	〃
昭和 32 年版	〃	昭和 38 年版	〃
昭和 33 年版	〃	昭和 39 年版	〃
昭和 34 年版	〃	昭和 40 年版	〃

昭和 41 年版	品切れ	昭和 53 年版	品切れ
昭和 42 年版	〃	昭和 54 年版	〃
昭和 43 年版	〃	昭和 55 年版	〃
昭和 44 年版	〃	昭和 56 年版	〃
昭和 45 年版	〃	昭和 57 年版	〃
昭和 46 年版	2,060 円	昭和 58 年版	5,665 円
昭和 47 年版	2,266 円	昭和 59 年版	品切れ
昭和 48 年版	品切れ	昭和 60 年版	〃
昭和 49 年版	3,914 円	昭和 61 年版	8,034 円
昭和 50 年版	品切れ	昭和 62 年版	8,034 円
昭和 51 年版	4,120 円	昭和 63 年版	8,034 円
昭和 52 年版	品切れ	1989 年版	8,100 円

高 校 生 と 新 聞	国立国語研究所 日本新聞協会 共編	秀英出版刊	品切れ
青年とマス・コミュニケーション	日本新聞協会 国立国語研究所 共著	金沢書店刊	〃
国立国語研究所三十年のあゆみ —研究業績の紹介—		秀英出版刊	〃
AN INTRODUCTION TO THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE (1988)			非売品
基礎日本語活用辞典インドネシア語版			〃

日本語教育映画基礎編(全30巻)

(各巻ビデオ及び16ミリカラー、約5分、(開)インターコミュニケーション)

巻 題 名	製作年度(昭和)
ユニット 1	
1* これはかえるです—「こそあど」+「は～です」—	49
2* さいふは どこに ありますか—「こそあど」+「～がある」—	49
3* やすくないです たかいです—形容詞—	49

4* きりんは だごにいますか—「いる」「ある」— 51

5* なにをしましたか—動詞— 50

ユニット 2

6* しずかな こうえんで—形容動詞— 50

7* さあ、かぞえましょう—助数詞— 50

8* どちらが すきですか—比較・程度の表現— 52

9* かまくらを あるきます—移動の表現— 51

10* もみじが とても きれいでした—です、でした、でしょう— 52

ユニット 3

11* きょうは あめが ふっています—して、している、していた— 53

12* そうじは してありますか—してある、しておく、してしまう— 53

13* おみまいに いきませんか—依頼・勧誘の表現— 53

14* なみのおとが きこえてきます—「いく」「くる」— 53

15* うつくしい さらに なりました—「なる」「する」— 50

ユニット 4

16* みずうみのえを かいことが ありますか—経験・予定の表現— 54

17* あのいわまで およげますか—可能の表現— 54

18* よみせを みに いきたいです—意志・希望の表現— 54

19* てんきが いいから さんぼを しましょう—原因・理由の表現— 55

20* さくらが きれいだそうです—伝聞・様態の表現— 55

ユニット 5

21* おけいこを みに いっても いいですか—許可・禁止の表現— 56

22* あそこに のぼれば うみが見えます—条件の表現1— 56

23* いえが たくさんあるのに とてもすかです—条件の表現2— 56

24* おかねを とられました—受身の表現1— 51

25* あめに ふられて こまりました—受身の表現2— 55

ユニット 6

26* このきっぷを あげます—やり・もらいの表現1— 57

27*	にもつを もって もらいました—やり・もらいの表現2—	57
28	てつだいを させました—使役の表現—	57
29*	よく いらっしゃいました—待遇表現1—	58
30*	せんせいを おたずねします—待遇表現2—	58

販 売 価 格

	16 ⅞カラー	VTRカラー(⅜インチ)	VTRカラー(½インチ)
全巻セット	¥ 741,600	¥ 551,050	¥ 444,960
各ユニット	¥ 115,875	¥ 86,520	¥ 69,525
各 巻	¥ 30,900	¥ 22,660	¥ 18,540

第1巻～第3巻は、文化庁との共同企画

* については日本語教育映画解説の冊子（非売品）がある。

日本語教育映画 関連教材（日本シネセル社刊）

日本語教育映画 基礎編 教師用マニュアル（全6分冊）	各分冊 1,030円
日本語教育映画 基礎編 練習帳（全6分冊）	” 515円
日本語教育映画 基礎編 シナリオ集（全1冊）	1,030円
日本語教育映画 基礎編 総合語彙表（全1冊）	1,545円
日本語教育映画 基礎編 総合文型表（全1冊）	1,545円
映像教材による教育の現状と可能性（全1冊）	2,575円

日 本 語 教 育 映 像 教 材 中 級 編 一 覧

（各巻ビデオ及び16ミリカラー、約5分、開インターコミュニケーション）

セグメント	題 名	制作年度（昭和、平成）
ユニット 1	初めて会う人と —紹介・あいさつ—	
1	自己紹介をする —会社の歓迎会で—	61
2	人を紹介する —訪問先の応接室で—	61

3	友人に会う	—喫茶店で—	61
4	面会の約束をする	—電話で—	61
5	道をきく	—交番で—	61
6	会社を訪問する	—受付と応接室で—	61

ユニット 2 人に何かを頼むとき —依頼・要求・指示—

7	届出をする	—市役所で—	62
8	買物をする	—デパートで—	62
9	打合せをする	—出版社で—	62
10	お願いをする	—大学で—	62
11	手伝いを頼む	—家庭で—	62
12	友達を誘う	—友達の家で—	62

ユニット 3 人のことばにこたえて —承諾・断りと注目表示—

13	お見合いを勧められる		63
14	お見合いをする		63
15	提案をする		63
16	仲人を頼む		63
17	結婚式場を決める		63
18	スピーチを頼む		63

ユニット 4 意見の違う人に —問いかえし・反論—

19	イベントを提案する		元
20	相談をまとめる		元
21	打ち合わせをする		元
22	交渉をする		元
23	会場の準備をする		元
24	討論をする		元

販売価格

	16 7/8カラー	VTRカラー-(3/4インチ)	VTRカラー-(1/2インチ)
各ユニット	¥ 162,225	¥ 97,850	¥ 76,220
各セグメント	¥ 36,050	¥ 38,110	¥ 30,385